

喬は手をトン／＼と鳴らす。同時に襖の蔭を慌てて飛退いた女があつた。それは田鶴子であつたが、すぐ後戻りして書齋へ来て何気ない顔で手を支へる。

『お、田鶴さん、鍋島君と久し振りで大いにやるから、何かうまいものを注文してくれ。御自慢の西洋料理も一皿位ならば辛棒するぞ。』

『あら、よくつてよ。今に姉さんが入つしつたら、たんと御注文をなさい！』

『えらい／＼、田鶴さん、大出来だ。』と鍋島はから／＼と打笑ふ。

## (十八)

倭文子は自分に關するどういふ恐るべき浮説が、わが未來の良人の上に投られたらうとも知らずにまた一週間を過した。この間に充分の覺悟は出來たけれども、自分の前途は幸福に導びかれつゝあるものとは、どうしても信ずる事が出來なかつた。

併し誰でも今度の倭文子の結婚を良縁として喜ばぬものはない。藤乃も最先に喜んだ一人であつたが、たゞ倭文子の沈んで居る容子が、氣になつてならぬ。どこへも往ずに獨身を運せる貴嬢が羨やましいと、思ひ込んで云つた倭文子の素振がまだ目に残つて居る。どういふ譯でこの縁談を望まぬのだらう。外に倭文子の慕つて居る人でもあるのではないかと疑つて見たが、

併し假にもかういふ疑を起すのは倭文子を侮辱する者であると思つた。不思議と藤乃は倭文子と正木の間柄に就ては、嘗て一點の想像をも加へた事が無かつたのである。

倭文子の容子も知りたく、解き得べくば自分の疑惑も解きたしと、藤乃は午前の時間を利用して川上邸を訪づれた。そして先程から倭文子の居室で話をして居る。藤乃は此前よりは倭文子の運命に安んずる容子が明かに見えるので、いくらか心を休めたが、併し眉のあたりにかゝつた一點の曇は少しも取れて居らず、胸に悲哀を包んで人に語るを好まぬ女の様に思はれたので、譯もなく自分も惹入れられるやうになつた。併し倭文子は遂に少しも胸の秘密の緒を解かぬので、藤乃はやはり目も鼻もつける事が出來なかつたのである。

藤乃は話頭を浮世話に轉じて、

『あの昨日また藤本さんが居らつしつて、いろ／＼の話をして居らつしやいましたよ。婦女新聞の記者をしてらつしやるだけに、いつもよくまあいろんな事を、耳に留たり目に留たりして居らつしやいますわねえ。』

『さうねえ、昨日はどんな話をしてらしつて？』と自分が噂の種にでも上りはせぬかといくらか氣にならぬでもない様子。

『あの、松平様の事を仰しやつてらつしやいました。』と妙に倭文子の顔を見る。

「え、松平様の事？」と倭文子は若や正木に聞いた此間の災難が、松平の口から其處此處へ吹聴されたのではないかと案じた。

「あの方がね、このごろ新橋かどこかで、自棄遊をしてゐらつしやるんですつて……」

「まア……、そんな事を——？」

「その原因を貴嬢御存知ないでせう。」

「いゝえ、ちつとも。」

「ほんとに覚えがない事？」と藤乃は笑つて「原因はアノ貴嬢なのよ。」

倭文子は顔を染め出して、

「まア酷い事を——」

「だつて貴嬢、いつか松平さんからのお申込を拒絶なすつたでせう。それに今度久松さんへ嫁つしやるから、それで自棄を起して居らつしやるんですつて。藤本さんまでそんな事を仰しやるのよ。」

「藤本さんが——？」

「さうよ。どうして御存知なんでせう。いくら女記者でもそんな事はねえ……」

藤本が知つても知らなくても、そんな事よりは倭文子は何か松平が氣の毒でならぬ様な感じが

仕始めた、果して自分のため自暴自棄に陥つて居るとすれば、罪はまた此方にもある様に思はれて、氣が咎めてならぬのだ。

「松平様の事はほんとでせうか。」

「きつとほんとでせうよ。だつて男らしくも無いわ。」

話が一寸途切てから、

「それからこんな話もあつてよ。やつぱし後では松平様の事になるのですが、藤本さんが、大變に奇妙な事があるつて前置して仰しやるのよ。それは一昨日か日佛協會の記念園遊會とかであつたのですとさ。協會に關係のある紳士や貴婦人の方のお寄合なのでせう。伯爵も御出席遊ばしましたが、どういふ縁故からか、立花錦子さんも來て居らつしやつたのですつて、……ですから藤本さんがまたかと氣をつけて居らつたのでせう。」

藤乃は語を次いで、

「さうするとまさか挨拶位はなすつたのでせうが、錦子さんはちつとも伯爵のお傍へ行らつしやらないのですつて、此前の婦人會の時と對照すると、餘程不思議だつたと、藤本さんは何にも御存知なしに仰しやるんですの、ほゝ、お話をそれだけちやアないのよ。松平様もお小さい時、お父様と御一緒に佛蘭西に居らつしたとかで、御出席なすつたさうですが、さうすると伯爵

を忘れたやうになすつた錦子さんが、今度は松平様の後ばかりを追つて居らつしたといふんですの。』

『ほんとでせうか。』と倭文子は打笑んだが、『松平様なら錦子さんを奥様になさるかも知れませんわ。』と眞面目になる。

『だけでも貴嬢、錦子さんはよく神聖の戀を解した、理想の高い方でなければ決して結婚しないつて仰しやつたでせう。そればかりか、松平様のやうな氣障な厭な方はないつて仰しやつた事もあつたわ。それもつい此間のことなのに、如何に何でも今更ねえ——』

この話半ばへ小間使が来て、

『アノ立花様がお出遊ばしました。』

『おや、噂をすれば影よ。』と二人は顔を見合せて、『ちや、磯、こちらへお通し申しておくれ。』

錦子は倭文子の居室へ案内されると、その惡氣のない明るい顔に笑を含んで二人を見たが、座に就くと倭文子に會釋して、まづ此度の結婚に喜びを述る、それが済むと藤乃への挨拶が暫時、其終つたころ氣が定紋抜の大風呂敷に包んだ籠盛を持つて出て錦子からの祝の品を披露する。倭文子からの禮などいろ／＼あつて座がくつろぐと、

『ほんとにこんなお目出度い事はないわ、ねえ、藤乃さん、みなさんが羨やましがつて大變な

評判だわ。』

『ほんとにお目出度いわねえ。』

倭文子が慎しげに黙つて居るのでこの話が済んで了ふ。藤乃は錦子を相手に、

『錦子さん、今度は貴嬢の番よ。貴嬢こそきつと理想の方をねえ……』

『あら、私なんかいつの事だか……。それに理想の方をどうのかうのと云つたところで、日本のやうな社交の發達しないところでは、十分な交際も出來ず、なか／＼思ふやうには行けない事よ。その上始めにこの人ならと思つた方でも缺點が見えたりなんかして、理想と違つて來れば、自然交際を續ける譯にもいけなくなりますね。ほんとに考へると厭になるわ。』

『貴嬢、もうさういふ事がございましたの？』と藤乃は人が悪い。

錦子は追に顔を赧めて、

『いえ、私、そんな事は有りませんけれども……』

『貴嬢、一昨日は日佛協會の園遊會へ行らつしやいましたつてね。』

『は……、どうして貴嬢……？』あの伯爵から？』

藤乃はたゞ首肯して笑顔を作りながら、

『松平子爵も行らつしたでせう。』

『はア。』と錦子は済したもので、『いろいろ面白うございましたよ。』

『餘興か何かございましたの？』と今まで黙つて二人の話を聞いて居た倭文子が口を挿む。

『え、餘興もありましたけれども……松平様は佛語をお話なさるのね、私、感心してよ。』

『そりやアお小さい時に佛蘭西に居らつしたからでせう。』

『そしていろ／＼多方面に興味のある方ね。昨日は私の宅へ入つしやいましたの。』

『松平様が貴嬢のお宅へ？』と藤乃は意味有りけに倭文子と顔を見合せた。

『あの園藝がお好なので、宅の盆栽を見にいらつしやいましたの。父が御懇意なものですから……』

『おや、どうして御懇意になすつて？』

『あの、父は何でも前から御懇意なのよ。』と言葉を曖昧にして云つたが、それは怪しい、どうして錦子の父が松平と懇意を結んだかは疑問である。併し松平が錦子の宅へ出掛たといふのは事實だらう。無論錦子の父が招待したものと思はれる。藤乃と倭文子に取つては意外の消息であつた。

併し藤乃も倭文子もその上深入しては尋ねなかつた。松平の話はこれで済んで了ふ。なほ二三の雑談の後に錦子は午後に約束のところがあるからと云つて辭して歸つた。

錦子を送り出した後で二人は顔を見合せながら、

『まあどうしたんでせう？』

『松平様の事？』

『ほんとに分らないわね。』と藤乃は意味有りけに笑つて、『今日は理想の方だと仰しやらない許だわ。まあ！』

『よくねえ。』とこれも詞よりは目に物を云はせて首肯したが、『併し松平様が自暴自棄なさるつて眞實でせうか。』と倭文子はまたそれが心配になる容子。

『さア、どうですか。併し前にも彼方にはそんな噂があつたでせう。形跡もない事ぢやないと思ふわ。だつて貴嬢の責任ぢやない事よ。』

話は暫らく切れてやがて他の題目に移る。倭文子は松平の事から縁を引いて。此間正木が思ひも寄らぬ災難を救はれた話を語り聞かせた。

こゝへ磯がチヨコレートを入れて来て、二人の前へ差置いて行かうとする。倭文子は呼びよめて、

『あの磯、正木は今日學校へ行つたかい。』

『いゝえ、今日はお休みで、お部屋に居らつしやいます。』

「ちやアね、藤乃さんが来ていらつしやるから、お暇があつたら入らつしやいつて——」  
藤乃は驚ろき顔に、

「あらもういゝ事よ。正木さんは試験中で居らつしやるでせう。お邪魔になるといけませんわ。それにお目にかゝらない方がいゝんですから……」

「いゝえ、試験はもう大方済んで了つたのよ。だつていゝわ、磯、構はないの、さう云つていで。」

「でも貴嬢——」

磯はもう行つて了つた。

「悪かつたら私が謝るから遭つて頂戴な。」

倭文子が何のために正木を呼ぼうとするのか、その真意は分らぬ。多分二人の清い友として呼ぶつもりであるのだらう。

「だけでもお目にかゝるのは何だか——」

藤乃が迷惑さうにして居る中に、早くも正木の姿は表はれる。

「や、遠山さんですか。」と例の通り極めて淡泊な調子である。

「暫らくでございませう。」と藤乃も清く挨拶して「あの試験中でお忙しく居らつしやるでせう。」

「なに明日一寸行けばもういゝです。」

「この間は学校のお出際に、飛んだ御災難でございましたつてね。只今倭文子さんから伺ひました。」

「はア、實に驚ろきましたよ。何しろ大道の真中で姦夫呼はりをされるんですからなア。」

「まアどんなに御難儀なさいましたらう。狂人なんでしょうございませうねえ。」

「いづれ嫉妬狂とでもいふんでせう。女の嫉妬は或場合に止むを得ぬとして、男の嫉妬といふ奴は實に厄介ですな。」

「さうでございますねえ、ほゝ、……女の嫉妬でもねえ。」と頬を染めて笑ながら倭文子を見る。

倭文子は首肯いて、

「一ツは性質ね。でも男の方でそんなのが有るでせうか。」

「私の知つてる方にもそんなのが有つてよ。それは小學校の教員をしてた方ですが、細君が隠し男でも持ちはしないかつて、それを心配した揚句、たうとう學校も退て了ひ、それから細君の居室を筆筒や本箱ですつかり圍つちまつて、次の間につきつきりなんですわ。細君が買物に行くのでも、お湯屋へ行くのでも従つてお湯屋では外に立番をしてるのよ。病ですわねえ。だから男の方と口でも利うものならそれこそ大變……おほゝ、まるで蛇か何かに見込まれたや

うですね。それでも別れる事も出来なくつて、いまだに暮して居るのよ。……女は因果ねえ。』  
 『いや同情します。』と正木は笑つて口を挿んで『それでは代書先生と同じですね。』  
 『一人位しきやないかと思つてましたのに、まだそんなのが有るんですかねえ。』とかういふ倭  
 文子は何かいとどしく不安の念を感じ始めたのである。併し何のための不安か自分にも分らな  
 かつた。

單にそのためではないらしく、倭文子はその前から言葉數も尠なく、次第に神經的になつて  
 來る様子が見えて居たが、今話の絶間、正木が、

『別に御用事ありませんければ私は——』と立上らうとすると、慌てたやうに、

『正木、ちよつと待つて下さい！』

倭文子の容子が何か變つて居たので、正木は訝しげに再び腰を据ゑながら、

『は……？』

藤乃も怪しみながら倭文子の顔を注視する。

『正木、私は藤乃さんの前で、折入つてお願があつてよ。』

『は、どういふ事でございますか。』と正木は形を改める。

『アノ藤乃さんの事をモ一度熟考して下さいな！』と思ひ込んだ調子で云つた。

藤乃は倭文子が突然こんな事を言出したのに驚ろいて、迷惑らしく、

『あら倭文子さん、その事はもう仰しやつて下さいますな。私は十分運命に満足して居るんです  
 から……。何か未練があつて、貴嬢にお願申したやうで、正木さんの前もお恥かしうございま  
 す。』

然し倭文子は一所懸命の様子、

『いえ、貴嬢が運命に満足して居らつしやる事は私もよく知つてよ。またそんなお頼をな  
 さる貴嬢でない事は、正木にもちやんと分つてよ。……そりやア正木、藤乃さんはもう立派  
 に覺悟なすつて、少しも未練など持つて居らつしやらないのですけどもね、たゞそれでは私  
 が心に濟ないのだから……。』云ふ中にもまた次第に神經的になつて來て、『これは私の最後のお  
 願なのよ。正木（と力を込め）私はね、久松へ嫁つたら、もう二度とこの川上の國は跨がないか  
 らね、それはもうちやんと決心をして居るのだから……。』と聲は震へて、『私がこの通りに決心  
 した事を——よく決心したと思つて下さるなら……。貴君もすぐ卒業なさるんだし、その上で、  
 どうぞ藤乃さんを奥さんにして下さい！』熱誠を双の眼に籠めて、『それでないと私は——私  
 は——』後は情の昂ぶる風情で詞が咽喉の中に消えて了ふ。

倭文子の容子は實に感動的であつた。倭文子が藤乃を前に置いて、この事を正木に強たのは

これが始めてある。

藤乃はなぜ倭文子が自身の結婚の覺悟と連結して云ふのか、此時は分らなかつたが、たゞ譯もなく倭文子がこれほどまで自分の事を思つてくれるのかと、心を動かされずには居られなかつた。

正木には倭文子の意味は明瞭である。明瞭であるだけそれだけ極めて深刻に心を動かされたに相違ない。彼は両手を膝に突立たまゝやゝしばし俯むいて居たが、漸くにして顔を擧ると、何か決するところあるかの様子で、

『いや貴嬢のお心はよく分りました。然し私の獨身の決心は貴嬢が何と仰しやつても動かす事は出来ません。たゞこの事だけを誓ひませう。それで御満足を願ひます。それは私が若し假に妻を娶る場合があるとすれば、必ず藤乃さん以外の婦人を迎へぬといふ事です。』

倭文子は救はれたやうに、ほつと太い息を吐いたが、

『それならいつその事、モ一步進んでそれを事實とする事はいけなくつて？』

これは隨を得て蜀を望むものである。倭文子とても必らずしもそれを主張するものではあるまい。

『それだけは私の意志を立として頂きます。私は到底肉體上の妻として藤乃さんを迎へる日は

ありません。私の裏心は今も藤乃さんが心を翻へして伯爵夫人となるの日あらん事熱望して居ります。……併しどうしても決心を翻へさぬと仰しやるならたゞ肉體に對した心靈上の妻として、それに御満足を願ふ外ないのです。』

此間藤乃は激しく心を動かされて俯むいて居たが、やがて顔を擧ると涙ぐんだ眼は希望に輝き渡つて、聲を震はせながら、

『正木さん！ 最前からのお詞——殊に只今の最後のお詞を承まはつて、私、この上の満足はございませぬ。心靈上の妻といふ名をお許し下さるなら、一生をその名のために捧けて少しも憾とは存じませぬ。』

『それは貴嬢の御自由です。』と追がに正木の聲も震を帯びた。

『倭文子さん、貴嬢にはどうしてお禮を致しませう。』と情に迫つた藤乃は倭文子の手を取ると、ハラ／＼と熱涙が溢れて落ちる。

(十九)

この同じ日の午後錦子の姿は、歌舞伎座の二階正面特別席の中に見えた。他に約束があるからといつものに似ず、そこ／＼に倭文子方を辭したのはそのためであつたに違ない。午前の服装

と引かへ、白いものさへ化粧つて、翠簾入御殿風の襖を背後に、装晴のした錦子の姿、誰が目にもさる交際好な華族の姫君か、名ある紳士の令嬢であらうと首肯かれて、四邊を拂ふ風采、なにさま近所の見物の焼點となるも無理ならぬ。

節は六月半、今流行の粹に止を刺した空色の、見るから涼しげな橋立縮緬の單衣姿、芝居行といふので、表には態と模様なしの三ツ紋を擇び、裏模様だけに合歡草ほかに寫生風の蝶の縫をした贅澤な好、半襟は白地の紹絹縮にこれも蝶模様、金糸入の縫をしたのに金剛石と眞珠入のピンを刺し、立居にこほるゝ長襦袢は、大きな雪輪を紅入匹田で表はした同じ白地の紹絹縮、帯も白地の厚板織に銀糸とお納戸で大波を織出した極めてさつぱりしたもので、何とも云へぬほど空色の着物と調和がよく、誰でも一寸振り返らずに居られぬ華かさ、ほのかに見ゆる朱鷺色絹縮の帯揚、秋草模様織出の朱色綴織の帯止もまたこの服装を引き立てゝ居る一ツであらう。

左右の棧敷には贅澤を見得の令嬢や貴婦人も少なくない。夏向はすべてが意氣に流れる中にも、派出で意氣な好みもあれば、澁くて意氣な好もある。意氣にだけ流れて花柳界の婦人と見紛ふやうな下品なものもある。とりくゝの花の咲亂れた中に、派出で意氣でそして品位を失はぬ錦子ほどの出立はまづ見えなかつた。

變りエス巻の束髪を大きな水色のリボンで止めて、草花模様透彫石入の三枚櫛、その一枚は前髪を中ほどで押へて、大形の銀線の蝶を左へ止めた。錦子の身のまはりにはいつも蝶を放れた事がない。竹つなぎの白金交り、緒締にルビーの簪つた首掛の金鎖が、ふつくりと目立ぬほど乳膨れのした胸のあたりから、銀糸の男波女波へちらちら。前の手すりにかけた左の指には、金剛石の光がきら／＼と輝やく。

錦子は素より一人で来て居るのでは無かつた。錦子の傍にはお召縮緬の變綺に茶無地綴の帯を締て、壁紹、黒五ツ紋、銀鼠色籠打の紐を結んだ一人の紳士が居る。藤乃や倭文子に見せた如くに驚ろくであらう。それは子爵松平亮二郎であつた。その外には女中が一人居るばかり、それは錦子が連れて来たのであらうか、それにしても外に誰も居らぬのは不審である。

芝居は中日過であるが、近來にない評判なので、土間も棧敷も大方は人で埋められて居る。但しこゝだけは特別席の別世界、錦子の場所の左右も後も明て居るので誰に氣兼ねない容子、今狂言は、一番目の會我が済んで幕を引いたところ、錦子はほつと残り惜しげの溜息一ツして、『まア面白うございました事！』と呟やきながら女中を顧み、『何度見ても飽ないわねえ。』

『ちや貴嬢は何度も御覧になつたのですか。』と亮二郎は笑顔を作る。『えい、あの三日目に一度見物しましたから……でも切を見ずに歸つたのでございますもの。』



とこれも笑顔。

『芝居は大抵御覧になりますか。』

『歌舞伎ですと大抵見物いたします。』

『芝居は實に面白いですねえ。私も大好きです。これから度々お伴したいもので……』

『えい、どうぞ私こそ——』と嬉しさう、『今の十郎はようございましたわねえ。』

『羽左衛門でも高麗藏でも、手馴れた役でせうからね。いや息も吐かない面白さでした。』

『それに芝翫の龜菊が美しうございました事！』と恍惚と憧がれたやうな眼付をする。

一寸話が切ると女中、

『旦那様はどうしてお遅いのでございませう。』

『さうねえ。』と錦子は時計を出して見て『もう、三時半だわ。どうしたのかしら。』

こゝへ出て来たのが茶屋の男衆。

『お嬢様へ旦那様からの電話でございます。』

『さう。』と錦子は亮二郎に會釋して男衆に連れられて特別席を出て行く。

程なく歸つて来た錦子、

『アノ松平様、變に困つた事が出来ましたのでございます。』と肩を撃て心配な容子をする。

『お父さんでもどうかかなすつたんですか。』

『いえ、あの横濱の方へ急用が出来て、會社の方からすぐ出かけなければならぬから、今日は芝居へ行けぬと申すのでございます。』

『あは、それだけの事なら何も心配なさる事はないでせう。私は何事か出来たのかと思ひましたよ。』と云つたが俄かに思ひついたやうに『あ、併し何ですな。お父さんが居らつしやらないとすると、貴嬢は大變に御迷惑ですね。これはちとうつかりでした。』

『あれ、私はちつとも迷惑な事はございませぬ。たゞ父がまゐりませぬでは、貴君が嘸御迷惑を遊ばすだらうと、それが何よりの心配なのでございます。』と媚ある眼を亮二郎に注ぐ。

『いえ、私は少しも迷惑な事は有ませぬ。お父さんのお出のないのは残念ですが、貴嬢さへ御迷惑でなければ、ゆつくりと見物しようぢやありませんか。』

錦子は嬉しさうな態をして、

『それでは御迷惑ではございませぬの。』

『は、迷惑でないと云つてはありませぬか。』

女中は粹を利したのか、立つて階下へおりて行く。

『錦子さん、私は今までもお父さんのお出が一刻でも遅くなればいと思つて居たのです。』と

笑ひながらいふ。

『私、どんなに嬉しうございませう。』と上眼使ひに莞爾。『父は横濱の方が急ぐので、お目にかかつてお詫をしてまるる譯に行かぬから、今お申譯の手紙を差出したが、よくお前からお詫をするやうにとの事なのでございませう。どうぞ悪からず思召を……』

話の中に男衆がその手紙を持つて来た。亮二郎は開いて読んで見て、

『錦子さん、これには貴嬢を私に預けると書てありますよ。預つたからには貴嬢がいくら迷惑だと仰しやつても、もう返しませんから、人身御供にあがつたと思つて居らつしやい。』

錦子は耳朶まで染出して、

『どうぞそれではお預り遊ばして下さいまし。』と思ひきつた積りが半分は口の中恥かしけに慍むいた。

途端に賑やかな鳴物の音、木が入つて二番目の幕が明く。

錦子は餘り口數も利すに見物はして居たが、心は舞臺の上にはない容子、兎角する中に幕が縮ると無意味に亮二郎と顔を見合はせてにつこつと笑つた。男衆が用聞に來たのをきつかけに、憚りに行くとして錦子は女中と共に座を立上る、後に亮二郎は茫乎として居たが、三階の休息所へ行くつもりで、立上らうと片膝立てたところへそつと忍んで來た女がある。勝色地高麗格子

の鶉縮緬に泥入黒繪風の芭蕉模様を染出した白瀧瀬の丸帯を締た意氣な藝者風、髪は太輪の香返に結つた廿五六が、いきなり亮二郎の脊を叩いて、

『御前、何を茫乎して居らつしやるんですよう、憎らしい。鯉ちゃんに言つけますよ。』

『お、いつの間に来たんだ。』遠に亮二郎は驚き顔。

『ちよいと、奥様？ まだそんな筈はないのね。情婦？ ちや飛だ失禮を、何にしても鯉ちゃんが聞たら地團駄踏んで悔しがらうねえ。白狀遊ばせよ。ちよいと今の間にさ。』と忍び聲。

『冗談を云つちやいかん。あれは妹だよ。』

『お妹様？ 御兄妹といふ風ですか。人を馬鹿にしてらつしやるよ。第一そんなお話は承はつた事がございませんからね。』と嘯ぶく。

『そりやアお前達が知らんまでだよ。』と飽までも眞面目顔なのに、女はどうやら煙に巻かれて、

『ちやほんとうにお邸の姫様？ 嘘よう、御前、眞直に白狀遊ばせ。』

『妹が歸つて來ると困る。今便所に行つたのだから。』とどこまでも女を追やる計略。

『さうかしら、ちやきつと探偵しますから覚えてお出遊ばせ。』と捨臺詞、歸つて來られてはと、尻こそばゆけに出て行く途端、特別席の入口でハタと錦子に遭つたので、遠がに慌てながら、會釋をして逃るやうに急いで行く。錦子はその後姿を見送つた眼を、すぐ亮二郎の方に投けた

が、此方は素知らぬ顔で葉巻をすばりく、天井の花模様に眺め入る。

倭文子の結婚の日取は流れるやうに近よつて来る。倭文子の決心は、正木が藤乃に誓をしてからは、いよ／＼固いものになつた。たゞ決心の固くなつたにも拘はらず、この結婚を喜ぶ兆がまだ少しも見えぬので、磯はそれを少なからず憂へて居る。

結婚の衣裳も先程出来て来て、民子が受取つたのを、今磯が亂函へ入れてかゝへて来た。

「お嬢様、お召ものが出来上つてまゐりました。ちよいと御覧遊ばせ、目が覺るやうでございませうよ。」

倭文子は懶けにその方に目を濺いだが、手に取らうともせず、

「お母様にお目にかけてのかえ。」

「奥様は御覧になつて、大層よいとお喜び遊ばして居らつしやいました。」

「さう。」と云つたまゝ目を外へ移してしまふ。

「あれ、お嬢様、貴嬢は御覧遊ばさないのてございませうか。」と磯の目は濕んで居る。

「今見るわね。もう出来て来たのかねえ。」

「もう出来て来たのかねえつて、お嬢様、約束の日よりは三日も遅れて居ります。まだ出来な

いかと氣をお採遊ばすのが普通ではございせんか。ちつとはお喜び遊ばすものでございませう。と怨じながら亂函を前へ押やつて『何とも云へない染上りでございませうよ。御覧遊ばせ。』倭文子は上に乗つた緞の振袖を手に取上げて見る。薄空色へ大きな雪輪を白く、中へ笹をあつさりと染出し、金糸の縫を交へた大模様、この上もなく瀟洒とした上品な衣裳である。

「派出ちやアないかしら。」

「何のこれが派出でございませう。夏の衣裳でございませうもの。ちつとは模様でも大きくなければ引立はいたしません。」

「いゝわねえ。」と始めてにつこり。

磯は嬉しく、

「ほんとにこれをお召遊ばしたお姿が拜見したうございませう。」

こゝへ母の民子と富美子が入つて来る。民子にはこやかに、

「倭文さん、大層善く上りましたね。帯と映りが善いからどんなにか引立ませうよ。」

「はい、大層善く出来ました。」

「ちよいと着て御覧なさい。」

「えい、もう澤山でございませう。」

『いゝから着て御覧なね。』

『お嬢様、ちよいと召して御覧遊ばせ。』と磯は母の意に反くなど眼で知らせる。

『ちや着て見ませう。』と倭文子は快よく立上つて姿見の前。

母はその間に白絹の襟のついた、朱鷺色紋に、秋草を地紋縞で出した長襦袢と縞の振袖を重ねて、倭文子の背後に立ち、肌襦袢一ツを残して、つるく〜と着て居た單衣を滑らせる後から、ふはりとそれを着せかける、襟を持つて裾を捌くと、長襦袢の秋草が溢れて、雪輪の衞にもつれて彫いた。

細腰を括つてしなやかに、振の袂をすらりとした兩の肩に擔ぎ上る。と白地縞唐織にこれも秋草模様を織出した品のよい丸帯を、磯と母親とが二重に廻して、シャンと結んだお太鼓に、白紋縮緬の扱帯を引締る。帯揚は紋縞の紅の目もあやに、時ならで室の中に今を春邊と匂ひこぼるゝ花一輪！

『まアお似合遊ばしました事！』と磯はまづ惚々と眺め入る。

『ほんとに何んなに似合ふだらう！』と民子もにこ〜。

『さうでございませうか。』と倭文子はつゝまじやかに腰の邊を見返る。

『これで高髷にお結遊ばしたらどんなでございませう。』

今まで一所懸命に見て居た富美子、眼を圓にして、

『アノ姉様、高髷に結つてお嫁にいらつしやるの。』

『さア、どうですか。』と倭文子は淋しく莞爾。

『お母様、さうなの？』

『あゝさうですよ。』と首肯いて、磯を顧みながら『帯の色氣と着物がほんとによく映るわねえ。』

『左様でございますよ。私はもう震ひつきたいようでございます。』

『夏の衣裳だから、どれほど仕やうと思つても、これより上には仕方がなしね……』

『さうでございませうとも。このお姿に點の打ちどころはございませぬ。』

『倭文さん、あのお父様にお目にかけて入らつしやい。どんなにかお喜びなさるから。』

『いえ、もう澤山……お父様なんか御覧にならずとも……』と口の中、

『澤山な事はありません。』と笑ひながらたしなめるやうに云つて『お父様に御覧に入れるのが當然です。さ、私と一緒にいらつしやい。』

倭文子は仕方がないので、極りわるけに母の後、家内のものに見られるのも恥かすと、面はゆげにわが居室を出ると、庭を隔てゝ彼方の廊下へ、折柄來かゝつた正木と端なく顔を合はせ

たので、われにもあらで上氣しながら俯むいたが、心を取直すと母について父の居室に入る。

(二一)

長かれと祈る日は過易く、明日はいよいよ興入の日取に迫つた。川上家は數日來その準備に忙殺されて居る。倭文子に取つては一步々恐ろしい谷に進んで行くやうな心地である。覺悟した身ながらも自分は果して妻としての充分の愛を良人の上に醸ぐ事が出来るであらうか。と考へるとそれさへ心許なく思はれる上に、最も倭文子の心を寒からしめるのは姑と小姑とである。田鶴子には二度遭つた丈ではあるが、自分の同情者でない事を直覺的に悟つて居る。姑についてはまだ何も知らぬが、鍋島夫人に氣の六かしい人だと注意された事から想像して、田鶴子以上に機嫌の取悪い人であらうと思つて居る。姑や小姑がなかつたならば、自分はこれほどこの縁談を恐ろしいものと思ふ事はあるまいと、自らも考へる位であつた。

倭文子が婚約の定まつて後、多く垂簾勝に暮して居た事は、いくらか父將軍の注意を惹くに至つた。將軍は一度磯を呼んで聞た事があるが、磯も約束の出来ぬ前なら兎に角、既に定まつた後なので、何もかも父將軍に打明けて訴へたい心は山々であつたけれども、遂に忍んで何事をも云はなかつた。それから後將軍は心を安んじて居たが、何かまた多少の憂慮が残らぬでも

なく、一度は自らその事も確めたく、なほ嫁入りまでに言聞かしたい事もあると思ふので、明日の式を控へた今日といふに、倭文子を居室へ呼寄せた。

『倭文、乃公は一度聞かうと思つて居つたのちやが、そちはこの縁組を嫌ふのではあるまいの。』と父は優しく慈愛に充ちた眼光で尋ねた。

倭文子はハツとして、

『お父様、そんなことは決してございませぬ。』

『ウム、さうかの。』とつく／＼倭文子の顔を眺めながら『尤も今そちが嫌つて居るといふたところ、今ではどうする事も出来んのちやから、目を眠つてども嫁つて貰はんければならん。』  
『あれ、お父様、私——私、喜んでまるるのでございませぬ。……もう充分覺悟を致して居りますから、どうぞ御安心遊ばして下さいませし。』と力を罩て云つた。

『それなら乃公も安心ぢや。……ウム、そちは充分に覺悟をして居るの？』

『はい、……覺悟は致して居ますが、……私のやうなものがどうして彼方のお母様のお氣に入る事が出来るかと……それがたゞ心配でございませぬ。併しこれが倭文子の唯一の心配なのでは無かつた。』

『いや、乃公も聞いとる。どの道そちは一苦勞せんければなるまい。……覺悟をして居ると云

へば、乃公から言聞かす迄もあるまいが、——どこ迄も先方の家風に従はんければならん、親里の事を鼻にかけてはならん、また二度と川上家の人にならうと思つてはならん。よいか、乃公は多言せん、たゞこの三個條を乃公の饒ぢやと思つてくれい。」

倭文子は深き決心の色を見せて、

「はい、どんな辛い事でも辛棒致します。そして彼方のお母様のお氣に入るやうに致します。またこの上川上家へ歸つて來やうなどは思ひません。私はどんな事があつても（と力を盡めて）久松の外には二度の良人を迎へぬ決心でございます！」

「ウム、その決心なら大丈夫ぢや。」

倭文子は父の前を辭してわが居室へ引取つた後、無量の思に搔暮るゝ風情で、机の前にしよんほりと坐つて居たが、式を擧ぐる迄に、なほ正木に遭つて心残りの無いだけの話をしたいと思ふ事があるので、幾度か躊躇つた後、遂に正木の室を訪つた。

正木はこの間、既に優等の成績を以て大學を卒業して居る。恩賜の銀時計をも頂戴し、都の新聞紙に學生の鑑として記されたのもつい二三日前の事である。益荒は此上もない満足と、約束の通り洋行させてやるといふて居る。されば正木が日本の土地を離るゝ身となるも近い中であらうと思ふと、倭文子はそれにさへ少ながらぬ心細さを感じるのである。

「正木、入つてもいゝ事？」と四邊を憚りながら室の外から聲をかけた。

正木は机の前を離れて、

「どうぞお入り下さい。」

倭文子は中へ入ると物思はしげに黙つて坐つた。正木は淋しい倭文子の姿を見ると、刺れるやうな傷を覚えながら、

「新生活にお入りなさるのも、いよ／＼明日からでございますね。」

倭文子はたゞ譯もなく胸が迫つて來るので、何か云はうとしてはためらつて居たが、

「正木、私はいふ事が澤山あるけどもね、何だか胸が一杯でもう何にも云へない……。これからは滅多に遇つて話する事も出来ないわねえ。」

正木は目を瞬いて憐れむやうに倭文子を見たが、嚴やかな調子で、

「私はたゞ貴嬢が運命に御満足なさる事を切に祈るのみです。貴嬢の將來の幸福は貴嬢の御決心一ツに有ります。」

「正木— 私を誤解しちや厭よ。……今もお父様に二度と川上家へは歸つて來ない、どんな事があつても久松の外に良人は持たぬと決心を申上て來たのですから……。』と震ひ氣味になる。

「いやその御決心さへ固ければ貴嬢は安心立命の地が出來たのです。どうぞ肩よいそのお覺悟

に相應しい勇氣を以て、新生活にお入り下さい。』

倭文子は首肯しながら差俯むく。暫らくして、

『正木、今もお父様からいろ／＼言聞かされて来たけれどもね……私、どんな事でもするから……貴君にもお願があつてよ。それは——私がこの先どうすればよいか、心に守れば善い事を貴君の口から云つて下さい。是非！』と振仰いだ眼にも言葉にも力を罩める。

『ハ……』と應へた正木は、ひどく感情を刺激されて伏目に倭文子の膝の邊を、やゝしばし見詰て居たが『それでは私は眞心を以てこの事をお勧めしませう。どうか久松さんに至誠を以てお事へ下さい。母堂や令妹にも至誠をお盡し下さい。何事も至誠に打克つものはありません。よし貴嬢の御身に如何なる堪へ難き事があらうと、如何なる禍が下らうと、最後の祝福は必ず貴嬢の上にあります。どうぞ至誠の二字をお守り下さい、私の申上る事はそれより外に有りません。』と溢れるばかり熱誠の語氣で云つた。

倭文子は聞終ると暫く頭を下けて、

『難有うよ。』と聲は震へ『私きつと覺えて居てよ。そして出来るだけの事は是非ともして見せるから……。どんな辛い事でも悲しい事でもきつと辛抱するから……。どうぞ貴君は安心して……』

風にも堪へじと思はるゝ心許なけなその姿を見ると、正木は何とも云へぬほどいたましく、

『私はこの先とも必らず貴嬢のお力になります。』と力を罩めて云つた。

『だけでもすぐ洋行なさるわね。』

『は……』と正木は自ら心咎めのするやうに俯むいて『それは洋行させて頂きますが、併し私は……考へてる事もありますから、なほ一年許大學院で研究を重ねた上、彼地へ行きたい所存で、これは是非閣下にお願するつもりです。』

倭文子はほつと幽かな息遣ひをして、

『ちやすぐに立つやうな事はなくつて？』

『は、閣下さへ御同意なれば、私は貴嬢が幸福な家庭をお作りになつたのを見た上、安心して立つ事になるだらうと考へます。』

『さう……』と何か不安の眼光で正木を見た。そしてすぐ俯むいて了つた。

正木は倭文子と相對してゐるのがいふばかりなく苦しい。

『正木。』と倭文子は呼かけたが、正木に顔を見返されると、その口元に籠つた何ものかど意氣地なくも消えて了ふ。

『は、何か——？』とやゝ間が抜けてから正木は促がし氣味に云つた。

『アノ私はね。』とやうく、『明日からも川上家の人ぢやなくなるんだしね、これまで貴君と……兄妹のやうにして居た紀念に、私からあげたいものがあるんだけど……受取つて下さるでせうね。』とちつと正木の顔色を伺ふ。

『え、私に記念を……？』と正木は倭文子と顔を合はせたが、その濕を持つた星のやうな眼が、無量の意味を詞の外に籠て居るやうに思ふと、その刹那或恐怖の影のやうなものが頭に閃めいた。

『受取つて下さるわね。』

かう自信を以て云はれると、正木にはそれを斥ける事がどうして出来よう。別に心に咎める事の無い限り、倭文子の好意を無にする道理はないと考へて、

『貴嬢の記念と仰しやるものならば、……喜んで頂戴いたしませう。』

『さう。』と倭文子は嬉しさに『私、何か心の籠つたものをあげたいと思つただけけどね、何もこれと思ふものは無いんだし……これをね。』とやう神經的の態度で、左の紅指に箱て居た、細輪の純金の指環に小さくルビーで赤十字の箱込んであるのを抜取つて『これは亡なつたお母様が箱て居らしたので、詰らない指輪だけでも、私に取つては一番大事な、死んでも放すまいと思つて居た品なのよ。こんなもの正木にあげても仕方があるまいけども、私の心は

この指輪に籠つて居るのだからどうぞ私だと思つて、是非受取つて下さい！』

正木の心臓は我にもあらで高く波打始めた。彼の心にはこの指輪を受取る事が何か罪惡であるやうな感が兆したのである。なぜ罪惡のやうに感じたのかそれは分らぬ。併し肩よく運命に服従する倭文子から、過去の記憶の記念として、心盡しの品を受取る事が何が罪惡であらう。ましてそれを受取る事が、たしかに倭文子に慰藉を與ふる道なのではないか。正木の心には激しい戦闘があつた。彼が躊躇つて居るのを見ると、

『正木、受取る事が出来なくつて？ 今の先喜んで頂戴すると云つたわね？』と貞雄を見た眼には怨むが如く訴ふるが如き色が見ゆる。

正木はこの上倭文子を失望せしむる力は無かつた。

『いやそれでは頂戴いたします。喜んで頂戴致します。』

『ちや受取つて下さつて？』とほつと吐息を洩して『いつまでも私を……妹と思つて下さい。この先も何か私一人で思案に餘る事があれば、きつと貴君を頼にしますから……』

『貴嬢が若し助を要する場合はあれば、私は世界のどこの果からも飛んで來ます。……そしてこの指輪はどこへ行つても、貴嬢の記念として大切に保存いたします。』

『正木、ルビーの色は持主に何かあると變るといふからね……それは私の心が籠つて居るんだ



から、何かあると變るかも知れない事よ。』と倭文子は夢見る様に云つた。

倭文子は素よりそれを信じて云つたのではない。貞雄とても別して理科を修めた身の、無論そんな事を眞面目に考へる筈はないが、それにも拘はらず、倭文子のこの詞は長く忘れる事の出来ぬ印象を、彼の記憶に止めしめたのである。

(二十一)

結婚式後暑中の賜暇を利用して、直ちに新婚旅行の途に上つた久松喬新夫人倭文子の二人は、外に倭文子に従て久松家に入つた小間使の磯のみを具し、水戸の大洗に二泊した後、昨夜同じ東海岸の平潟なる某の別荘に入つた。新夫婦は凡そ十日間をこゝに過した後、松島に遊んで歸京する豫定なのである。

平潟は常陸の極北にある東海岸中屈指の港で、灣こそ狭いが削り立て、下を剗つたやうな砂石の山で圍まれ、山の頂には松や椎が蒼青に蔽ひ被さつて、一寸繪のやうな風情である。殊に宿と定めた別荘は山手にあるので、眺望の點において言分なく、別して昨夜一行の着いた折には、灣の關門をなして居るその削つたやうな砂石の山松に月が懸つて居たので、全く人間外の別天地へ來たやうに思はれ、二人はこの土地、この別荘に少なからぬ満足を表したので

あつた。

西日は後の山に遮られて、海岸にはそよそよと涼風の渡る午後五時ごろ、磯の香の高い海岸を打連れて八幡山の方へと、ぶらぶら歩み移して居るのは喬夫婦と磯の三人連である。喬は白縞縞の浴衣に無造作に白縮緬の兵児帯を結び、頭には烏打帽を頂いて、太い籐のステッキを曳いた。併し倭文子はそんな無造作な譯には行かぬ。新婚後間もない上に、始めて平潟の町を踏むので氣が張るとは思ひながらも、藍氣のかゝつた薄葡萄酒色の絹の單衣に、銀糸で青海波を織出したお納戸縮緬珍の丸帯をきちんと締めた風、どこまでも上品で、摺違ふほどのものに立留つて目をとめぬものもなかつた。

妻を娶らばまさに陰麗華を得べしと、倭文子を熱望して容易にその望を達し、また殆んど同時に中佐に昇進した喬は、今満足の高潮に達して居るのであらう。彼の態度彼の顔色はまさに陰麗華と執金吾とを併せ得たる、彼が満腹の得意を語るものゝ如く見ゆる。曩に中傷の手紙を受取つて心を悩ました事は、今は殆ど頭の中にないに相違ない。

海岸の左に盡るところ、岩山を切開いて隧道を通じて居る。倭文子は隧道の前に立つて、右手を見返ると、昨夜月の懸つて居た、蓬萊のやうな山が、今夕日を浴て、崖の下は金色に輝き、逆に垂れた松が枝に、遠見の白帆を懸た様、何とも云はれぬ風情である。

「貴郎いゝ景色ではございせんか。」と前に立つた良人を呼かけると、喬も立留つて、  
 「ウム、實に絶景だ。昨夜と違つてまた趣のあるところが面白い。」

磯がにこやかに口を押む。

「ですけれども今朝の夜明の景色がどんなによろございましたらう。私はよつほど奥様をお起し申さうかと存じました。」

「あら起してくれ、ばいゝのに……そんなに善くつて？」

「よいの、何のと申して、私、あんな美しい景色を見たのは始めてでございます。」

「ウム、お前は日の出を見たのだな。」と喬。

「ハイ。」と首肯いて「あの今朝は大變な鴉の泣聲でございましたらう。」

「さうだつたかしら。」と倭文子は鴉には氣がつかなかつた。

「まア、お嬢様はあの鴉の鳴聲を御存じないのでございませうか。東京中の鴉が鳴ましたつて、あんな八釜しい聲は出はいたしませんわ。」

「まアそんなに噂いへ？」とやゝ極りの悪い顔。

「磯、東京中は愚、日本中の鴉が鳴たつて、なか／＼目を醒す風ちやアないからな。」

「あらお口の悪い……私、昨夜は夜中に眠らなかつたからでございます。」

「あの旦那様は御存知で居らつしやいましたか。」と磯は不信の眼を喬に凝く。

「ウム、知つてる。鴉の泣聲だらう。裏の山で八釜しく鳴れたには弱つたよ。」

「あれ、裏の山ではございせん。おほ、旦那様も御存知で居らつしやらない癖に……鴉が鳴きましたのは、初取山とか申す、あの薬師様のある山でございませう。」と今一行の目を注いだ蓬萊のやうな山を指さして「お嬢様——ほ、また口癖になつて——アノ奥様、旦那様に何とか云つておやり遊ばせな。」

磯は倭文子を浮立たせ、二人の間の調子を合せようと苦心して居るので、東京を離れて以來、よく語りよく目端を利せ、しほらしき迄倭文子のために盡して居る。若し磯が居なかつたならば、自分は果して良人に満足を與へる事が出来たらうかと、自から案ずるほどに、倭文子の方でも少なからず磯を頼にするのであつた。

「酷いわねえ。」とやゝ繕つては居るが、美しい笑顔を磯に向けて。

「あは、ムム。」と喬は心地よけに高笑して「それでは磯に降参しよう。併し何でも鴉の鳴聲はして居た。」

「あれ、旦那様はまだ負惜を仰しやつてお出遊ばす。」と笑つたが、前の話を次いで「その鴉でございませうが、何でも四時ごろから、あの山でア／＼鳴出しますと、その八釜しうございま

す事、もうちつとも寝られは致しませんので、四時半に戸を明て見ましたら、それはもう何百と知れぬ鴉が、あの山の松を放れて飛廻つて居まして、そして山の向から、かうすーつと今鯉船の出で行きましたあたりへかけ、紅を流した様に朝焼がして居るのでございます。お嬢様、ほゝ、またお嬢様でございますね。アノ奥様、よくお芝居で敵打などの濟だ跡、鳥笛を使つて、眞赤な色焰硝を燃す事がございませう。まアあの通りでございますの。そして私が見惚て居ります中に、あの逆に出た松が横雲の中に浮出すやうに見えて、その下の方の海から、眞丸な鬼灯のやうな、——珊瑚の球とも紅水昌とも、何とも言様のない色ざしのお日様が上る景色と申しましたら、まアどんなでございましたらう。仙人の居る島へでも來たのではないかと思はれます位……ほんとに磯は七十五日生延たに相違ございませんわ。』

『まアそんなに善かつたの。』  
『なに、磯の話の方がよつほど景色がよささうだ。實物はさうもあるまい、うつかり聞かんがよいぞ。』

『あれ、私の話がどうして實物に及びませう。嘘と思召すなら明朝起て御覽遊ばせ。』

『ちや磯、いつでも私を起しておくれ。』

『ですけれどもお嬢様にお目覺が出來ますかしら。』と磯は調弄顔。

『まア六かしからう。己が保證する。』

『あら。善うございますよ。磯、もういゝわ、お前には頼まないわ、私一人で起きて、きつと磯を起してやるから……』

『おや、奥様が大變な御奮發で居らつしやいます事。それでは磯と起ツくらを致しませう。』

『差當り己が審判官か。』

『でも審判官が朝寝を遊ばしては、何の役にも立ちませんわ、ねえ奥様。』

三人はとり／＼の笑を合した。一度覺悟すれば多くの場合、女は男よりも強くなるためか、倭文子の顔には、結婚前より寧ろ冴た色が浮んで居る。

三人は打連れて隧道に入る。隧道の中は奥州に通ふ國道である。

『あの旦那様、勿來關へはこれをまるるのでございますか。何でも十五六町ほかないやうに申して居りましたね。』

『ウム、さうだ。己が演習に來たのは七八年前の事だが。一度行つたところだから、忘れんつもりで居る。その中に案内をしてやらう。』

『噓いゝ景色のところでございますね。』と倭文子はいふ。

『さう思つて行くと失望するかも知れんぞ。』

短い隧道で、この話の中にもう出て了ふ。また海岸を右に折れると第二の隧道が展開する。

八幡山へ行くにはこの隧道を潜らねばならぬ。今度は一寸長い隧道で、明が欲しいほどに薄暗い。歩くと太鼓のやうな音がして、それが反響するので、磯は態と足を踏鳴して興じながら、草履穿の奥様にも眞似をせよと勸める。いや／＼眞似をすると、

『今度は唱歌を歌つて御覽遊ばせ。』

『いやよ、磯は……』

『あは／＼。』と喬は他愛もなく打笑ふ。

隧道を出るとすぐ八幡宮の鳥居下である。左手には茅葺の傾むきかゝつた古寺があつて、海水浴客の間貸にでもして居るらしい、寝そべつたり碁を打つたりして居る男や、婆さん連などが三間ほどの明渡した破座敷に陣取つて居るのが見える。

『まアこんなところにもお客を泊るんでございますかねえ。奥様。』

『さうと見えるわ。』

『こんな古寺に泊つたなら無趣味があるだらう。それもお前と二人位でなければいかん。眞夜中に天井裏から月がさし込んで来たり、床下を何かの通る物音が聞えたりな……』

『まア厭だ！』

『併し奥様、旦那様とならよろしいではございませんか。貴嬢も軍人の妻で居らつしやいますもの、ちつとは強くおなり遊ばさなければ……』  
寺のものがみんな此方に眼をとめて居るので、倭文子は極りが悪く、口を噤んで済して前を通り抜る。

切石を昇つて八幡の祠に詣で、右手へ廻ると、そこは平潟灣を脚下に見下して、何ともいへぬ景色である、灣の中には捕鯨船や帆船が碇泊して居る、沖の方からは今しも澤山な鯨船が、やッし／＼と勇ましく歸つて来る。それが初取山の鼻まで来るのは廿分とかゝるまい。大きな椎の木の下に捨床几が置いてあつて、境内は人ツ子一人ない。

『どれ、こゝへでもかけて、鯨船の入つて来るのを見下すのでしょうか。』

『あれお待遊ばせ、汚なうございますから。』と倭文子はハンケチで落葉を拂ふ。

『奥様、膝かけを持つてまればようございましたのにね、私、うっかりでございました。ア一寸行つて取つて参りませう。』

『なに、磯、膝かけなんか無くつてもいゝよ。』

『でもすぐでございますもの。』と磯は倭文子を殘しても安心だと思ふので、態々取に行かずとももの所を、強ひて降りて行く。

磯が切石をやつと降りたと思ふ頃、わつしよいといふ賑かな人聲が、一度に蓋を開たやうに聞える。それは雷神の御輿を擔いだ土地の若ものが、今揉みに揉んで隧道を抜けて出たのである。神輿はそのまゝ切石を擔ぎあける。

『わつしよい！ わつしよい！ 六根清淨。』

併しまだ喬夫婦の眼には入らぬ。

『今日は土地の者が雷神様のお田植だとか申して居りました。夫でございませう。』

『それではそれに違ない。こゝへやつて來さうだ。』

二人が切石の方を見つめて居ると、忽ち白木の神輿と寶珠が見えて、先棒の若衆の頭がぬつと出る。十四五人の血氣盛んの丸裸が神輿にたかつて、後からは大勢の小供がわつしよといつて來るのである。

若衆の眼が倭文字等二人の上に向けられると、何か言合つて笑ふ聲が聞えたが、忽ち神輿の先棒をねぢ向ける。また揉に揉んで此方を目懸ける様子。

『貴郎、彼方へまゐりませう。』と倭文字は急いで床几を立上つて、迷路を求めた。丁度後に急な狭い石段があつて奥の院とも思はれる古びた祠が上の方に仄見える。倭文字はさつさとそれを登るので、喬もその後について行く。

若ものゝ一連は一聲張上で、わつしよいわつしよい、六根清淨と怒鳴たが、張合抜がしたらしく、祠のぐるりを一遍廻つて神輿を廣前に搔据ゑた。

勾配の急な石段を足早に上つたので、倭文字は息をせい／＼云はせて、顔色を變て居る。

『お前、そんなに恐かつたかへ。』

『は……』と恥かしさうな笑を帯て『こんなに動悸がして——』と胸を押へて見る。

『どれ。』と喬が手を懐へ入れ様とすると、

『あれ、ようございますよ。』と赤くなつて両方の手でふつくりした乳のあたりを守つた。そして石段の下に目をやりながら『こゝまではあがつてまゐりますまいねえ。』

『來たらば今度はどこへ逃るかな。』と笑ひながら奥の院の後の山を仰ぐと、松と椎が恐ろしく被さりかゝつて居て、横手の脚下は削り立てた断崖に、波の音がざぶりざぶりと聞えて居る。

『まア海へでも飛込む外あるまいよ。』

『でも來はいたしませんわねえ。』と倭文字はなほ顔を赤めた儘小さな聲。

常盤海岸線の下り列車は、今まさに助川停車場に着かんとしつゝある。一等室内には上野を發する時から、どの驛でも旅客の注意を惹く美人があつた。

それは必らずしも人目につく派手な顔立であるためばかりではない。また人を驚ろかすほどの盛装をして居たためといふのもない。着物は勝色地に少しパツとした派手な白縞の入つた紹明石の下へ、荒波と千鳥を藍で染た白地縞の長襦袢を着たのが、上へ透いて得ならぬ模様を織出したやうなのに、金と銀の二色で蜻蛉の模様を織出した白地縞の單帯を締て居た。この服装も随分凝つたものではあるが、然し人の注目點となつたところは他に存する。この頃まだ見かけぬ被衣風の白シホンの廂髪の上から纏ひ、後はシホンの髪をまとめてシヨールのやうに垂れ、結んだりボンを前へ廻はして、廂から顔を蔽うて垂たシホンの端と共に衣紋のところまで止にした、極めてハイカラな出立が、人の視線を聳てしめたのである。このシホンを透して見る漆のやうな黒髪、眞白な顔、半襟の蝶模様、首掛の金鎖、素で見るより如何に引立つて人目に映つたらう。

この美人は立花錦子であつた。錦子の外にはいつぞや芝居行の供をした女中と、錦子の父らしい善く顔立の似よつた太肉の紳士と松平亮二郎とが乗つて居つた。一等室の中はこの一行の獨占である。

『もう助川ですな。』と汽車の徐行し始めた時、亮二郎は次第に近よる海原の景色に見惚ながら紳士を顧みる。

『さうです、併し助川はこのごろ人に知られて來た割に、あまり善いところではありません。私にもこゝへ土地を買はんかと周旋するものがありました。感心しませんから、たうとう五浦の方を買込んだのです。全く五浦は見つけものでしたよ。』

『五浦はよほど善いですか。』  
 『その風景がな……たゞ道路が十二三町の間、全く車を通じませんから、それが困るですが、いづれ私が道をつける考です。この暑いにその十二三町お歩行を願ふのが、何ともお氣の毒な譯ですが……』

『なに錦子さんさへ歩いて居らつしやらうといふのですもの、私は平氣ですよ。』と笑ひながら、錦子を顧て『錦子さん、貴様こそ心配ものです。私が負つてあげませうか。』  
 『は、どうぞ……その代りこの間の千早姫のやうに、私鬼になるかも知れはいたしませんよ。』と美しく、ホン隠れに打笑ふ、

丁度その時列車が止つて、  
 『助川、助川。』と驛夫の呼はる聲。  
 亮二郎は立上つてプラットの方へ顔を出すと、今眼の前へ鞆を下けた藁藁帽、木綿の白飛白に袴穿の正木貞雄がひよつくり表はれた。二人は端なく顔を合したので、両方で聲を掛合つた

が、正木は立止まつて、

『貴君はどちらへ？』

『この先の五浦といふところがあるさうで、そこまで避暑に行くのだが……君は？』

『友人がこの助川に居ますから、暫らく一緒に海へつかる考です。ちや失禮します。』と車中の錦子の方を一瞥したまゝ過去らうとする。

『あ、君、ちよいと。』と呼とめて『倭文字さん夫婦は今どこに行つてゐるかね。』

正木は松平の顔をちつと見たが、

『僕は知らんです。何でも松島へ行くとかいふやうに聞いて居ました。』とかう云たが、然し正木は知らぬではない、事實を語らなかつたのである。

『ウム、さうかね、然し君知らん事はあるまい。』

『知らんものは知らんです。』

車掌の笛が鳴る。

列車が動き始めた時に、錦子は何のつもりか、立つて窓際へ来たが、正木を見ると軽く會釋をした。

(三十二)

倭文字が雷神の荒神輿に驚ろかされてから今日は中三日を隔てゝ居る。このごろになく涼しい日なので、五時ごろから、喬夫婦は磯を供につれ、勿來の古關を訪れやうと、別荘を立出た。

この間通り抜けた例の第一の隧道を抜け、八幡を安置する鷹岡山を右手に見て、また一二町行くと、再び隧道に差かゝる。この邊はすべて砂石の山が海岸を走つて居るので、それを切開いては、所謂洞門を穿つて道を通じて居るところが四五ヶ所ある。

『お嬢様、何か碑のやうなものが嵌込んでございますよ。』と磯は隧道の壁を穿つてそこに安置してある、笹斑らしい眞黒な古びた碑石を指さした。

『まアね。』と倭文字が近よる傍から喬も近づいて碑を撫廻はして見る。一種の大理石でつるつると滑つこい。上の方に『平瀧洞門碑銘』と大字が彫刻されて、その下に何か細かく書いてある。

『貴郎、京都を去る一千何里とか書いてございますよ。そんなにあるのでございませうか。』と倭文字は碑の面を見つめつゝ、うつかり眉を擧めて云つた。

『どれ〜。ウムと、京都を去る一千卅二里、大阪を去る一千六十八里、江戸を去る二百八十八里、南部を去る五百七十六里。』

『昔の里數でございますのね。』と倭文子は途中で悟る。

『ウム、これはなか〜面白い。多賀碑の筆法だ。常陸は古い國だけにかういふ碑にも趣がある。』と喬は碑の面に見惚れるのである。

『勿來の關へまるる途中に、かういふ碑を見ますのは、何だか趣味があるやうでございますね。』

喬は我意を得たりと云はぬばかりに首肯して歩き出す。また隧道二ツばかりを抜ると、美しい遠淺の砂濱が展開する。海の中の處々には、濤がその邊一帶の山を攫つた時に、置忘れて行つたやうな、高い岩が突立つて居て、その上にはみな懸崖の松が生えて居る。何とも云へぬ景色である。

ぶら〜海岸をあさりながら、やがて奥州通ひの國道を鐵道踏切まで來ると、その山裾に細路があつて、勿來關へこれより八町三十何間と記した石が立つて居る。喬が先に立つてこの細路の中に入る。僅かに人一人を通ずる山路である、谷間のやうなところで、段々になつて山田が耕され、稻の若葉が涼風にそよいで居る。勿來通ひの途はこの山田に沿ひ、或は山田を放

れて、次第に高みへ旅客を導く、やがて谷が一まはり廻ると、夕日が谷間からさし込んで、同じ金色の光を浴びた彼方の山の上に、幽藪と松の生えて居る森が見ゆる。喬はあれが關の跡だと指さし示した。

目に見ゆるもの皆青い中に、倭文子はバツと手にして居た蝙蝠傘を開く。それは薄クリーム色の琥珀地へ、楓をドローンウオークとし、白のレースで縁取したもので、何とも云へぬまで四邊の風致と調和して見えた。着物は瓦斯の壁紙へ中形の蝶模様を絞風に染たほんの浴衣がけで、花色の羽二重に燕子花模様を絞つた帯を引あけて居るのが、此上もなく上品に見える。

やがて三人は關の山を上り始めたが、途中でまた何かの碑の立つて居る前で、喬は一息入れながら、後れた倭文子を待受る。すぐ倭文子はそこへ來て、

『何の碑でございませう。』

碑の面には『風流のはじめや奥の田植歌芭蕉』と刻まれてある。洞門の碑に一種の趣味を感じたものは、この句を勿來で見事に、また多くの趣味を感じるであらう。

『ほんとにこゝで田植歌でも聞いたら、面白うございませうね。』

『この邊で涼みながら開けばそれこそ風流なものだらう。』と喬は笑つて『どれ上らうか。』

二人は一息で頂上へ辿つた。頂きはやゝ平で、十數株の老松が森をなして茂つて居る。關の



名残の跡へは五尺餘りの碑が立つて、碑の面には義家が「吹風を勿來の關と思へども」の歌を刻してある。それは加茂季鷹の筆の跡で、石摺にするため墨を塗つた跡が眞黒になつて居る。後はすつと、山つゞきで、小松や小さな灌木が叢をなして居る中に、僅かに山賤の途が通じて居るばかり、四邊は寂々として人氣もなく、見渡す限りに人里もない。

昔は山櫻も木々の間に交つて居たのであらうが、今はこの關の松のみを残し、周囲の山々は立木を切盡したので、他はたゞ小さな雑樹が茂つて居るばかり、前の谷間にほつ／＼若櫻を植つけてあるが、道もせに散る風情を見するまでには容易な事ではあるまい。

碑の傍に見晴しの小舎を設けてある。後は磐城岩代の山々大波のやうに連なり、前面は太平洋の水渺々として果しもなく、如何にも雄大な景色である。馬をこの關頭に立て、吹雪と散る落花を浴びて、名歌を口ずさんだ義家は眞に千古の風流男兒と云はねばならぬ。星霜今は千餘年を隔て、身は武人の妻として訪ふもの稀なこの古關を訪れたと思ふと、倭文子は一種の感慨に閉されざるを得なんだ。

『奥様、桔梗が咲てございますよ。』と磯は夏草の中に交つて濃紫に咲出た桔梗の花を見出して云つた。

『まあいゝ色に咲てるわねえ。』と倭文子はその桔梗にさへ得ならぬ床しさを覺えて、花を折取

りながら良人に向ひ『昔はこゝが道になつて居つたのでございませうか。』

『さうと見える。此關所は往昔は祈通關といふのに屬して居たのだが、この通り前は太平洋、後は山又山であるから、軍事上から云へば實に天險の地で、今から考へても奥州の方を誦する無二の要害であつたらうと思はれる』

『まあさうでございますか。』と倭文子にはそんな事は分らぬ。

『一首何か出来ないかね。』と喬は笑ひながら妻を顧みる。

『え何でございますか。』と倭文子は顔を赤めながら分つた顔。

『お前は歌人だといふ事だから、一句浮んだら聞いて貰ひたいのだが……』

『あら、私、歌なんか詠はいたしません。誰がそんな事を申しました。』

『誰でもいい、なア磯、奥様の歌人な事はお前も知つとるだらう。』

『さア、どうでございますか、私は——』

『これ倭文子の肩を持つな。歌が出来ん中はこゝを引下らぬ事にしよう。』喬は笑ひながら、悠小屋の床几に腰を卸して葉巻を吹し始める。

『でも私、歌なんか詠んだ事はございせんもの……』

『まあさう仰しやらすに……』

「奥様、何ぞお味遊ばせな。磯も伺ひたうございます。」

「あら磯、覚えておいでよ。そんなに私をいぢめるならいゝから……」

「や、誰やら来るぞ。」と山の下に目をやつて居る喬が突然叫んだ。

二人の女が露間に目を注ぐと、山の麓をこなたへ目がけて来る四人連がある、一人は案内の俵夫らしく、その後に黒の羽織を着た紳士、つゞいて眞白に何やら縫のあるらしい蝙蝠傘と、紫がよつた蝙蝠傘とが並んで見下さるゝ。傘から溢れて媚かしい衣の裾がちら／＼、まだ如何なる婦人とも見分くる由は無かつた。

「奥様、私何だか知つてる方のやうな気がいたしますよ。」と磯は四人連に目も放さず云つた。

「さう云はれると、私もそんな気がしてよ。」と倭文子も一心に見つむる中にこの一行の姿は山を上り始める時に、雑木や山の角に遮られて見えなくなつた、喬は何やら太平洋を指さしながら話を仕始めたが、倭文子は關の上り口の方のみが兎角氣になる様子、五六分たつと彼方の話聲が聞え始めて、すぐに俵夫の姿が表はれた。

「どうです。ひつぱり上ませうか。」と調弄ふやうな男の聲につゞいて、やゝ下の方で、繻のあゝる笑を帯た女の聲が片々に聞える。

「……憚り様……こんな山位……たゞ急ぐと汗をかくからだわ、ねえ、新。」

この男女の聲を聞くと等しく、倭文子にはいづれも聞覚えのある聲と知つた。若しそれとすればどうして二人がこんな處へと訝る目の前に、白地の吉野縮へ黒糸で細かな翁格子を織出した浴衣がけ、青味のない白絹の兵児帯を締めて、羽織は黒絹の五ツ紋着流し、バナマの扇を前のめりに被つて、細柄のステッキを持つた紳士が表れる。

「お嬢様、松平様に立花様でございますよ。」と磯は驚き乍ら倭文子に囁いた。此時はまだ錦子の姿が見えなかつたのである。

松平は何心なく關の上に出たが、見晴しの小舎に人の氣配がするので、ふとその方を見るのと、忽ち倭文子と顔を見合はした。小舎の中に葉巻を吹して居る久松喬の顔をも認めた。松平は思はず「や！」と叫んで石像のやうに立留つたが、その顔は朱を注いだやうに染出された。それは自分が錦子を連れた事を恥ぢたためではなく、一種の云ふべからざる侮辱を感じて激昂したためであつた。其激昂の分子の中には、正木が助川で自分を欺むいた事を邪推した憤の念も雜つて居たに違ない。

倭文子は松平と顔を合はした刹那に軽く會釋したが、その顔にも薄い紅が上つた。それは別に深き説明を要するほどの複雑した紅ではない。

亮二郎は「や！」と叫んだ聲に、錦子は不審を抱きながら、續いて關の上にその華やかに媚

かしい姿を表はした。八百年前の英雄が鎧の袖に落花を浴で、千古の吟懐を留めてより以來、これほどの美しい派出姿を關が見たのは始めてであらう。濃い花色地に芭蕉の模様を絞染にし、自然に濃淡の表はれた目の覚るやうな細の浴衣に、白地の羽二重へ水と莞を染出した意気な帯を引締め、蝶の模様を絞で染めた白地の薄襦子張、柄の握は水晶、それに金の象嵌を鑄めた贅澤な蝙蝠傘を、クリーム色絹レースの半手袋をはめた右手に突立てた。

錦子の顔も倭文子を見た刹那に眞赤になつた。それはたゞ松平と連立つて來た事を極が悪いと思ふためで、他には意味もない最も簡單な紅である。

松平と錦子は倭文子に挨拶すべく小舎の前に進んだ。先に進んだ松平がまづ倭文子に聲をかける。

『倭文子さん、貴女にこんなところでお目に懸らうとは實に意外でした。併しお目出度い事で……何か松島の方へお出になつたやうに聞いて居ましたが——』といふ事は普通の挨拶であつたが、結婚後の始めての對面に、亮二郎の眼には明らかに許すまじき色が浮んだ。

それを見ると倭文子は罪あるやうに感じたが、何氣なく、俯むき氣味。

『松島の方へはこれからまるるつもりでございます。』

喬が傍に來たので、

『おゝ久松さんでしたな。いつぞや梅小路伯の園遊會でお目にかゝつた松平です。』

喬はこれに對して挨拶して居る一方に、倭文子と錦子、小間使同志の話が始まる。日は磐城の山に隠れて袂涼しき清風に、關の松は琴の調を立て、海の上の眞帆片帆には入日が落ちて、波が金色に流れて輝く。

『まア倭文子さん、こんなところでお目にかゝるとは、ほんとに意外でございますね。貴女、今どちらに居らつしやいますの。』と錦子は最早度胸が据つたので、却つて攻勢的地位を取つた。

『ハ、あの平潟の方にまるつて居ります。貴嬢はどちらに?』

『あの私、二三日前から父と一緒に、五浦の別荘に來て居ますの。丁度松平様もお遊びに居らつしたものですから、今日は勿來關を見ようと、お誘ひ申して参りましたの。……まア貴女は平潟に居らつしやるんでございますか。ちやア目と鼻の間ですわ。知つてたらずぐにもお尋いたしましたものを……』

五浦の名は倭文子も兼て聞いて居たが、その五浦に立花方の別荘があつてそこに錦子が來て居たらうとは夢にも思ひ浮へなかつた。

『まア五浦に來てらつしやいますの。それではすぐなんでございますね。』と云つたが丁度松平

と久松の話の切たに心づいて『あの錦子さん、久松でございます。』と良人を紹介せる。

錦子と久松の間にまた挨拶が交される。それが済んでから松平と錦子は、碑の方へ行つた。その後を見送つた磯は倭文子と顔を見合はせて、

『どんなところでどんな方にお目にかゝるか、分らない者でございますねえ。でも松平様と何う遊ばしたのでございませう。』

『何でもこのごろは松平様がちよいと立花さんへ入つしやる容子なのよ。可笑しいわねえ。』と莞爾。

『ほゝ、さうでございますか。それではお氣があるのでございませう。』と磯も打笑む。

『松平様がかえ。』

『えい。』と云つたが、すぐ後から『錦子様でございますませう。それでなくつて、錦子様お一人の處へ入つしやる道理がないではございせんか。』

『さうねえ。それだといつそ早く結婚なさればいゝのに……私だつても氣が済むから——』と倭文子は松平の先刻の眼光を思ひ出しながら、小聲に云つた。

『錦子様とあんなに仲よくして居らつしやる位ですもの、もうきつと何とも思つては居らつしやいませんよ、何も貴女、済むも済ぬもございせんわ。見てお出遊ばせ、今にきつと御一緒に

におなり遊ばします。ほんとにお似合の御夫婦なんですもの。』と磯は意味有氣に笑つた。

倭文子は嗜めるやうに磯を見たが、何も云はずに錦子の方を見返る。

『まア随分派な風をなさいますのね。』と磯は錦子の後姿を打守つた。

喬は兩人の話には聞せぬものゝやうに葉巻を吹しながら悠々外洋を眺めて、自然の壯觀に鑑がるゝ様である。

『お嬢様へ磯は喬に聞れぬ前では、好んでなほお嬢様の呼名を用ゆる傾がある。彼方の方へまゐつて見ませうか。きつと桔梗が咲いて居りますよ。』

二人は關とは反對の小松原の中に分入つた。それと引かへに亮二郎と錦子は見晴しの小舎の方へ歩を返す。小舎の前へ來ると喬は笑顔で迎へながら、

『どうです。』

『實に下らないには驚ろきました。これが勿來關は心細いですな。』

『眞實に詰らない所でございませうのねえ。』と亮二郎の後から錦子もしみじみといふ。

『併しこの景色はどうです。』

『この位の景色はどこにでも有りませア。……そりやア五浦はいゝです。』

『はゝゝ、さうですか。五浦はそんなにいゝですか。』

「あの御案内いたしますから、是非奥様にお遊びにお出を願ひます。」と錦子は溢るゝばかりの愛嬌を湛へる。

「は、難有う……其中五浦へも出かけようと思つて居つたところで……」

「あの奥様は——？」と云つたが、實は小松原の方へ行つたのを知つて居る。

「さア、どこへ行きましたか。」と喬は小松原の方を見返る。

「あゝ彼方に居らつしやいます。」と錦子は花色の帯を小松原に見出して云つた。そして小間使をつれて自分も倭文子の方へ慕つて行く。

亮二郎は喬と俱に小舎の中に、四角に取続らした榻に腰を卸して、

「併し涼しいですな、貴君はずつと平潟に御逗留だつたので？」

「さうです、閑静でいゝですから。」

「なるほど閑静で、……それはお羨やましいですな。奥様も當分平潟にお出なさる事を望んで居らつしやるでせう。」

喬は松平が下らぬ事をいふと考へたのだらう。

「それは或は望んでも居りませう。」と冷やかにいふ。

「後文子さんは助川の方へ行つしやる事はないですか。」

「助川へ？」と喬は疑問の眼を輝やかせて「いやまだどこへも出かけませんが——」と云つたが、亮二郎のいふ事が、何か常識を缺いて居るやうに思ふので、顔に不快の色が浮ぶ。

「あ、さうですか。」と亮二郎は恍けたやうに「それぢやアいづれお手紙でも——」と聞えるか聞えぬほどに呟やく。

「何です？」と喬の聲はやゝ鋭どかつた。

「いや。なに何でもありません。」と言紛らして「倭文子さんは平潟よりも助川がお好ぢやアないかと考へたからです。」

喬は松平の愚談を續くるを好まぬものゝやうに口を噤んだ。

(二十三)

いつか磐城の山の後が眞赤に夕榮して、海の彼方の東の空も薄紅にそれを反映し始めた。女連の四人はめい／＼桔梗撫子の幾枝かを手にしたが、小松原を繪のやうに抜出る。

「まア海が綺麗になりました事！」と倭文子は海も空も紅を溶いて流したやうな美しくしさに恍惚となつて立留まつた。

「お嬢様、これを五浦で見ましたらどんなに善うございませう。」と錦子の小間使はいふ。  
 「倭文子さん、その中御案内いたしますから、是非五浦の方へ行しつて下さいな。景色も平潟などよりはすつと善うございますし、このごろは毎日蟹女が鮑を取つて居ますから、入つしやればそれも御覧になれますわ。」

「まアさうでございますか。どんなにか面白うございませうね。私、蟹女を見た事などはございせんから久松さへ許してくれましたら、是非その内にお訪ねいたします。」

倭文子は蟹女を見たい好奇心に釣られて斯うは云つたが、併し松平の居るところへ行くのは、その實好ましくないのである。

「あの是非お二人で……久松様にも先刻お願申して置きましたから……。それに平潟とはまるで違つた海で、磯石が多うございますから、潮が干ますと、章魚だの、銀ほうなどが女や小供にも取れて面白うございますわ。」

「ほんとに面白さうでございますのね。」

「そりやア文學趣味のある方でもいらつしつたら、いろ／＼材料がありますよ。蟹女の生活なども研究して見ると。なか／＼趣味があつてよ。私、海洋文學を——ほゞ大袈裟ですな——少し研究しかけて居ますの。海濱に來たからにはそんな道楽でもしなければですもの。全體海に

は神祕があるやうに思ひますから、私、山よりも海が好ですわ。」

「五浦には鐘鼓洞といふ洞窟が、海岸の削つたやうな崖の下、七障子といふ岩の立つて居る中にありますが、そこには昔から笛太鼓の音が聞えて居るといふ傳説があつたり、またその下の方の海岸には、人のやうな形をした面白い石が、澤山打上られて居ますが、それには昔京都から鹽竈様へ雛を献上する船が沖を通つた時、龍神がそれを欲しがつて轉覆したので、それから雛の形をした石がそこへ寄るのだといふ口碑があつたり、なか／＼趣味のあるところでございますの。」

それに穴や何か多い故でせう、夜など耳を濟して居ますと、海がいろいろと自然の聲の模倣を致しますよ。泣聲がしたり、笑聲がしたり、動物の鳴聲だの、物を云ふやうな聲だの、そして何でも意味のありさうな事を徹夜囁いて居ますの。私、こんな經驗をしたのは五浦へ來てから始めてすわ。」

錦子から斯ういふ空想的の詞を聞く事は意外である。尤も錦子は學校に居る時から、何でも囁つて、何でも知つてるやうに見せかける方で、自然と親むといふ事は錦子の性質になくとも、よく人の前では自然に憶れる風をする、文學に熱中する事があると思ふとすぐ飽て他の趣味を追うて行く。繪筆とパレットを弄り出した事もある。音楽もいろ／＼と手を出すけれども、こ

れと云つて手に入つたものはない。海洋文學を研究するといふのも、なにかの風の吹廻しであらうと倭文子は思ふ。併し錦子のいふところには兎に角趣味があるので、餘程五浦へ行つて見たいやうな氣になつた。

『まア大變に面白のお話してございますね。』

『別荘には磯之丞といふ妙な名の老爺が居りますが、それに海の話させますと、ほんとに面白うございますの。海の底の事は何でも知つてましてね。そこには深い谷があつて、その中にどんなものがあるの、こゝには百疊敷程の岩が重なり合つて居て潜り抜るとどうだのと、それは懐いやうな話をいたしますよ。機嫌のよい時なら、いくらでも話しますから、是非お遊びにいらつしやいな。』

『は……、そんな老爺の話の聞いてましたら、世の中の事などは忘れて了ひませうね、私も是非遊びに参りたうございます。……あの松平様はいつごろまで居らつしやいますの。』

『あの』と少し顔を赧めて『當分居らつしやる筈に——』と云ひましたが、何か倭文子の前では説明がなくては叶はぬと思ふ氣色が見えて、一寸躊躇つて居る。

『さうでございますか。』と慎ましく之を受けた倭文子は、何の疑惑をも抉まぬかの容子なので、錦子は却て心に咎められ、

『あの倭文子さん。』と呼かけると聲を落して『貴女は松平様とお心易い方ですから、何もかも打明ますがね、私、あのこちらへまるる前に婚約いたしましたの。』と頬を染めて云つた。

『おや、まアそれはお目出度うございますこと?』と莞爾錦子を見つめる。

『でも私、何だか皆さんに極りが悪くつて……』と報らんだまゝ俯むいたが、それは倭文子や藤乃にだけは、遠がに極りが悪い節もあるであらう。

この話の中に見晴の前へ來ると、二人の男は待構へて、言合したやうに立上つた。

一行は連立つて、關と入目を後に山を下る。八町の細路を行盡して鐵道の踏切を越えんと、例の美しい砂濱で、夕暮の趣宛ら詩のやうなのに心ひかれ、女連れは貝拾ひにと濱邊に下り立つた。

始は一緒に居たのが散々になる、久松も松平も別々に逍遙つて居たが、いつか松平と倭文子が入々から離れて近づいて居た。いやそれは松平の方から心あつて近づいて行つたのである。

『倭文子さん。』

『は……』と初めて氣がついて立留ると、

『松平亮二郎は大馬鹿ものですね。』と藪から棒に『貴女の目には嘘大馬鹿ものに見えるでせう。……その大馬鹿ものにされたのは誰の爲めです?』斯くいふ間にも彼の感情は激して來る

様子である。

「何を仰しやるのですか……私……」と内気な倭文子は途方に暮れて臆病らしく亮二郎を見詰めた。

「貴女ばかりではありません。私は貴女の一家から欺かれて居たのです。」

「今更そんな事を仰しやつて、迷惑いたします。」と倭文子は自らも罪あるやうに感じながら「貴君も錦子さんと婚約遊ばしたのなら、最早そんな事を仰しやらなくともよろしいではございませんか。」と訴ふるやうに云ふ。

「それとこれとは別問題です。私が假に錦子さんと婚約しても、貴女が私に與へた侮辱が消滅しますか。」

「そんな事を仰しやいまして、私、貴君を侮辱した覺はございませぬものを……」

「馬鹿もの扱ひにされるのは侮辱でなくて何です。正木君と貴女にはさんさん侮辱を受けて居ます。」と亮二郎はいくらか弱いものと見て笠にかゝる風がある。併し口でどんな事をいふ時でも、彼には毒々しい様子はない。要するに彼もまた節制のない感情の兒であつた。

倭文子は黙つて俯むく。併しすぐ顔を擧げて、

「正木がいつ貴君を侮辱いたしました？」

「は、は、貴女は正木君の事といふと、なか／＼熱心ですね。」と嘲けるやうな調子。

倭文子は許すまじき眼光で松平を見たが、そのまゝ口を噤む。

「正木君が今どこに来て居るか、貴女は知つてますか。東京に居ませんよ。教へてあげませうか。」

倭文子はこれに對しても何にも云はず、亮二郎を睨むやうな一瞥を投たまゝ、無言にその前を辭して久松の傍へ近づく。

一行はすぐ一緒になつて砂濱を街道筋へ出た。そこには錦子等の俵が三臺待つて居る。久松夫婦は錦子に立寄るやうにと勧めたが、錦子は別に出直すと云つて、そのまゝ俵上の人となつた。三臺の俵はすぐに隧道の中に消え失せる。後の三人は錦子と松平の噂をしながら、ぶらぶらと轍の後を拾つて行く。

倭文子は松平に云はれた事や何かと氣になるので、あまり口敷を利かなかつた。やがて錦子等の噂も市が榮え、幾つかの隧道を越して、平潟の棧橋町を目の前に見たころ、倭文子と喬の間次つやうな問答が始まつた。

「お前は助川へ行つた事があるか。」

突然だつたので、倭文子は怪しんだが、別に意味のある事とは思はぬので、



『助川といふのは、何だか聞いたやうなところでございますね。』と芽爾にいふ。

『こゝへ来るまでの停車場で、海水浴のあるところさ。』

『あゝ、さうでございましたね。海岸に宿屋や別荘風の建物などが見えるところでございましたね。私、一度もまるつた事はございません。』

『併し誰ぞお前の知つて居るものでも、助川に来て居りはせぬか。』

『いゝえ。』と不審さうに『誰も知つてる方は——』

『ウム、誰も来て居らんといふのだね。』

『でもなぜでございます。』と喬の調子が少し變つて居たやうに思はれたゝめか、それとも外に原因があるのか、倭文子は不安を感じながら斯う云つた。

『いや何でもないので。喬の答は無造作である。』

倭文子はその上には問返さぬ。磯は後から耳を濟しながら、此問答を聞いて居たが、何も口を入なかつた。すぐに宿に着く。

快よく夕暮の食事は済む。この時は最早月が明々と初取山の上に、隅なく平潟灣を照して居るので、喬は酔心地の陶然と、赧んだ顔を涼風に吹せながら、月に誘はれて庭の面へ出た。

『お嬢様。』と磯は倭文子の傍へ来て『先刻勿來の歸に旦那様が、何か助川の事を仰しやつて居

らつしやいましたね。……お嬢様にはお分りになりましたか。』

倭文子は眉を蹙めながら、

『何だか私には分らないのよ。何と思召して仰しやつたのだから——』

『誰か助川に……来て居らつしやる筈はございませんわね。』

『さア、そんな筈は——』と言さしたが、松平の云つた事をまた思ひ出して『だけでも磯、松平様がね、私に變な事を仰しやるのよ。』

『おや、どんな事を仰しやいました。あの貝を拾つてました時、貴女と松平様とお話をして居らつしやいましたが、あの時でございますか。』

『あゝ。』と力なく『いろ／＼厭な事を——。私が久松へ來たのは、あの方を侮辱したのだなどと……。それから仕舞には正木の事を仰しやるのよ。』

『まア、そんな事を仰しやるのでございますか。そして正木さんの事まで——』と磯は眼を睜

る。『それがね、磯、正木が今どこに來て居るか、教へてやらうつて、妙なことを仰しやるのだもの。』

『でも正木様は今どこに居らつしやるのでせう。どこかへ避暑にでもお出かけなすつたのでご

「さいませうか。」

「さア、東京には居ないかも知れないと思ふのだけでも……」

「松平様が知つて居らつしやるのですかしら……變な事を仰しやいます事ね。そして貴女はど  
うお返事遊ばしました。」

「私は何にも返事をせずに来て了つたの。」

「まア妙でございますねえ。まさか正木さんが助川に来てらつしやることも——」

「倭文子は何も云はずに椽先を見込んだまゝ黙つて居る。ところへ宿の召使が一封の手紙を持つ  
て来て、差置いて行つた。」

「倭文子はそれを取上げて見ると、懐かしさうに、

「おや、藤乃さんからよ。大磯からだわ。」

「それでは梅小路様の別荘の方から——？」

「倭文子は首肯しながら封を破つて読んで見る。中の文句には別段に變つた事もない。まづ倭  
文子の新婚旅行に幸あれ樂あれと祈つて、次に自分が三日前から瑞枝勝人の二人を連れて大磯  
の別邸に来て居る事と、伯爵が避暑旁々樺太の研究に赴かれる事を告げたそれだけのものであ  
つたが、追書に次の通り認められてあつた。」

「かの方も海水浴のため平潟の御近所へお出掛のよし、前日一寸途中にてお目にかゝり伺ひ申  
候、自然お遇の折もと存候まゝ、よろしくお傳のほど願ひ上候。」

「こゝにかの方と記されたのは、正木の事であると倭文子は直ちに知つた。前の事があるの  
で、何か胸騒ぎを覚えながら、

「磯、ちよいとこゝを讀んで御覽な。」

「磯は受取つて目を通すと、之も正木と悟つたか、手紙を倭文子に返して聲を低く、

「正木さんの事でございますね。」

「そんな話、お前、聞いてたかへ。」

「え……？ 正木さんがこちらの方へ海水浴に来らつしやるといふ事でございますか。」

「あゝ。」

「何とも伺つては居りません。多分俄かにお出掛なすつたのでございませう。……それにしても  
助川に来てらつしやるのでございませうか。」

「さアね。」と倭文子は言葉数少なく、思の多い風情。

「松平様はきつと正木さんにお逢ひになつたのでございませう。でもどうしてそれを妙にお取  
なすつたのでせう。……あの、立花様は貴女に何とも仰しやいませんでしたか。」

倭文子は黙つて首肯しながら、手紙を巻收めるところへ、喬が襟先からあがつて来たので、手紙は手早く舊の封筒へ入れて、見えぬほどに後へ差置いた。

「旦那様、まア見事なお月夜でございます事！」と磯はその場隠しに、晴やかな聲をかける。「ウム、いゝ月だ。」と喬はどつかり二人の前に来て跣をかくと、倭文子の後の手紙の端に目をやつて「どこからか手紙が来たと見えるな。」

手紙の端が見えなくても、二人がそれを讀で居るのを喬は見えて居たのである。併し何もその手紙を怪んで云つた風ではない。

「ハイ、あの……」

「どこから来たのだい。お父様からぢやアないか。」

「いえ、あの……お友達からでございます。」と倭文子の答は少しく下る。

磯は心で齒痒く思つたが、喬は案外無邪気で、

「お友達？ 誰から？ お前が一番仲善だといふ遠山さんからぢやアないかな。」

「まア旦那様のよくお當遊ばしました事！」と磯は興じ顔。

「どれ見せて御覧。」

「でも、あの……」と倭文子は動悸が高くなつた。

「何か見せられない事でもあるか。」と喬は打解た調子でいふ。

「いえ、何もそんな事は——」

「奥様、お目におかけ遊ばせな。」と形勢を見た磯は目顔で、何もかも自分に任せて、けとの意を悟らせる。

「それでは御覽遊ばせ。」と倭文子は不安を感じながらも、何氣ない様で、以前の手紙を良人の前に差置く。

「なか／＼立派な手跡だ。」と喬は黙讀しながら「ウム、梅小路さんは樺太の方へ出かけたと見える。貴族に似合はん感心な人だ。」

「さうでございますね。」

なほ黙讀を續けて、

「お前に餘程遣ひたい容子だな。大磯の方へも行つて見るか。」

「おや、嬉しうございます事！」と磯がさも無邪氣な喜びの聲を立てる。

「お前は平湯に厭たな。」

「あれ、さうではございませんけれども、奥様が遠山様や、梅小路様の姫様若様にお遊遊ばしたい事とお察し申しまして——」と磯は笑を帯びていふ。

「人よりは自分らしいぞ。」

「ですけれどもお暇がございますか。」と倭文子は眞面目である。

「さア、松島と両方へは六かしさうだな。大磯は未定の問題だ。」

「あら厭でございますね。おほ。」と磯は投げるやうに云つて笑つた。

喬も笑ひながら今度は手紙の追書に目を通したが、いつかその笑は消て、妙に厳格な顔になつた。

「これは誰の事かな。」

「え、それは……。」と倭文子は兼て期しては居たが、ハラ／＼となる。と磯がすぐ引取つて、

面白さうに、

「旦那様、當て、御覽遊ばせ、御存知の方でございますよ。」

「なに、己が知つて居る人だ。」と喬の顔は柔らいで「誰だ。」

「今日勿來でお遊ばした立花様でございます。」と濟した顔。

倭文子はほつと救はれたやうに思ひながらも、心には濟ない事との案じが浮ぶ。併し今更磯の詞を打消す勇氣はないので、自分はそれを認めるやうな笑顔を作つた。

「ウム、さうか。」と喬は首肯したが、なほ手紙を守り乍ら「かの方つて立花さんの代名詞だな。」

と獨語めかしく呟やく。

それに意味があつたのか、無いのか知らぬが、倭文子はちくりと針で胸を突いたほどに思ふ。磯は例の通りにこりとして、

「それは立花様は、お友達仲間の評判になつて居らつしやるハイカラな方ですから「あの方」で通るのださうでございます。」

喬は黙つて倭文子を見て、靜かに手紙を巻收め、封筒に入れて、無言のまゝ倭文子の手に返した。

磯は喬の心を測り兼ねたが、出来るだけ此場合を繕はうとして、

「奥様、それにしても立花様のやうな派出好で、そして賑なところのお好きな方が、よくこんな淋しいところに來てらつしやいますのね。」

「きつと松平様と御一緒だからだわ。」と倭文子も前の話は忘れたやうに莞爾する。

「あの旦那様、先刻はあんなに仰しやつて居らつしやいましたが、五浦の方へお越になりますか。」

「さア。」と間を置いて「明日あたり松島へ立ちたいと思ふが——」

「おや、そんなに急に松島の方へまるるのでございますか。」と倭文子の顔には安からぬ色が浮

ぶ。  
磯もハツと胸を傷めるのだ。

「こゝにも少し厭て來たし、五浦も何か氣が向かん。第一あの松平といふ男とは話をするのにも不快だ。お前はさうも思はんか。」

「はい、私も何だかあの方とは……。錦子さんばかりなら五浦へも行つて見たいやうな氣がいたしますけれども……」

「それでは松島へ立つとしようではないか。明日が急なれば明後日にしても善いが——」

(二十四)

立花家の五浦の別荘は俚俗蛇頭と稱する、宛ら大蛇が鎌首を擡けたやうに海の中へ突出した山端を、斜めに右手に見る位置にある、五浦は美術院派の畫家とその風光に憧憬れて、美術院村を作つたところで、繪畫研究所の建物さへも出來て居る。常盤線の海岸中に、恐らくこの五浦ほど詩的風景に富んだところはあるまい。

砂石の刻つたやうな山の崖が、海の中へ突出て海を抱き、山や崖には土佐や狩野の繪のやうな松が生え、海の中には蝕んだ珊瑚礁のやうな岩がごろ／＼横はつて居て。岩には蒼青な海苔や黒い鹿角菜や磯巾着が着いて、磯には海たなご、あいな、銀ほう、磯比目魚、章魚、おこぜなどが、女小供でも容易に捕るほどに寄つて居る。鮑の名産地で、海女が毎日海へ飛込んで居る、とそれを見下して居る海岸の山には、今山百合や桔梗や撫子が咲いて、葛の裏葉が吹上る浦風に翻つて居るのだ。

立花家別荘下手寄の海岸、眞白な砂の上、崖の松が日蔭を作つた下に、海水浴衣を着た松平亮二郎が、身體を投出して頬杖突けると、その傍に同じ段だらの襦衣を、ひつたりと肉の豊かな身體につけて、雪のやうな手足をあらはの錦子が、海水浴用の頭巾を被つて、後毛を搔上げながら、岩の上に腰をかけて居る。二人ともまだ海へ入つた様子はない。

「貴郎、もうお心持はいゝ事？」と錦子はもう馴々しい調子で笑ひながら問かける。

「心持が——？」と態とか眞面目に分らぬ顔。

「船の暈は取れましたかと伺ふんです。」

「船の暈？ 取れるも取れないもあるものですか。私なんぞはたゞそのちよいと……妙になつたゞけで、貴嬢こそよつほど顔色が悪かつた。ウム、まだ悪いやうだ。」と笑つて「どうです、お心持は……」

「存じません、たんと負借を仰しやい。船の中では口を利くさへ、大儀さうにして居らつした癖に。」とちよつと亮二郎を睨たが、何か思ひ出した様に「西洋の文學者が云つてよ。人生は

一ツの船量ですつて——メートルリングか誰かよ。」

「人生は船量？ 不愉快なもだといふ落かしら。」

「お互ひにそれを隠し合はうと、煩悶してるからですつて、ほ。」

「あは、巧い事を云つたものですね。錦子さん、頭が痛いでせう。」

「貴郎こそですわ。折角釣れて来て、面白くなるところなのに、貴郎は歸らうと仰しやる位ですもの。」

「併し錦子さん、誰やらの容子をそつと見てるとね、斯う編笠の下で天井を向いてね。」と仕方をして「眼をつぶつてね。手づりの糸だけを、さも大儀さうに上下して居たが、あれでも暈ては居なかつたのかしら。」

「あら、それは何だか眠氣がさして来たからよ。貴郎こそ歸りに仰向いて寝て居らつしたでせう。私はちやんと起てましたもの。」

「私が寝たのは、貴嬢が寝て居ると命令したからです。」

「それ御覽遊ばせ。暈た時には寝て居らつしやるのが一番いゝつて、私が申上たからですわ。」

「……貴郎は全體釣がお嫌ね。」

「嫌といふ事もないが、あんまりやつた事が無いからで。」

「釣はほんとに興味がありますわ。釣には神祕が伴つてるから面白いのよ。釣がノンセンスのやうに云ふのは東洋の思想だわ。」

「さうすると磯之丞などは身體中趣味の固ですなえ。」

「え……？」と松平が一寸奇抜な事を云つたので、その顔を見詰る。

「お、彼處にも山のやうな趣味の固が行く。」と今大津を漕出して來たらしい、赤銅色の裸男のぎつしりつまつた鰐船を指さし、

「覺えてよ。」と亮二郎を睨んで「人のいふ事をみんな茶にしてらつしやるんだから。」

かう云ふ時蛇頭の鼻の海岸を、ひよつくり曲つて表はれた美術院村の人らしい浴衣がけの二人連があつた。

「貴郎、海へ入りませう。」

「なに見られたつて構はない、夫婦だもの。」

「でも極りが悪いわ。畫家なんかは人が悪いに極つてよ。」

「は、貴嬢は美術院村の人に怨があると見えますね。」

『だつて父がこゝへ俾の通ふ道をつけようとする、土地が俗化するからいけない、陰へ廻つて反對する人達ですもの。』

『おや、彼方の方で驚ろいて引返しちまつた。』と亮二郎は蛇頭の鼻を見込で云つた。

美術院村の人は元來た方へと、また折曲つた姿を隠したのである。それから聯想したのか、

『だけれども昨日は勿來で、あんな極の悪い事は無かつたわ。』

勿來の話をすると松平の頭に血が上つた。併しすぐそれを紛らして、

『こつちも見せつけてやる氣になればいゝのです。それに貴嬢はいやに片づけちまつて、私な

どは傍へも寄つけなかつた。』

錦子は少し顔を染て、

『だつて倭文子さんがあんな所に居ようとは、夢にも思はなかつたんですもの……貴郎、ほん

とに倭文子さんを五浦へ呼んでもいゝでせうね。』

『そりやア貴嬢の勝手だが……久松も一緒に來られると癪に觸る。』

『倭文子さんばかりなら私が呼ないわ』と意味ありけな眼光を亮二郎に投る。

『どういふもので……』

『だつて危険ですから。』と濟して『貴郎は倭文子さんに戀して居らつしたんですもの。』と戲

談のやうに云つて莞爾する。

松平はびくりとした。併しこれも戲談のやうに受けて、

『さアそんな事があるかも知れませぬ。貴嬢が誰かに戀して居らつしたやうに——』

今度は錦子が赧くなる。

『あら私がいづ——』

『梅小路さんの園遊會の時などは、私はさんぐ冷遇された。』

『あら嘘よ、冷遇されたのは私ですわ。一度なんか、倭文子さんの姿を御覽になると、私を打

捨つて、後を追つて來らつしやいましたわ。私、あんな悔しい事はなかつたから、よく覚えて

居てよ。』

『へえ、そんな事があつたかしら。』と恍けて『どうも錦子さんの口先には叶はない。どうです、

海へ入りませうか。』

『まだよござんすよ。逃ようと思つて……もすこしお話遊ばせな。』

『でも海へ入らうと催促したのは貴嬢だつた。』

『まア、厭だ！ 誰か双眼鏡で見居るのよ。彼方へ行きませう。』と錦子は腹立しけにわが前

面の崖に目を注ぐ、

なるほど立花方の別荘に隣つた崖の上から双眼鏡を此方に向てるものがある。

『併し錦子さん、話は見えませんか。』

『きつとまた美述院の人よ。』

『どこまでも美術院が榮りますね。あの人はきつと貴嬢をモデルに欲がつてるに違ありません。どうです、藝術のために犠牲になつては。』

『おゝ厭なこつた。色の黒い印度人のやうな人だの、目尻の長い支那人のやうな人だのばかりですもの。』

『は、これは可笑しい、藝術と容貌と何んな關係がありますか。』

『ほう。』と錦子も笑つて『ですけどもまだ見て居るわね。』とぐるりと後向になる。

『あッ！ 今度は寫真機械を取出した。後向が馬鹿にいゝとか何とか云つて居る。』

『人を馬鹿にしてらつしやる。さア彼方へまゐりませう。』と件の崖を一瞥して岩を離れた。

松平も立上つて共に岩鼻を曲る。

『貴郎、まだ五浦にお飽なさない事！』

『昔浦島太郎といふ男が龍宮へ来て、三日ほど居たと思ふと、それが八百年だつたといふが、私も何だか龍宮へでも來てるやうです。』

『もう八百年も経つやうに思召すといふ計でせう。ほんとにお氣毒様ですこと！』

『白髪が生るまでも乙姫様の傍にばかり付て居たい！』

『ちやアいつまでもこんな田舎に居らつしつて？』

『乙姫様が歸れと云ふまで。』

二人はいつか腕を組合して居る。

『私はいつまでも夏で貴郎と斯うして居たいわ。』と囁やく。

『私はまた早く秋が來ればいゝ。』

『あら！』

『それでないと言嬢と結婚式が擧げられないから。』

錦子は莞爾として、

『結婚したら理想の生活しませうね。』

『出来るだけ青春の快樂を恣にしませう。』

『でなきやア損ですわね。』

松平子爵と立花錦子が五浦の海岸に所謂青春の樂みを追うて居たその同じ時に、久松喬はたゞ一人平潟の海に入つて居た。喬は山よりも海の好きな男で、避暑と云へば人に向つても必ら



海水浴を推奨する。併し彼が海水浴を推奨する理由は、醫者などの説とは違つて居る。違つて居るといふよりは寧ろ反對で、このごろは他にもかういふ説を唱ふるものもあるが、それは海水浴の効能は海水に浴する事よりも、浴しつゝある間に脳天から燒くが如き太陽の熱を受けるにあつて、この間に一種の精力乃ちエネルギーを感受するものだといふがその主張なのだ。で喬は日中一番熱い一時から三時ごろまでの間、太陽のキャン／＼當る時間を選んで、帽も何も被らずに海へ入る。尤も道がに倭文子に對しては、脳天受熱説の實行を強めない。倭文子連れて海へ入る時は朝の間か夕方、その時は倭文子にだけ帽子を被らせる。日盛りに出て行く時、始めの中は倭文子も海岸へついて行つたが、これも一二回の後からは、海岸に倭文子の待受る日蔭のないのと、待て居られてはゆつくり入つて居られぬといふ理由で、たゞ一人で出かける事にした。彼は游泳にかけても人後に落ぬ達者なのである、かくてこの一週間ばかりの間に彼の顔は赤銅の如く、身體は鐵の如く、頑健は更に一層の頑健を加へて、三歳児を恐れしむべき容貌となつた。普通の新婚旅行は生白くなつて歸るのだが、これは眞黒になつて丈夫になつて歸るので、よほど蠻的である。併し軍人の蜜月としてはこれの方が相應しいかも知れぬ。

今日も喬は柱時計が二時を打つと、例の脳天受熱のために出かけて行つたのである。明朝はいよく松島に向つて立つといふので、この間に磯と倭文子は、手廻りの整理を始めて居た。

『ねえ、お嬢様、旦那様はどうして急に平潟を立とうと仰しやるのでございませう。』

『私にも分らなくつてよ。』と倭文子は滅入つた調子になる。

『でも遠山さんのお手紙を御覽遊ばしてからののでございませう。』

倭文子は黙つて居る。

『何だか私には謎のやうで、さつぱり譯が分かりませんが、なぜ旦那様は、助川に誰か来て居らつしやるやうに思召したのでございませう。』

倭文子の唇には何かの閃が見えたのみでまたすぐ消えて了ふ。

『それから松平様が貴女に妙なことを仰しやつたのでございませう。私、邪推かは知れませんが、松平様が何か旦那様に仰しやつたのではございませうまいか。松平様はお嬢様を怨んで居らつしやるんですから……』

倭文子はなほ答をしなかつたが、暫らくして吐息と共に、

『私はどうしてこんなに、苦勞の絶ぬ身の上だらうねえ。』

『あれ、そんなにくよくよ思召すことはございませぬ。旦那様がよしんばどんな邪推を遊ばして居らつしやるにせよ、貴女が潔白で居らつしやるのですもの、どんなにお疑でもすぐ晴れて了ふに相違ございませぬ。』

倭文子はそれを認めぬやうな顔色をして、

『藤乃さんの手紙でも、旦那様を欺むいたのだから。私、何だか心に咎めて——』

『なぜさう貴女はお心が弱いのでございませうね。何もお嬢様が仰しやつたものではございませぬわ。もしあの時正木さんの事だと仰しやつて御覧遊ばせ。そして正木さんが助川にでも居らつしやると知れたら、痛くない腹もさぐられる道理ではございませぬか。嘘も方便と申しますものを——』

『だけでもあの時、いつそ正木の事だと、云つて了へば善かつたと思ふわ。』

磯は眼を睜て、黙つて倭文子を見つめる。

『後で知れるよか、その方がましだわ。』

『でも明朝松島へ立つて了ふやうですもの、よし正木様が助川に居らつしやるにしても、知れつこはないではございませぬか。』

また話が途切る。暫らくして倭文子、

『それにしても正木は、ほんとにこの近所に来て居るのかしら。ねえ、磯。』

『どうなのでございませうね。近所に来てらつしやるなら、何とかお葉書でも……尤もかういふ妙な羽目のところへ、お葉書など下さらない方が宜しいかも知れませぬけども……』

この話の間、二人の疑問に解決を與ふべく、自ら來つてこの別荘の門に立つた男のあらうとは、二人は夢にも知らなかつた。

名刺を手にして出て來た別荘の召使

『斯ういふ人が奥様を尋ねて來やんしたが、どういたしやんしよう。』

磯が受取つて一見すると、

『おや、お嬢様、正木様でございますよー』と聲を潜めて眼を睜る。

倭文子も色を變たが機械的に名刺を受取つて、

『磯、どうしやうね。』

『どうしやうと仰しやつて、……お遣ひ遊ばすまでとございます。入つしつたものを今更仕方がないではございませぬか。』

『……さうね、遣はない譯には行かない……一寸遣つてすぐ歸つて貰へば……』

『私がよいやうに致しますから、こゝへお通し申ませう。旦那様がお歸り遊ばさない中に、一

お歸し申せばようございます。(召使に向つて) ちやこゝへお通し申して下さい。』

理學士正木貞雄は木綿白縞の單衣に袴を着た例の通りの書生風で、自分の事から湧た暗流が新夫妻の上に蟠まつて居ようとは少しも知らず、たゞ倭文子が果して幸福に暮して居るかを案

するより外には何の考もなく、いつもの洒々落々な態度で召使のものに案内される。

「まア正木さん！ さアどうぞこちらへ——」と磯の顔には迷惑といふよりはまづ懐かしい色が浮ぶ。

「お嬢様、御機嫌よく——」と正木は倭文子に會釋してその顔を仰いだ。

會釋を返した倭文子の顔はちよつと赧らんだが、すぐ蒼白い色に返つて、

「そして正木どうしてこゝへ——？」

「四五日前から友人と助川に来て居るんです。」

「え、助川に——」と倭文子と磯はさてこそと顔を見合はせる。

二人の様子が何か變だとは思ひながら、貞雄は深く心にもとめず、

「今日は友人とわざと日盛を擇んで、勿來へ強行して來たので、今歸りがけなんです。友人は大津に知人があつてその方へ行くといひますから、この下で別れて、すぐお尋ねしました。」

「この暑いのに、まア……随分酷かつたでせう。」

「今八幡の處で風を入れて來ました。久松さんは——？」

「は、あの今海へ行きました。」

「この暑い最中に海へ行つしつたんですか。」

「ほゝ、貴君も同じやうな事を……。旦那様はいつでも日中に海へお入りなされるのでございませう、お日様のかん／＼當る時に入らなければ、海水浴の効能はないと仰しやるのでございませう。もの。」

「ウム、鍛錬主義だね。」と貞雄は事も無げに云ひ放つ。

「何主義でございますつて？」

「僕が勿來へ梅干と握飯で強行して來たやうなものさ。」

「あ、さうでございますね。」と磯は始めて悟つたやうに莞爾「お身體を鍛へるにはそれ位の事をなさらねばいけませんわね。」

「海へ行つしやつたのなら、やがてお歸りなさるでせう、お目にかゝつて歸りたいと思ひますか……」

磯と倭文子はまた顔を見合せた。倭文子の口からは軽い溜息が漏れる。

貞雄は何か二人の様子の意味ありけなのを見て、疑問の眸を二人に向けた。

「正木さん、實はね、今何だか妙な羽目になつてるもんですから……」

「え、妙な羽目とは……」

「お嬢様」と磯は促し顔に倭文子を見る。

倭文子は俯むき氣味になつて居たが、一寸ためらつた後、

『お話しの方がいゝわね。』と磯を見て『よくお話をしなきや分らないんだけれども——』と柱時計を仰いで見る。

磯はそれと推して、

『まだ二時半でございますわね。旦那様は三時過でなければお歸りになりは致しません。よく事情をお話し遊ばせ。』

『あのね、正木、昨日私達も勿來へ行つて來たのですがね、思ひがけなく勿來で、松平様と立花錦子様にお目にかゝつたのよ。——それは何でもないのだけれどもね、その歸りに松平様がいろ／＼厭な事を仰しやつて——』

『厭な事ツてどんな事です。』

『あの方から結婚の申込のあつたのを、拒絶したり、何かした事なのよ。』

『そりやア怪しからんですね。男らしくもない。それから——』

『そして終に正木と私には、さん／＼侮辱されたと仰しやるから、私は正木がどんな侮辱をしましたつて伺ふと——』

『はア……』と此方は耳を敬だてる。

『さうするとね、正木の事だと私が……熱心になると仰しやつて（と顔を染め）——今までもそんな厭味を仰しやつた事はあつただけども——。それから正木は今東京に居らぬが、どこに來て居るか知らしてやらうつて——』

正木は憤然として、

『松平さんがそんな失敬な事を云つたですか、實に怪しからん話です。……そして貴方はどうなさいました。』

『私はもうそれからは何も口も利かずに、來て了つたから……。何でも松平様はどうかして貴君が助川に來てお出の事を知つたのに——』

『それは知つて居ますとも。私は助川で松平様に遭ひましたから。』

『まア！ それでございませぬ。』と磯は始めて悟つて、倭文子と見合つた。二人の互ひに顔き合ふ顔には、正木のまだ想像だも及ばぬ意味が籠つて居たのである。

後は磯が引取つて、

『正木さん、それだけなら別に何でもないんですけどもね、松平様にお別れ申してから、旦那様が奥様——お嬢様に、助川に誰か來て居るだらうと、突然にお尋ね遊ばすのでございます。』

『フム。』と正木の顔には安からぬ色が浮ぶ。

『お嬢様は貴君が助川に来て居らつしやる事は、夢にも御存知ありませんし、またそんなお心當の方はございませんでしたから知らぬと御返事を遊ばしたのでございます。すると旦那様が、全く来て居らぬかと念をお押し遊ばすのでございませう。いくら念をお押し遊ばしても、お嬢様のお返事の變る筈はございませぬわ。……ですけども、それはもうそれで済む外仕方が無かつたのですが、それからどうも旦那様の御機嫌が前のやうでないやうに——』

『フム、若しか松平様が、何か吹込んだのでは……』と太息と共に腕組して『併し久松さんがたゞ一片の中傷——を假に有つたとして——信する筈はないでせう。久松さんの態度が變つて居らつしやるといふのも、或はこちらで迎へて見るからちやアないのですか。』

倭文子はたゞ俯むいて、何も云はぬ。

『ひよつとするとさうかも知れなかつたのですわ。ですけどもそれからまた引續いて、こんな事が重なつて了つたのですもの。——それは昨夜遠山様からお手紙があつたのですが、そのお手紙の末に、かうと、お嬢様、何といふ文句でございましたつけね。』

倭文子は手紙を取り出して正木に見せた。正木は手早くそれを讀了る。

『つい喬がその手紙を見て了つたものですかね。』

『それも無理に御覽になつたやうなものでございますわ。』

『そんな事もないけどもね、あの、つい御覽になつたものだから、誰の事だと仰しやるのよ。』とためらつて『それも前の事さへ無つたら、私はすぐにも貴君の事だと申上るのだけれども、何だか氣が咎めて……それに藤乃さんの手紙で、貴君がいよ／＼この近所に來てお出の事が分つて見ると——殊にそれが助川なのぢやアないかと、……私は何か恐ろしいやうな……後暗いやうな氣がして、どうしても貴君の事だとは——』

『それで、何と仰しやつたのです。』

『私が横合から。』と磯が口を入れて『それは立花錦子様の事だと申上て了つたのでございます。』

『フム。』と貞雄も次第に安からぬ面色になり『併しこれで済んだのですか。』

『えい、済みは済んだのですが、旦那様は何だか底に物のあるやうな御容子で、夫から暫時すると……まだ四五日は平瀉に居らつしやる筈なのを、急に松島へ立たうと仰しやるのでございませう。……で松島へは今日にもと仰しやるのを、いくらか用意もあるものですから、漸やく明朝にして頂いたのですが、きつと何か邪推を遊ばして居らつしやるに相違ありません。それだとお嬢様がお可哀相ですから……』

『なるほど、前後の事情を伺つて見ると、何か暗流がありさうですな。これまではさういふ事は無かつたのでせうね。』

『えい、えい。』と磯は首肯して見せる。  
 『併し僕には久松さんがそんな邪推をなさる方とも思はれんが、やはりお磯さんの疑心暗鬼なのぢやアないかしら。』

『それだといふんですけれども。』と正木を見た磯の顔には、明らかにそれを認めぬ色が見える。  
 倭文子は意見を挿さまなかつたが、臆病らしいその眼は、また柱時計の方に凝がれる。だんだん神経的になつて来る様子である。磯もどうやら不安の素振で、一寸詞を改め。

『正木さん、兎に角さういふ事情でございませうから、今貴君が助川に来てらつしやる事が、旦那様に知れては、何だか都合が悪うございませうよ、自然お嬢様も痛くない腹を探られるやうな譯で……さうした場合に、後からの申譯が立ちますか、立ちませんかこの磯にはどうも……でございませうから、磯の思ひますには、お嬢様も貴君の助川に居らつしやる事は、御承知の無い事にして、當地をお立遊ばした方がよからうと存じますが——』

『さうすると、僕もこのまゝ秘密に歸るんですね。』と自ら嘲る如く貞雄は苦笑した。

倭文子は胸苦しい様子で、

『それとも正木、外に何かいふ考へがあつて？ 貴君が喬に打明けた方がいふと云へば、私は何もかも打ち明けて——松平様に云はれた事も、今日貴君の來た事も、何もかも云つて了ふけど

も……』やる瀬なけに俯むいて『ただども、正木、私にはどうしても打明けられない事があるわね。』

正木は心の傷を覚えながら靜かに、

『なほ確かめて置たいですが私が嫌疑を受けて居るのですか、どうなのです。』

磯が引取つて、

『それが旦那様は、正木さんのお名を一度も仰しやらないのでございませう。また旦那様が何かお口に出して仰しやるのなら、却つて仕様もございませうけれども、それでないので、なまじひ此方から申上ては、藪から蛇を出すやうなものぢやアないかと……。お嬢様は今のやうに仰しやいますけれども。』と倭文子の方を向いて『もしか正木さんの事を、松平様が匂はしたものとして御覽遊ばせ、そんな場合に、正木さんが助川に来てらつしやる事や、今日訪ねて居らつしやつた事を申上ては、却つて旦那様のお疑を解くどころか、却つて油をさすやうなものはございませんか。』

正木は思案して、

『いや、さういふ事情であるとする、どうやら僕もこのまゝ歸つた方が、お嬢様の御利益のやうです。併し自分から罪を犯したやうに、進退を曖昧にしなけりやならんとは……實に馬鹿

二八八  
けてるですな！ 私は今日は久松さんにもお目にかゝつて、胸襟を開いて頂かうと、それを樂しみにして來たんです。』

『まあほんとにねえ。』と倭文子の聲は震へる。

『どうも止むを得ません。これでお暇しますが、もし久松さんが實際何かの邪推をして居らつしやるとすれば、それは貴女の誠意で融和するやうになすつて下さい。どうせ根據のない事ですから、長く疑のかゝる筈もなし、決して御心配なさる事はありません。あんまり氣にかけて、それが態度に表れるやうな事があつては、それこそ却つて不利益ですから。……ちやア失禮致します。』

『正木、折角來て下すつたのに……私こんな辛い事は無くつてよ。』

『いや、お察し申します。どうぞ御自愛なすつて下さい。松島へは明朝お立なのですな、いづれ東京で、久松さんにも改めてお目にかゝりませう。』

磯は草履を突かけて正木を送つて出る。

『お嬢様が嘸本意なく思召して居らつしやいませう。』

『お磯さん、僕は實にこんな不快を感じた事はない。……全體久松さんは嫉妬深い人なのです。』

『まだよく存じませんが、そんな方なのぢやアないかと——』

『今までは何うだつたのです？ お嬢様と久松さんの間は……？ それを聞正したいのだが。』

『えい、それは大層いゝ按梅だつたんです。お嬢様もお覺悟を遊ばした故か、それはよく旦那様にお盡し遊ばして……。全く勿來から歸つて入つしつてから妙な工合に……』

『ウム、そりやア困つたね。なに併し何でもあるまい。どうぞよく氣をつけて下さい。頼みますよ。』

『えい、そりやアもう出來るだけの事はいたしますが、貴君こそこの先いつまでもお嬢様のお力になつてあけて下さいまし。』

磯は正木を送り出して引返して來るとほつと一息、

『旦那様がお歸り遊ばさないでようございました事！』

『私やほんとに、どんなに心配したか知れなくてよ。……でもまあ善かつたわね。』倭文子は小さな胸を撫た。

『たゞ今宿へも口止をしてみました。』

倭文子は自ら罪深く感じて、

『だけでも磯、情ないわねえ。全く後暗い事でもしてるやうだわ。』

『でも時の方便で仕方がございませんわ。』

『もし後で旦那様に知れたらどうして？』

『お嬢様、そんな取越苦勞を遊ばしたら、際限がないちやございませんか。安心して磯にお任せ遊ばしませ。正木さんも入ぬ心配を遊ばして、それがお顔へ出るやうでは却つてお爲にならぬと仰しやつたではございませんか。』

『それもさうねえ。』と倭文子は淋しく俯むく。

別荘を辭した貞雄は、一種の不快と、倭文子に對する切なる同情を感じつゝ、重い心を荷つて山を下りて行く。

貞雄の山を下る姿は、恰かも炎天の海水浴を終つて、平潟の町を歸つて來る喬の視線に入つた。その時はすつと間を離れて居たが、やがて二人は町の中で摺違ふ。二人ともまだお互ひに知らぬ中である。貞雄はこれが倭文子の夫であらうとは夢にも知らず、その赤銅のやうに焼けた顔色、眞黒な口髭、偉大な體格を遠目に認めただけで、摺違つた折には喬には目も呉れなかつた。喬の顔の印象は少しも貞雄にも残らなかつたのである。

併し喬は貞雄の山を下りる姿を見かけた時から注意したので、摺違ふ時にも鋭どい一瞥を與へた。併し敢て疑惑の眸子を注いだ譯ではない。たゞあの山を下りて來るからは、若やわが別

莊の訪問者ではないかとの疑問も自然に湧いたが、併し山の半腹には小學校もある。山の頂上には燈明臺もある。この男も燈明臺の役員か、小學校の教員であらう。少なくともその方が近いと思つた。喬は何心なく妻の許へ歸つて行く。



# 月 魄

菊池幽芳

## 倭文子の巻

(一)

平潟で久松喬と正木貞雄と偶然邂逅した翌日喬夫婦は松島へ向けて平潟を出發した。途中松島と仙臺に三日を費やしたが、この間に喬の態度は融和して、どうやら舊の通りになつたので、新らしき妻の美しい姿と優しい仕打が疑惑の暗雲を一掃したのであらう。平潟を早く立つたため、まだ餘裕があるので、夫婦は日光に立寄り、中禪寺湖畔に残る日數を過して、歸京する事としたのである。

一行は今朝早く仙臺を立つて、日光の停車場へはまだ日の高い中に着いた。すぐ二人曳で四里の山道の中禪寺へ急がせる。喬は馬返しから徒歩になつて舊道を車夫と共に一直線に上つた。

やがて大平へ来て汗を入れてるところへ、漸やく倭文子と小間使の車が追つく。  
 喬は獨逸へ行く前、或年の松の内を中禪寺に送つて、毎日雪中の探險を試みて居た事がある。  
 湖畔の米屋は相識なので、仙臺から前日電報を發して置いたのだ。一行が着くと座敷を明けて待  
 つて居たので、早速見晴しのよい一室へ導びかれる。まだ暮残る黄昏の光に、打開いた座敷か  
 ら、海拔四千尺の山の中に塵だに浮べず湛へた碧瑠璃の湖水を、一杯に見た景色、何とも云へ  
 ず美しく神々しいので、三人は秀麗の氣に打れながら、言合はしたやうにまづ様に出て、欄  
 干に寄つた。やがて茶が運ばれる頃には汀を圍む山々の翠は黒く、湖水の上は臙ろに霞んで、  
 短艇を操つる西洋婦人の白衣が一きは鮮やかに、湖畔の落葉松を渡る風さら／＼として、涼し  
 さといふよりは冷やかさが、ひた／＼と人の肌を襲ふのであつた。

夜は靜かにこの別天地を鎖して、やがて人々はみな安らかな眠に入る。  
 翌る日も美しく日であつた。連立つて宿を出た喬夫婦は磯をも具して、ぶら／＼と華嚴瀧  
 の邊へ來かゝる。大平に續いた此邊の景色は誠に幽邃の極で、瀧の音はもう響々と物凄じばか  
 り、茶店の軒に駒鳥が高鳴をして居るのが殊に深山の寂寞を感ぜしむる。茶店へ來て腰を卸す  
 と、直下七十五丈の大瀑布が谷を斜めに、目の前に漲り落ちて居るのだ。空氣の抵抗を受けるの  
 で百川一時に瀉下する如き瀧の水は、途中で捲れ返つて、綿のやうになり、雲のやうになつて

落る。下からは奔馬の如く滾々と立昇る水煙の中に、縱横無盡に岩燕が飛廻つて居る。何とも  
 云へぬ壯觀である。

倭文子も磯も前に一度來てこの瀧を見た事がある。併し何度見ても華嚴の壯觀には心を寒う  
 するのだ。喬も昨夜華嚴瀧に對すると、凡ての邪念を忘れて、人間の極めて最小なる事を感じ  
 ると語つた。倭文子は今この瀧に對して何とも知れぬ恐怖がある。敢て心に疚しとするのでは  
 ない。端なく自分の運命に想到して、無意味なる一種の疑懼の懷に入るを覺えたのである。

喬と茶店の婆の間に問答が始まつて居る。  
 『なに昨日も身を投た奴があつた？ やつぱり書生か。』

『いえ、旦那様、何でもお店ものゝ遣ひ込でもあるらしい、二十四五の苦味走つたい男で  
 ございましたよ。こゝで暫らく休んで、それから瀧の方へ行つた容子でございましたが、暫ら  
 くすると旦那様、瀧へ飛込む姿がこゝから見えたのでございます。ハツと思ひましても、もう  
 貴君追つく事ではござりません。』

『まあこゝから飛込むのが見えたのかえ。』と倭文子は色を變て口を入れた。  
 『えい、奥様、見えたの段ではござりません。私はこれまでに四五人飛込む姿を見ましてござ  
 ります。ちやんと柵を結つて、巡察さんも出張りますのでござりますが、飛込む方では貴女、

ちやんと隙を狙つて居ります。どうする事も出来はいたしません。みんなそれは死神の憑ましたものでござりましょう。』

『まア、さう。』と倭文子はわれ知らず身震が出る。

『一日などは貴女、三十人も投身に出かけてまるつたものがござりました。それがみんな一度はこの茶店へまるつて休みます。』

『ウム、それは盛だね。併しみんな死んだ譯ではあるまい。』

『左様でござります。壽命のありますものは、それでもみな助かつて歸ります。大抵は容子で分りますから、巡査さんが来て説諭をいたしましたり、無理に連れて歸りましたり、また私どもに致しまして、何人こゝからお歸し申したかも知れません。』

『さうか。そりやア大分功德をしたね。』

『これが一樹の蔭とやらでござりませう。』と婆は一寸腰を伸す拍子に、床几の上に杖を翳した山毛櫨の樹を仰いで『この婆も來世は佛様に生れ變つてまるるかも知れません。ほゝ。』と缺残る齒を出して氣散じに笑つて見せる。

『何しろ華嚴病の傳染は凄まじいものだね。あはゝゝ。』と喬は敢てわが鬨することにあらすといふやうな高笑をする。

『何せよ貴君、この二三年に身を投たものが、警察のお調で百九十何人、ざつと二百人ござります。こゝまで死にまるつたものゝ三人が二人までは、説諭なり何なりで、保護を受けて歸りますのにその三ツ一ツが二百人と數へて見ますと、恐しい事でございます。またかうなりますと死人がめいゝ友を呼びますから、誘はれて來るものは殖るばかり……やがて華嚴の瀧壺は洒れた人間の骨で填まる事でございます。婆は今年六十五になりますが、これまで華嚴へ身を投けるといふやうな話とはんと聞た事がござりませぬ。やモ長生を致しますと、無氣味な事に遭ふものでござります。このごろでは夜々瀧壺に鬼火が見えるなど申しまして、この婆も寝心のよい事はござりませぬ。』

この話の間倭文子の顔は次第に蒼ざめて來たのを、喬も婆も氣がつかなくかつたが、磯がそれと知つたので、

『おや、奥様、どうか遊ばしましたか。』

この聲に驚ろいて喬と婆の視線は倭文子に向けられる。倭文子は寧ろ慌てゝ、

『いゝえ、どうもしやしません。たゞ婆やさんの話を聞てると、何だか惹入られるやうな氣がして——』

『これは奥様、私、うっかりでございました。飛んだ無氣味なお話を申上しまして、恐入りまし

てござります。どうぞお免し遊ばして——』

『あれ、婆やさん、何でもないのですよ。ちよいと眩暈の氣味がしたばかり——それもモウいいんですから。』

『お前、ほんとに大丈夫かえ。』と喬も心配さうに覗き込む。

『ハー、もう大丈夫でござります。』と莞爾笑つて見せる。

磯が清心丹を出したり何かして、その一段が済むと喬は立上り、

『ちよいと下へ降りて見るか？ 瀧壺が見えるぞ。』

茶店の東寄から三四十間組道を下ると、そこに四阿があつて、瀧壺が窺けるのだ。

『え、もう澤山。』とためらひながら倭文子はいふ。

『それでは私一人見て来やう。暫らく待つて居つてくれ。』

『どうぞ御ゆつくり……私、暫時こゝで休んで居たうござりますから。』

『ウム、それでは長い事華嚴瀧と睨めつくらをして来るぞ。私はこの前二時間ばかり睨めつくらをした事がある、さうすると人間がよつほど大きなものになるな。』

『一時間でも二時間でもこゝにお待ち申して居ります。』と倭文子は美しい笑顔を作る。

喬は組道を降りて行く。

『ちよいと奥様、鍋島様ではございますまいか。』と此時磯はブラ／＼茶店の方へ來かゝる浴衣かけ、パナマ帽の紳士に目を留る。

倭文子はその方を見たが、

『さうね、何だか鍋島様のやうだわね。』となほ見て居たが『やつぱりさうよ。鍋島さんよ。』といつか懐かしさうな色が浮ぶ。

彼方はそれとも知らずに、茶店の方へ近づいて來る。

倭文子と磯が床几を離れて鍋島を迎へようとする時に、鍋島も始めて、二人を認め満面に笑を湛へて進み寄りながら、

『やア倭文子さんでしたか。どうもこりや意外ですね。日光へもいらつしやる筈だつたんですか。』

倭文子も笑傾むけて、

『ハイ、あの参るつもりもなく、松島で日が餘つたものですから、寄途を致したのでござります。昨日當地へまゐりましたので……』

『あ、さうですか。何にしてもこゝでお目にかゝるとは愉快です。』と鍋島は心よりこの不意の邂逅を喜ぶのである。

倭文子と鍋島と正木は三人とも昔馴染の間柄で、倭文子は今も鍋島を他人とは思つて居らぬ。別して今度の縁談に盡力したのは鍋島なので、夫婦間の事については、鍋島を少なからず頼にして居るのである。

『そしてどこにお出です。久松君はどうしました。』

『ハイ、米屋に来て居ります。久松はたつた今そこを降てまゐりました。長い間瀬と睨鏡をして來るとか申しまして……』と打笑んで『まあ貴君、お掛遊ばせ。』

『あゝさうですか。』と鍋島は倭文子と向ひ合せの床几に腰を卸して『私も昨日東京を立つて來たのです。本家の別荘に來て居ますから歸りにお寄下さい……。どうです。大變に案じて居ました。』と微笑を帯て、意味のある眼を倭文子と磯に凝ぐ。

『え……』と倭文子は顔を染て俯むいたが、その紅は見る間に褪た。

鍋島はそれをどう見たか、視線を磯に向けて、

『併し後でお磯さんに聞かう。』と磊落な調子で云つて立上り、また倭文子の方を見ながら、

『併し倭文子さん、貴女はこれからが難關ですよ。』

倭文子は一度鍋島を見た眼を落して、

『私、お母様のお氣に召すかと、そればかりが氣がかりでございます。』

『久松は武骨な代りに案外單純で、扱かひ悪い方ではないが、母は一寸難物ですからね。……併しなにそのつもりでかゝれば大丈夫でせう。どうもこの姑といふ奴はいつも問題になるが、單に一人の私情から云へば、嫁が來るといふ事は最も悲むべき事であるかも知れませんが、これまで自分が何もかも世話をして居たものを、嫁が世話をする事になつて、自分は手を引かなければならぬし、また息子の自分に對する愛情も自然殺れるに相違ないのだし、これまでは一家の主權を握つて居たものが、それも引渡して仕舞はねばならぬといふやうな譯ですから、これが僻んだ姑であると、嫁が目の敵のやうに憎くなつて、一舉一動が癪に觸る譯ですよ。殊に嫁と息子が仲の善いのを見ると、嫉妬の情に驅られるといふのは、まづさもあるべき順序で……。どうしたところで双方の感情の一致する筈はありませんが、併しこつちでも姑の心理的作用には多少の同情を持って居れば、融和の道があらうといふものです。まづ貴女も當分一苦勞なさる積りで居らつしやい。人情の曲折を知る事も詰り自身の修養です。また眞の快樂は自由の中にあるので、決して若夫婦が青春の慾を恣にするところには無いと、私は信じますよ。』

倭文子は眞實ある友の言葉に心を動かされて聞いて居たが、

『ハイ、よく仰しやつて下さいました。私も安樂を致さうと思つて、久松へまるつたのではないから、きつとどんな辛い事でも辛棒いたす考でございます。』

『どうかその積りで居らつしやつて下さい。殊に鬼千匹に譬へられる小姑まで有んですから…母も非常に貴女に同情を寄せて居ます。何かの時には母に打明て御相談をなすつて下さい。』

『ハイ、貴君や小母さんを頼に致して居ります。』

『母は必らず貴女の御利益を謀ります。私は近く英國へ行く事になりましたから、二年ばかりはお目にかゝれますまいが、彼地で貴女の幸福な消息をお待申して居りませう。』

倭文子の顔色は變つて、

『おや、貴君も英吉利へ行つしやるのでございますか…。私、何だか心細いやうでございませう。』

『どうせわれくのやうな海に生活してるものは、内地に居るも外國に居るも同じやうなものです…。おゝ外國と云へば正木君も洋行するさうですね。』

『は、…尤も一年ばかり大學院で研究した上に出かけると申して居りますが…。』

『今避暑にでも出かけて居りますか。』

『え、…』と磯と顔を合せて『多分海水浴にでも行つて居るだらうと…。』と躊躇ながら云

つた。喬にさへ包んで居なかつたらば、鍋島に打明るのは何でもなかつたのである。

『其中是非正木君にも遭いますが、貴女からもよろしく仰しやつて下さい。』と後の崖を見返つ

て『併し久松君は何をしてるでせう。一向上つて来ませんね。』

『一時間も瀧と睨めくらをして居ると、人間が大きくなるなど申して、降りてまゐりましたから、まだ上つて来られないかも知れません。ほゝ。』

『さうですか。』と鍋島も笑ひながら立上つて、瀧の方へ目をやり『實に壯觀ですね。お磯さん、これが冬になると、すつかり氷つて落なくなるから驚くでせう。』

『まアさうでございますか。』と磯は目を圓にして鍋島を見たが、笑つて居るので『おほゝ、まさか…。ねえ、奥様、そんな事はございせんわねえ。』

『いや、ほんとうで、たゞ氷柱だけがぶら下つて恐ろしいやうになります。湖水の水量が減るから、こんなに凄まじく落てる瀧が、冬はたゞそれだけになるので…。』

かう云ひながら鍋島は瀧の方へ歩いて、

『お磯さん、いゝものが咲てますよ。』

『おや、何でございます。』と磯は物珍らしさうに鍋島の傍へ歩み寄る。

『ね、ほら綺麗でせう。』と指さす崖の中程にいくつも大きな山百合が咲いて瀧から吹捲る風に頭を振つて居る。

『まア綺麗でございます事ね。今ごろ箱根にも澤山咲いて居りますわね。』

併し鍋島が磯を呼だのは、山百合を見せる爲ではない。

『お磯さん、どういふ工合だったのです。私は實際案じて居ましたよ。』

お磯にはどれほどまで鍋島に打明てよいか分らぬ。また鍋島に打明られぬ事のあるのも知つて居る。

『ハイ、お嬢様は……御決心の上とは申しながら、それは感心なほど旦那様をお大事に遊ばしますから、旦那様も御満足遊ばして居らつしやいますが……。たゞ一度平潟で氣懸な事がございまして——』

『平潟で氣懸な事？』

『ハイ、何でもお嬢様が、祕密に誰方かと……お遊ばしはせぬかといふやうな邪推を遊ばした御容子なのでございます……。ほんとにあんな心配な事はございませんでした。』

鍋島はさてはと思ひ當るので、胸を傷めながら、

『もしや何か久松に、中傷の手紙でも来た容子は無かつたのですか。』

『そんな事は無いやうでございます。たゞその前に思掛なく勿來で紀尾井町の松平様とお目に

かゝりました。それからでございますが、まさか松平様が……。それに折悪く遠山さん——梅小路様の家庭教師を遊ばして居らつしやる方から、お手紙があつて、そのお手紙の文句に……謎のやうな事があるのを御覽遊ばしたり何かしたものですから、なほと邪推を遊ばした御容子で、實はそれで急に平潟をお立遊ばしたのでございます。』

『フム、そいつは困つたな。』と眉をよせて『實は私もそんな事があつてはと案じて居たのですが……、でその邪推はどう收まつたのです。』

『ハイ、もと／＼お嬢様に後暗い事のある譯ではございませんし、またお優しい御氣象が自然旦那様に通じたものでございませう。松島へ行つしやつてからは、またもともと通り御機嫌をお直し遊ばしたのでございます。』

『フム。』と鍋島は考へて『そんな事があつちやアいかん。私からもいづれよく忠告しますか……』

『ですけども、私共が貴君にお喋舌したやうにお取遊ばすやうな事があつては——』

『いや、大丈夫です。倭文子さんに迷惑のかゝるやうな事は、噯にも出しませんから。』

『この先またそんな事でもありますと、ほんとにお嬢様がお可哀相でございますし……』

『後から聞いたのだが、久松の母といふのは有名な嫉妬家だつたといふ事ですから、ひよつと

するとその遺傳で……」

「まアさうでございますか！」と磯は目を睜る。

「併し久松は男だから、そんな事も……」

かう云ひながら鍋島はまた床几の方へ歩いて来たが、丁度その時番の頭がひよつくり崖から表はれた。

「ヤア久松君。」

「お、鍋島君か！」と番は驚ろきながら上つて来て「こりやア不思議だね、君はいつ来て居つたんだ。」

「なに、昨日来たのだがね、僕も實に意外だつたよ。まア何にしても君等に遭ふとは愉快だ。」

「そしてこゝへは今来たばかりか。」

「ウム、一寸……今奥さんに御挨拶を済した位のものさ。」

二人は床几に腰を卸して暫時言葉を換したが、やがて鍋島は立上つて、

「君、大平の方でも散歩しやうぢやないか。倭文子さん、どうです。」

「ハイ、お伴致しませう。」

久松も倭文子も床几を離れる。すぐ大平へ出ると、山毛櫛や、白櫛や、楓などの潤葉樹が日

の目を透さぬほどの大深林をなして居て、これ等の喬木の梢には長いさをがせが垂れて、蒼然たる古色を呈して居る。木肌の白い、薄皮の剝かけて居る白櫛が、すく／＼と山毛櫛や楓に雜つて居る風致は内地の深林で見られぬ美観で坐るに北海道邊の原野を憶はしむるものがある。

「日光は中禪寺の湖水も善ければ、深澤の邊も善い。併し僕の最も愛するのはこの大平だ。」と鍋島は云ふ。

「ウム、いゝ。華嚴瀧を見て来て、大平へ入ると何とも云へん爽快な氣持になる。……君、西比利亚へ行くところの白櫛が純林を作つて居るがね、そりやア實に美事なものだぜ。」

「まア、さうでございますか。どんなにか綺麗でございますねえ。」と倭文子は口を挿んで見ると、

「倭文子さん、何でもこの皮はよく燃る筈です。」と鍋島は紙のやうな眞白な皮を剝り始めた。

「北海道や西比利亚の土人は之を松明に用ゐるが、どんな雨の中でも雪の中でも、火さへ持つて行けばすぐついて消ないのだ。そりやア恐しい脂だから。」と、番は説明する。

鍋島は剝つた皮に燐寸を摺つて點して見る。眞白な雁皮紙ほどの薄つべらなものから、凄まじい黒い脂をじり／＼と出して、油焰を立てながら燃えあがる。



『まあ妙でございますねえ。磯、澤山あるときつけにいゝわねえ。』

『倭文子さん、新世帯の手始めに、どつさり皮を撈つていらつしやつたらどうです。』

『おほ、さうでございますねえ。』

一同は聲を揃へて笑聲に入つた。

倭文子と磯が物珍らしさに、樺の皮を剥いて見ると、容易に取れる。

『やア、奥さん、いよく撈り始めましたね。久松君、女といふものはすぐ世帯氣の出るとろが感心だね。』

『ようございますよ。どつさり取つてまゐりますから……。ねえ、磯。』

『さうでございますね。行李に一杯取つてまゐりませう。ほ。』

『それならどつさり取つて居らつしやい。この邊をぶらついてますから……。』と鍋島は笑ひながら云つて『久松君、少し奥の方へ行つて見よう。』

二人は黙つて同じ方角へ進み始める。暫らくしてから鍋島は無造作な調子で、

『どうだえ、君、楽しい蜜月であつたと察するが、さう信じて間違はあるまい。僕も先刻倭文子さんの幸福らしい顔を見て、始めて安心したのだが……。』

『さア幸福であつたか、苦い経験であつたか……。まア他所から想像するやうなものでもない

さ。』と之も無造作な調子で受ける。

『僕は實は例の手紙の件があつたから、私かに案じて居たので……。併し君、今度の旅行では、充分倭文子さんを了解する事が出来たらう。假に君に疑惑の分子が残つて居たにしても、それは残りなく一掃されたらうと思ふがどうかね。』

『ウム、僕はもう手紙の事なんか思つては居らんよ。また倭文子にそんな事のあるべき筈はないとも深く信ずるから。』

『いや、それなら僕も満足だが——』と喬の心を讀まうとする様にその顔を見て『僕は最近に英吉利へ出掛るから、偶然こゝで逢つたのを機會に忠告するが、例の中傷の一件だね。一度ああいふものをよこした以上は、またどんな手段を取つて第二第三の中傷を試みんとも限らんと思ふ。その都度君の心が動くやうでは、家庭の幸福は破れるのだから、これは充分に君が覺悟をして居つて貰はんと困る。僕はいくれんも君に云ふが倭文子さんは實に貞淑な婦人だ。また正木も品性の高潔な青年だ。一度よく正木と逢つて見給へ、どういふ人物かは一見して分るだらう。久松君、世の中にはイアゴアのやうな奴も居れば、ロデリゴのやうな奴も居る。現に倭文子さんは一人や二人のロデリゴを作つて居る筈だ。僕はオセロとデステモナの大悲劇は君の三省に値すると信ずる。』

鍋島の熱誠を籠めた調子に、久松は少からず動かされた様子で、

『よく云つてくれた。君の忠言は決して忘れん。僕も必らず根據のない事を軽卒に疑ふといふやうな事はせんから、案じてくれ給ふな。』

『僕は倭文子さんには非常に同情を表しとるから、大いに君に勞はつて貰ひたいのだ。これまでもすら生の母に分れて苦勞を仕拔て來たので、君のところへ來れば、君の母や妹のためになた苦勞をせんければならん。随分氣の毒な話だ。君が同情を持つて、陰日向に勞はつてやらなければ、全く立瀬がない譯だから……』

『いや、僕もその氣にならう。』

『それだけを君に云つて置けば僕も心残りはない。どれ引返さうか。』

二人は踵を返してすぐ倭文子の傍へ來た。

『たきつけは取れましたか。』

『ハイ……またゆつくり取にまゐります。』

『今から本家の別荘へお伴しませう、祖母が來て居るだけですから。』

『ハイ……』と良人を見ると、

『お邪魔に出ようかね。』

四人はまた林の中を中禪寺の方へ引返した。まだ一町とも來ぬ中、中禪寺の方から林の中の道路を白衣の巡査が、納戸風の矢絰に海老茶の袴を穿た、女學生風の色の蒼ざめた女を連れて來る後から、物珍らしさうに二三人の者がついて來るのに出逢つた。

一行はやり過して後姿を見返つたが、

『華嚴病らしいぞ。』と喬はいふ。

『ウム、どうも投身でも企だてたらしいね。』

『世間には實に意志の弱い馬鹿ものが多いな。』

『併し君、意志の弱い馬鹿ものも多いが、オセロはなほ大馬鹿ものだぞ。』

倭文子は何も云はなかつたが、何となく後惹れるやうで、心重く、海老茶袴の後姿を見送りながら佇すんだ。

## (三)

喬夫婦が日光から芝公園地内の自邸に歸つて來た時には、田鶴子は避暑かたく鎌倉の友の許へ出かけた跡で、留守は姑のお石一人が守つて居た。その三日目に倭文子は里歸りをして、また三日の後に歸つて來たが、今日はそれから五日を過ぎた。田鶴子はまだ歸つて來ず、喬は

毎日参謀本部へ出勤して、後は姑と下女ばかり、倭文子は客分でもあるやうに、小さくなつて氣を遣ひながら、兎も角もこの數日を過した。

姑の方でも當分客あしらひのつもりか、じつと黙つて倭文子の様子を觀察して居るらしく、口吐言をいふでもなく、ひどく當るといふ風もないが、ちよいと鋭い目を投げては、倭文子の一舉一動はいふまでもない事、新夫婦の間柄を監視してらしいので、倭文子の胸には絶えず一種の不穩を感じ始めたのである、また實際眞綿で首をしめるやうな、胸に當るあてしずりを聞く事もある。倭文子はどうかして姑の機嫌を取らうと勉めるけれど、まだ勝手も分らず氣質も分らず途方にくれる事ばかりなのである。

これは倭文子が日光から歸つた翌日であつたが、お石は倭文子に向つて、久松家へ嫁いで來てからは何事も實家の習慣を捨て、わが家の家風を守らねばならぬと言渡した。倭文子には久松家の家風といふものはどんなものか分らぬ。何事も命令のまゝであるが、まづどういふ事を守ればよいか教へて下さいといふと、それは口では云へぬ、自然に覺えて貰はなければ困るとの事だつた。當惑して後で喬に聞くと現在の久松家には何も家風はない、全體家風などいふものは、己にはどういふものか分らぬと言はれ、全く取付島を失なつたのである。併し此數日間には幸ひ大して困つた事もなく済んだ。

今朝は喬が出勤すると間もなく、お石は親類へ行くとして下女を連れて出て行つたので、後は倭文子とお磯のみの天地となる。お磯もやれ〜と思へば、倭文子もほつと氣が緩む。

『田鶴子様はいつ歸つていらつしやるのでございませうね。』

『この月中に歸つていらつしやるのだらうよ。』

『それでは數へる許でございませうね。御隠居様はきつと田鶴子様のお歸りを、心待して居らつしやるのでございませう。』

倭文子は伏目になつて黙つて居る。

『御隠居様はそれは田鶴子様がお可愛いのでございませう。旦那様には随分厳しくなすつたさうですが、田鶴子様にはもう目も鼻もなく、何でも仰しやる通りに遊ばして居らつしやるのだらうでございませうよ。』

『やうらしいわねえ。』

『田鶴子様がお歸り遊ばしたら、有る事無い事きつと御隠居様に告口なさるに相違ございませう。御用心遊ばしませう。』

『だけでも此方でそんな隔を設けて居たらいけないわ。』

『それはさうでございませうけれども、氣をお許し遊ばしますなと申上けるのでございませう。』

「……姑や小姑のある家へ来ると、誰でもこんな思をするのかしら。」

「それも先様によりけりでございますわ。あの日光で鍋島様が仰しやつて居らつしやいました。こちらの御隠居様は名代の嫉妬家で居らつしやいましたつて——」

「まだ一度でも私に嬌然と遊ばしたことは無い位よ。どうしたらお母様のお氣に召すのだから……」とほろりとして「磯もね、一所懸命お母様の御機嫌を取るやうにしておくれ。そして何でも心づいた御用はするやうにね……」

「ハイ、それは申迄もございませぬけれども、私が何か御用をいたさうと存じますと、お前は奥様が連て来たのだから、私達に構つてお呉には及ばないと仰しやるのでございます。でも奥様の仰しやりつけでございますからと申上ますと、まアそれは親切によく氣のつく事だ、併し年は取つてもまだこの通り達者で、お三どん代りも出来るし、下女も居るのだから、この上に餘計な人手は入らないと、奥様に云つて置くがよいつて、そんな事を仰しやるのでございますもの。……何でも御隠居様は奥様が私をお連遊ばしたのが御不満足なのでございますよ。」

「まアそれだと何うしようねえ。」と倭文子はほつと吐息をつく。

「私、追出されても、お嬢様のお傍を離れたうございませぬ。」

双方暫く無言で居たが、

「磯、私はね、この二日ばかり、ふら／＼と華嚴瀧の傍まで行つては、その都度巡察にとめられる夢を見て、びつしよりと汗をかくのよ。」

「あれ、お嬢様、厭な事を！ それはきつと日光で、婆やから厭な話をお聞遊ばしたり、巡察に連られた女學生を御覽遊ばしたりしたからに違ひございません。」

「だけでもほんとに恐かつたわ。瀧壺の底の方から、幽かに私の名を呼ぶの……」と後を見られるやうに云つたが、倭文子はこの時何かの物音を聞いたと思つて、愕然と耳を欷てた。

「おや！」

「あら、何でございますね。」と磯は氣味悪げに四邊を見る。

「誰か私の名を呼んでよ。」と倭文子はなほ耳を澄すのである。

「そんな事がございませぬのか。」

「御免下さい！」と玄關の方に幽かに聞ゆる女の聲音。

「おや……藤乃さんよ。」と倭文子の顔は俄かに冴た。

磯はあるか無いかに聞えた女の聲を、どうして藤乃と知つたかと訝かりながら、

「さうでございませぬかしら。」と立て行く、

果してそれは藤乃であつた。磯はそのまゝ案内して引返しながら、

「お嬢様はどうしてお遊ばしたのでございませう。やつぱり遠山様で居らつしやいました。」

「きつと匂がしたのでございませう。」と呟いた藤乃の顔が座敷に表はれる。

「まア、藤乃さん！ よく入つしつて下すつたわねえ。」

座に就くと改たまつた挨拶が換されて、それが一わたり済むと、

「貴嬢はいつ大磯からお歸り遊ばして？ 今朝も磯とまだ彼地に居らつしやるんだらうとお噂を申して居ましたのよ。」

「は、瑞枝様達の學校の準備があるものですから、昨日歸つてまゐりましたの。黒人のやうになつたでせう。ほゝ、毎日海へ入つてましたから。」

成程藤乃は焦て凛々しい顔立になつた。

「そんなでも無い事よ。蒼白いよりかいゝわ。」と倭文子は何の氣なしに云つたが、自分の顔を見られるやうに思つて眸子を反した。

果して藤乃は倭文子の顔を見入りながら、

「今朝は元園町の方へ電話で伺つて、それからあがつたのよ。貴女はいつごろお歸り遊ばして？」とかういふ中にも藤乃は鋭敏に倭文子の容子を觀察して、色艶も悪い方なれば、いくらか瘦せても居ると思ふと、始めから倭文子のこの縁談に進まなかつた事などを思ひ合せて、ま

づ同情の胸を傷めるのであつた。

「この半頃だつたのよ。……あの勝文様も樺太からお歸り遊ばしましたか。」

「いゝえ、來月の十日頃でなければ、お歸りになれないさうですの。……あのもう御出勤遊ばして居らつしやるんでせう。」と四邊を見廻はして、莞爾に「と思つて朝の中にあがつたのですか——」

「は……。それに今日は母も下女もみんな留守ですから、是非御緩くり……」

「まアさう、いゝ鹽梅でした事！」とほつとして「そしてお妹さんは？」

「月の初旬に鎌倉へ参りましたつて、まだ歸つて來ませんの。」

「さう。」と藤乃は意味ありけな笑顔を作つて「田鶴子さんと仰しやるんでせう。私、大磯で、

圖らず妙な事を聞いてまゐりましたよ。」

「おや、妹の事ですの。」

こゝへ磯が冷した麥茶を持つて來る。

「は、後でゆつくりお話いたしませう。貴女、今度の御旅行は如何でございました。」と磯と倭文子を見て美しく笑む。

「藤乃さん、勿來で錦子さんに逢つてよ。」

『錦子さんに！ まア不思議でございますね。』

『それが錦子さんばかりぢやないのよ。松平さんも御一緒なのよ。』

『まア！』と藤乃の眼は輝やく。

『あの立花さんの別荘が、平潟の傍の五浦と云ふところにあつて、そこへ松平さんと御一緒に入つしやつたんですつて。』

『まアさうですの。』と藤乃はアクセントを強く云ふ。

『やつぱし約婚をなさつたんですつて……御自分から仰しやつてよ。』

『ま、さう！ 何だか世の中は不思議なものねえ。』

暫らく言葉が絶えて、

『それから貴嬢は妹の事を仰しやつて居らつしやいましたね。』

『は、申上げない方がいゝのか知れませんが……貴女の御参考になる事ですから……』

『どうぞ仰しやつて下さいました。誰も聞手は居ませんから。』と倭文子は熱心になる。

『あの大磯でお心易くなつて、よくお話に入つしやる方がありましてね。その方がお妹さん——田鶴子さんと同じ級で居らつしやいましたつて、まだ女子大學に居る方なんですが、そのお話なのよ。——それは田鶴子さんが退學なすつた事情なんですの。』

倭文子は不思議さうに、

『おやさうですか。家事の都合で退學したやうに申して居ましたが……それぢやア何か事情があるんですかねえ。』

藤乃の語るところによると、今年の二月まで田鶴子と同級生に鈴江(假名)といふ、美しく、氣立も優しく、誰にも敵の無い娘があつた。ところが絶えず校長と教頭の許へ、鈴江が某大學生と通じて居て、折々密會するといふ、其場所や日時をまで擧げた投書が舞込み始めた。始めは鈴江の平生に鑑みて、何ものかの中傷だらうと、打捨て置いたさうであるが、はては女生徒の間にもさういふ噂が立やうになつて來た。併し多數の生徒は鈴江の同情者なので、耳を傾ける者は無かつたが、學校の方では捨置かねて内々取調べると、鈴江の舉動と投書と符節を合すやうなところがあるので、鈴江はたうとう校長の前へ呼出されて取調を受ける事となつた。併し調べて見ると、鈴江と大學生とはかねて許嫁の間柄である事と、破れた交際の無い事とが知れたので、鈴江は注意を受けたのみで事済となつたが、済ぬは投書者の落着である。殊に鈴江はそれを恥ぢて學校を退學して了つたのだ。

『それで、學校の方ではだん／＼詮索し始めて見ると、それが田鶴子さんと知れたばかりか、その大學生に、田鶴子さんから附録書をなすつた事實まで、擧つたんださうですの。で今度は

田鶴子さんが、學校には居られないやうになつて、公然の處分をされぬ中、御自分から退學遊ばしたのですつて……』

『まアそんな事があるんですかねえ。』と倭文子は殆んど信する事が出来ないほどに思ふのだ。

『それからこの話をなすつた方は、田鶴子さんのやうな嫉妬深い方はないつて、仰しやつて居らつしやいましたが……。その鈴江さんの事でも、何度となく、根よく跡を跟ていらつしたんですつて。』

倭文子はぞつと身ぶるひが出るほどに思ひながら、

『それはほんとうでございませうねえ。』

『話した方はいゝ加減の事を仰しやるやうな方ぢやありませんから、きつと事實に違ありませんよ。……貴女もまア大變なお妹さんをお持ち遊ばして——』

『藤乃さん、どうしたらいゝでせうねえ……。心配ですわ。』と途方にくれる風情である。

『そして御隠居様はどんな方で居らつしやいますの。』

『まだ一度も私に莞爾となすつた事は有りませんよ。それもこれもみんな私が行届かないからですが……』

『まア、そんなですの。』と藤乃はもういたいたしさに堪へぬ心地を覺えて『貴女も御苦勞をな

さいますわね。』

『私、ほんとに貴嬢が羨ましくなつてよ。』とほろりとなる。

藤乃は慰さむる言葉もなく伏目になつたが、

『でもね、貴女は敵を作る方ではありませんから、その中にきつと御隠居様も、お優しくなさるやうになりませう。お妹さんもいづれお嫁きなさるでせうから……。當分の御辛棒よ。』

座が濕つて来たところへ、磯が手を支へて、

『お嬢様、お琴でもお出し遊ばしたら如何でございます。』

## (四)

田鶴子は月の末日に歸つて来た。不思議に倭文子の案じて居たには引かへ、嫂に敵意を表するやうなところはなく、却つて好意を求めて来るやうな様子が見えるのである。母のお石に對しても、いろくくと倭文子を取なさうと勉める風を見せ、お磯に向つてもお石のやうに邪魔ものあしらひをするやうな素振は少しも見せぬ。これは倭文子や磯の最も意外とするところであつた。

倭文子は苦勞の一部が除かれたやうに思つたが、併し素より田鶴子を信頼するまでには至ら

なかつた。倭文子は田鶴子が自分のために勉めるにも拘はらず、その眼には自分に對する敵意が折に觸て閃めくのと、喬が自分に優しい言葉をかける時、また自分が喬に打解た素振を見せる時、田鶴子の顔には制へきれぬ嫉妬の表情の仄めくのを認めるのである。が兎にも角にも田鶴子が好意を示して居ると、姑の鋒鋦がちよいちよい表はれて来るけれども、田鶴子がそれに油を注ぐやうな事がないので、まづまづ無事に穩やかに、その日／＼が流れて行くのだ。田鶴子が歸つてから今日で一週間になる。世の中はそろ／＼と秋風立つて朝夕は肌涼しく覺ゆるやうになつた。

今日始めて丸髷に取上た倭文子の姿は、一段と美しくして可愛らしい。それは喬が一度丸髷に結つて見てはと云つた事があるところへ、昨日實家の母が来て、同じやうな事を勸めて行き、今朝は態と髮結をよこしてくれたからであつた。

結終つて髮結を返してから、倭文子は何か氣になるので、幾度鏡に對して格好を見たかも知れぬ。いつそこはしてはうかとさへ思つたが、磯が惚々として言分のない格好だと主張するので、兎も角喬に見せる事にしようと思つた、それにしてもお母様に見せぬのも如何と、心配しながら極り惡氣に姑の居室へ行つた。

倭文子が引返して来るのを待かねて磯、

「御隠居様は何と仰しやいました。」

「あのね、いゝ格好に出來た、廂髪よりもその方がいゝつて、始めて賞て仰しやつてよ。」

「おや、それは不思議でございますね。」と忍音。

「だけでもね、何だか氣に入らないやうでございますと申上るとね、お里からよこした髮結だもの、お氣に入らない筈があるものかねつて仰しやるのよ。」

「まあさうでございますか。」

「何だか私またこはして了ひたいやうな氣がしてよ……。お母様に御覽に入れて了つたから、こはす譯にもいけないわね。」

「さうでございますとも。そんなにいゝ格好にお出來遊ばしたものを、こはすといふ事がございますものか、なか／＼始めてお結遊ばすのに、かう落ついて言分なしに出來るものではございません。まあどんなにお似合遊ばしたと思召します。旦那様がきつとお喜び遊ばしませう。」

倭文子はやゝ根らんで莞爾しながら、また鏡を見つめて、

「前髪を廣く取過ぎたわね。」

「今まで廂にして居らつたのですもの、その位廣い方がお似合遊ばします。」

「さうかしら、髪がつまつて、根が下り過はしなくつて？」



『いええ、そりやアもうほんとにいゝ加減で、どんなにお上品でございませう、磯はもうく先刻ツから、お見惚申して居るんでございませうもの。』

かう云はれるとその實倭文子は嬉しい。全く言分なしの髷に出来たのでもあるが、心では自分ながら見惚るほどのので、前髪も望んで廣く取らしたのなれば、髷も根も丁度いゝ加減なり、どこに不足はないと思ふのである。

『おや、お嬢様でございませうよ。』

と見ると様傳ひに田鶴子の姿、

『姉さん、入つてもいゝ事？』と親しげに言葉をかける。

倭文子は笑顔を見せて、

『さア、田鶴さん、どうぞお入り遊ばせ。』

『ほんとにお邪魔ではありませんの。』と田鶴子は磯が手早く進める座布団の上へべたりと坐つて『まア姉さん、いゝ格好に出来たわねえ。』と赤い手柄のかゝつた髷を見つめる。

『どんなに可笑しいでせう。始めてですから格好も何もつきはしないのよ。』

『いええ、ほんとにいゝ格好よ。』となほ髷を見つめたまゝ。『さうね、慾を云は根がもつと上つて、髷が心もちつまると思ふわ……。髷が出ると意氣ですけれども、あんまり出たのは

厭らしいわねえ。』

お磯は傍で聞いて口惜しく思ふ。倭文子はそんな素振は見せぬ。

『そんなに髷が出てますかしら。』と後へ手をやつて見る。

『あら、姉さん、何も氣になさるほどぢやないわ。ねえ、お磯。』

『さうでございませうね。』

『兄さんのお好？ でせう。』と斯ういふ眼にはもう稲妻が閃めく。

倭文子はこんな事を云はれるのが、何より厭だ。併し慎しやかに、

『いええ……昨日の母が、勸めて行つたものですから……』

『おゝお里のお母さんと云へば、私、昨日は生憎留守にして、ほんとに残念でしたわ。富美子さんも連れていらつしやいましたの？』

『いええ、連れてまゐりませんでした。』

『富美子さんもこの間お母さんと鹽原へお出なさいましたつてね。』

『何でも十日ばかり行つて来たんでせうよ。』

併し田鶴子の放たうとする矢はそれではない。

『あのそれから、何とか仰しやる、書生さんが居らつしやいましたね。』

『正木でございますか。』

『さうく、たしかそんなお名ね。大學を優等で卒業なすつたつて方よ。あの方も助川の

方へ避暑にお出かけなすつたてせう。

倭文子も、次の室に退つて居た磯も共にハツと胸の騒ぐのを覺えた。倭文子は今更それを拒む事は出来ぬ。

『は、……何でも彼地の方に居ましたさうですが……でも田鶴さんはどうしてそれを……？』  
『えい、あのお留守中元園町へあがつた時、富美子さんがそんなに仰しやつて居らつしやいましたから。』と打笑みながら『地圖なんかで見ると、助川は平潟のすぐ近所ですわね。貴女はお遣なさらなくつて？』

『いゝえ。』とためらひながら『正木が彼地へ出かけたことは、歸つてから始めて聞いたのですわ。』

『おや、さうでしたの。ちや兄は存じませんのね。』と田鶴子の眼に光を持つ。

倭文子は黙つて首肯したが、心の寒くなるのを覺えた。併し田鶴子に意味があつて云つたらうとは信ずる事は出来ぬ。

『ですけども私、兄にお喋舌はしなくつてよ。』と笑んで『正木さんはもうお歸りなすつたでせ

うね。』

『母が歸つたやうに申して居ました。』

『姉さんのお乳母の子ですつてね。小さい時から貴女のお相手をして居らつしつたんでせう。』

『えい……』と迷惑さうにいふ。

『感心な方ですつてね。そりやア鍋島さんが兄の前で、どんなに賞ちぎつて居らつしやいましたらう。』

『おや、いつですか？』と倭文子は胸を躍らせた。

『いえ、あの姉さんのまだ入つしやらない前なのよ。』

『ま、さうですか。』

『早く家へいらつしやるといゝんですのに……。兄さんに正木さんの事をお話なすつて？』

『え。』と躊躇して『まだ別に……。』

『兄さんが正木さんとお友達になればいゝんですのにね。』

『でもほんの書生さんですから……。』と倭文子は小姑の心を測りかねるのである。

『姉さん、いつか正木さんに紹介して頂きますよ。まだほんとお目にかゝつた事は有ませんから……。』

「えい、いつでも御紹介してよ。兄さんにも遭つて置いて頂きたいと思つてますから……」  
 「私も兄さんに正木さんの事を善く云つときますよ。」一寸間を置いて「母にだつてもね、姉さんの事は、どこまでも、あの、何しますから……。私はこれでも貴女の味方なのよ、おほよ。」と無造作に笑つて見せる。

倭文子の胸に始めて或疑が起つた。そして心は更に／＼重くなるのを覺えた。併し感謝の容子を見せて、

「こんな不束ものですから……。この先どうぞよろしくお母様へ……」

「えい、もう女は相見互ですわ。私、決して姉さんの悪いやうにはしませんから……。その代り私もまた、何かお願する事があるかも知れませんよ。ほよ。」

「そりや何でも私に出来る事でしたら……」

「あの正木さんは洋行なさるやうに、富美子さんは仰しやつて居らつしやいましたが。」と田鶴子はどこまでも正木の縁を離れまいとする。

「彼地へ行くには行くんですが、それまでに大學院で一年ばかり研究する事があるんださうですの。」

「ぢやそれまではやつぱり元岡町に居らつしやいますの。」

「えい、さうなのよ。」

「田鶴さん、田鶴さん。」と奥で呼はる聲が聞える。

「おや、お母様がお呼遊ばしますよ。」

「ハイ。」と田鶴子は高く返事をしたが「なにいゝのよ。」とそのまゝ落ついて「ぢやあのやつぱり書生をなすつて？」

「えい、まだ代りの書生も出来ませんし……。尤も父も今ぢやあんまり用はさせませんけれども……。正木はどこまでも書生のつもりで居るんですから。」

「それぢやア何でもなすつて……？」

「え？」倭文子は田鶴子が母に呼れて居るのを案しながら「ちつとも骨を惜まずに下男代りの働も喜んでしますし、それに父の植木や畠いじりの相手も正木ですから、今急に居なくなると、父はよつほど不自由な思を——」

「田鶴さん！ 田鶴さん！」と母の聲が甲高くなる。

「ハイ、今行きますつてば。」と田鶴子は邪慳に叫んで立上る。  
 バタ／＼と母の居室へ来た。

「お母さん、何なの？」

「何なのぢやないよ。お前、暇さへあれば倭文のところへ行つてお出だが、何がそんなに面白いのだえ。」

「ちつとも面白くないわ。私、今姉さんを研究してるんだわ。」

「何ですつて、お前はお母さんを袖にして、何かといふと倭文の味方をおしだよ。喬と同じやうに倭文に巻れて居るんだから……」

「あらそんなこたないわ。姉さんに巻れてなんか居なくてよ。誰が姉さんになんぞ……」

「それならそれでいゝけれどもね、まア此頃の喬の仕打をどうお思ひだえ。私なんか邪魔ものだと言はない許ぢやないか。倭文ばかりが可愛くつて仕様がなから、私はお前の留守中どんなに齒痒い思をしたか知れやしないよ……。来たさうく、里の思惑もあるし、また嫁の氣心も分らぬと思つて、じつと辛抱して見て居る辛さはまアどなたつたらうね。」

「ほんとに兄さんと云へば、私なんかには近頃ちつとも構つて下さらなくてよ……。だから私だつて、姉さんが憎らしいわ。」

「何かといふと磯と二人で内証話をして居るが、きつと私達の陰口を利てるに違ない。覚えてお出がよい、いつまで餘計な小間使などを置せはしないから。」

「お母さん、何もお磯を出さなくつたつていゝわ。罪もないものを。」

「出す時には私が出します……。先刻も自慢さうに丸髷を見せに來たが——」

「きつと兄さんのお好なのよ。」

「大方そんな事だらうよ。」

こんな風な話が日の中に何度となく、お石と田鶴子の間にははされる。低氣壓は久松家の屋棟まで來て居るが、それでもまだ雨にもならず、風にもならずに濟んで居る。こんな風に今日の半日も暮れた。

午後も別に變つた事がなく、いつも二時半に歸る喬は、役所の都合か、寄途でもしたのか、四時間近になつてもまだ歸つて來ぬ。姑のお石は今日も懇意な先に用事があるとして、田鶴子を相手に仕度をして、今出掛ようとすると、倭文も磯も玄關へ見送に出る。

丁度そこへ元園町からの使が見えた。使者に立つたのは正木貞雄である。それはかねて喬から依頼して置いた古刀が手に入つたので、それを届け旁々老將軍から喬への傳言を依頼されて來たのであつた。

正木を見た時に、田鶴子の顔は赧らんで輝やくばかりに見えた。双方で會釋し合つたがまだ名乗合はせぬ。お石はそのまゝ玄關で貞雄に挨拶し、喬もすぐ歸るだらうから、暫らく待つて見るがよからうと言残して、田鶴子と何か小聲に話し合つた後出て行つた。

姑を送り出した倭文子は正木を頼みて、

『それぢやア正木、暫らく待つて見て下さい。』

『あの姉さん、貴女のお居室がいゝわ。』

『いや、こゝでお待ちませう。』

『でも貴君、こんなところで……ね、姉さん、貴女のお居室が涼しいでせう。』

『ですけども。』と倭文子は逡巡つて『應接室の方がようございませう。』

『……でも結構です。』

『應接室なんか暑苦しくつていけないわ。ぢやお座敷になさいましな……。あの母もさう申し出たのですから。』

正木は辞退するのを無理に奥の十畳に通される。それも田鶴子が先に立つて案内したのである。差當り倭文子は、貞雄を妹に紹介せねばならぬ。

『あの田鶴さん、正木でございますから、どうぞお心易くお願ひ申します。』

田鶴子はまた叮嚀に會釋して、笑顔と共に、

『どうぞ私こそお心易く……兼てお噂を申して居りましたので是非御紹介して頂かうと……それ今日姉さんにお願ひ申したところなのでございませう。』

『何分御懇意に願ひます。』と武骨に貞雄は答へる。

『あのどうぞこれから、お暇に入つて下さいませ。兄もお噂を申して居るんですから——』  
この最後の言葉は妙に倭文子の神経に響いた。それはまだ機會の無つたゆめかも知れぬが、倭文子は一度も喬の口から正木の名を聞いた事がないのである。こちらからも無論言出すべき事でもないで、ついぞ正木の噂をした事もないが、喬が却つて正木の事を、田鶴子と話し合ふ事があるとすれば、それは頗る奇妙である。或は田鶴子が話に色をつけるため、勝手な事をいふのかも知れぬ、と倭文子は僅かに考へた。

『私も今日はお兄さんにお目にかゝつた上、お話も伺ひたいと存じてあがつたのですが……』

『兄はなぜこんな遅いんですかしら。……姉さんには何とも仰しやいませんでしたの。』

『何とも云はずに出たのよ。でももう歸つて來ませうよ。』

『まア御緩くりなさいませう。』と田鶴子は正木に笑顔を向けて『貴君、助川の方は如何でございましたか。』

『え。』と貞雄は驚ろきながら『助川でございますか。』と倭文子の方を見る。

『あの富美子さんがそんなに仰しやつて居らつしやいましたから……。あのいつお歸りになりおして。』

『丁度五日前に歸りました。』

『随分焦たわね。』あまり黙つて居てはと倭文子が口を押む。

『ですけども、姉さん、私も負なかつてよ。』

『田鶴さんはそんなぢやない事よ。ねえ、磯。』

『さうでございますとも、そんなにお變りはないません。平生お色白の方は、日に當つてもお焦なされないものでございますよ。磯などは夏になりますと家にじつとして居ましても、こんなに焦て了ひますけれども——』

『いえ、私も焼性よ。随分黒くなつたわ。毎日海へ入つてましたもの。』

『貴嬢も海岸へでもお出になつたのですか。』

『えい、鎌倉の方に暫らく行つてましたから、こんなに眞黒になつて了ひました。』

かういふ話が十分ばかり續いた後、

『あの姉さん、私、ちよつと仕かけた用事を済してまゐりますから、どうぞ暫らく……。貴君、失禮を。』とちよつと貞雄の方に會釋して田鶴子は立上つたが、磯に目配して小聲に『あのちよいと。』

磯は田鶴子について座敷を出ると、田鶴子は通り様の此方まで来て立止り『お鮮か何か取つ

たらいゝわね。私今下女をやるから。』併し田鶴子はそのために磯を呼んだのではない。

『いえ、お嬢様、正木さんならようございませよ。』

『だつていゝわ。それからあのね……。暫らくしてからね。』とためらひながら『どうせ私も今仕かけた事があるんだし、やつと後でいゝんだけどもね。姉さんとお話が済んでから、正木さんに一寸私の居室まで入つしやつて下さるやうにつて、頼んで下さいな。』と追に極が悪さうに顔を赧めたがすぐ慌てたやうに繕つて『あの少しお話を伺ひたい事があるんですから。』とつき足した。

磯は驚ろき顔に目を睜つたが、

『おや、さうでございますか……。』當惑の容子で『正木さんはあの太變何ですから、物固い方

ですから、お嬢様のお室までとすと……。』

『おや、それぢや姉さんのお室でなきやいけないの。』と田鶴子の眼に稲妻が走る。

『あれさうではございません。』と磯は慌てゝ『では兎も角さう申上りますから……。』

『それぢや頼んでよ。』

田鶴子は眼に物を言はせて別れて行く。

## (五)

座敷の中で正木と差向になつた倭文子、生憎良人の不在のところへと、何か氣が咎めるやうに覚えながらも、相對して見れば懐かしく、話をしたい事は山ほどもあるやうに思ふのだ。それかと云つて何を話していゝか、急には緒も見出されぬ。また實際は遠慮が出て話されもせぬのだ。倭文子は話す事は元園町へ行つた折でも話されると、そんな事を考へる。

「日光の方へお廻になつたさうですな。」と貞雄が口を切る。

「あゝ、中禪寺に三日ばかり。」

「平潟でお別してから、私は非常にお案じ申して居ました。」と倭文子の顔色を伺ふ。

「難有うよ。いゝ按梅に。」と面はゆけに『あれからは何でもなくなつたのよ。口に出しても仰しやらないのよ。』

「さうですが、それを伺つて安心しました。やつぱり疑心暗鬼ちやアなかつたのですか。』

こゝへ磯は引返して来て、貞雄の言葉を小耳に挿みながら、

「正木さん、ほんとに重荷が下りたやうでございますよ。』

「まアそりやア何より結構です。それを伺つて置けば、今日お目にかゝるのにも非常に心持が

いゝ譯ですから……」

「旦那様の方はそれで一安心でございますけれどもね、私はお嬢様がお氣の毒でお氣の毒で……」

「フム。」と貞雄は氣がゝりの顔を磯に向ける。

磯は聲を潜めて、

「それと申すのは御隠居様に、今の田鶴子さん——」

「磯ッ、お前、何をお言だね。……正木、何でもないのでよ。みんな覺悟の上で來た事なんだから。」

磯はたしなめられて口を噤む。貞雄は黙つて腕を拱ぬいた。倭文子もそのまま伏目になる。

一寸座が減つたが、倭文子は主人役だけにすぐ顔を擧げると笑顔を見せて、

「正木、日光では鍋島さんにお目にかゝつてよ。』

「あゝ、さうですか。そりやアいゝ按梅でございましたね。』

「鍋島さんは是非貴君に遭ふと仰しやつて居らしてよ。あの今度英吉利へ行らつしやるさうですから。』

「英吉利へですか。』

『あゝ。……鍋島さんは英吉利へ行らつしやるし、貴君もまたその中に……』

『ほんとお嬢様のお頼になさる方は、なぜそんなに洋行なさるのでございませうね。』

正木も鍋島の洋行を倭文子のために悲しみながら、

『ですが鍋島さんのお母さんも、貴女には同情を表して居らつしやるでせう。』

『それは何かの時には、どこまでも引受るからと、仰しやつて居らつしやるさうですの。』とまた話が濕つて来る。

『併しお遅いですな。』と正木は恩賜の懐中時計を出して見て『また別に伺ひませうか。閣下の御傳言も、貴女に申して置けば、それで済ますから。』

『でも最少し待つて見て下さいな。お母様もさう仰しやつて居らつしやつたんだし。』

『あの、それからお嬢様。』と磯は摺寄つて聲を潜め『先刻田鶴子様が私をお呼遊ばしましてね、こちらのお話が濟次第、正木さんに田鶴子様のお室まで来て頂くやうにと私へのお頼なのでございませう。』

倭文子は呆れたやうに眼を睜りながら、

『あの田鶴さんが、自分の室へ正木を呼うといふの？』と穩かならぬ色が浮ぶ。

『でございませうから磯は、正木さんは始めてお出になつたのでもあり、お物固い御氣象ですか

ら……と申上ると、御不機嫌で、それぢや姉さんのお室でないといけないのつて、厭味を仰しやるんでございませうもの……。私仕方がございませうから、それなら申上て見ませうと、お受をして置きましたのですが……』

『さう。』と倭文子は色を變たが『……ぢやア仕方がないわね。正木に行つて貰ひませう。』と面白くない顔をして向直る。

磯は倭文子の傍を離れて、ほつと吐息を漏す。倭文子は一寸間を置いて、

『あの正木、田鶴さんがね、何か貴君にお話があるので、お居室まで来て頂くやうにと仰しやるのよ。』

正木は變な顔をして、

『令嬢のお居室へですか。こゝに入つしつて頂いたらいゝぢや有ませんか。』

『それが何かお話を伺ひたい事があると仰しやるんですから……大方こゝでは御都合が悪いのでございませう。』と磯が云ふ。

『そいつは迷惑ですね。……御主人のお歸もお遅いやうですから、今日はこれでお暇するとしませう、令嬢にはよろしくお断をしいて下さい。』

『けどもね、正木、一寸でも行つて頂かないと、私が困るんだから……』と倭文子は口より



は眼に物を云はせて懇ふる如く正木を見る。

倭文子の容子に、正木は田鶴子の要求を無にする不利を悟つて、

『さうですか、それぢやア一寸伺ひませう。』

『磯、お前、御案内を……』と倭文子は氣のない聲で云つた。

正木はお磯の後について、安からぬ心地を覺えながら二階へと導びかれる。後に残つて倭文子は物思はしけに懐に手を入れて長い溜息と共に首垂た。

二階を上る登音に、もうそれと知つた田鶴子は、莞爾と嬌羞を帯びて出迎へる。

『おや、正木さん！ さ、どうぞ此方へ。』

田鶴子は着物も帯も換て、リボンも異つたのを挿して居た。顔にも目に立ぬほど巧みに白いものを刷いてるやうに思はれた。磯は目敏くそれを注意しながら、氣のつかぬやうな顔をして差控へる。

正木を席に着かせると、田鶴子は磯を顧みて、

『それではお磯、後から私が正木さんを彼方へお連申しますからね……あの暫くの間よ。』

磯は何とも云へぬ不快を感じながら、倭文子も嘸と降て行く。

『何か私に御用でございますか。』と貞雄は犯すべからざる調子で尋ねた。

『えい、あの……』と追がに田鶴子は顔を染てもじくしながら『ちよいと申上て置きたい事が……』

『はア、さうですか。』とどこまでも眞面目である。

田鶴子は一寸取つきかねて居たが、

『あのまだ兄は歸つてまゐりますまいから……。どうぞ夫までは御緩くり、母も出がけにくれぐれも兄の歸るまでお待ち願ふやうにと、私に申してまつた位でございますから。』

『はア……併し餘りお遅いやうなれば、お暇を致したいと存じますが。』

『でもお歸し申すと母にも叱られますし、兄もどんなにか残念に思ふに相違ございません。かねて兄もお噂を申して居るのでございますから。』

『なほ暫らくお待ち事に致しませう。』

一寸話が途切れる。正木は黙つて無愛想に田鶴子の何事か言出すのを待構へる。田鶴子は恥かしさうな、媚のある素振をして、

『正木さん、私は一度貴君にお目にかゝつた事がございますよ。』

『さうでしたか。』と此方は解せぬ色。

『あれ、貴君はもうお忘れ遊ばしたのでございますね。どうぞ、さうでございます。私のや

うなものでございますから——』

貞雄は其實田鶴子の顔を思ひ出さぬでも無つた。たゞ話が面倒になるのを恐れて知らぬ容子をしたのである。が斯く艶めかしく云はれるといよゝ迷惑だ。いや迷惑よりも寧ろ癢に觸る。そのまゝ何とか云つて立去つて了ひたい氣がする。併し倭文子の迷惑になつてはと、ちつと辛抱しながら、

『そんな事がございましたかな。』

こゝへ下女が鉢を小皿に盛分けたのと、番茶を入れたのを持つてあがつて来る。

『あら、こゝへ持つて来たの？ 姉さんの方へ差上げて置たらよかつたのに——』

『奥様の方へも差上りました。』

『さう……まあいゝわ。』

下女は小皿と茶椀を、田鶴子と正木の前へ置いて降て往く。

『貴君、こんなものお口に合ひますまいが、折角取りましたから、どうぞお一ツお摘み遊ばして——』

貞雄はいよゝ迷惑である。

『はア、有難う——』

『貴君はお忘れ遊ばしましたのねえ？』

『え、何ですか。貴嬢にお目にかゝつたといふ話ですか。』

『女は一度覺えた方は、決して忘れは致しませんよ。』

『さうですか。』

『あれ、……いつでございましたつけ。私が始めて元園町へあがつた時でございました。貴君が姉さんとお間違なすつて、私にお言葉をおかけになつた事があるではございませんか。』

それをまで知らぬといふのも、あまり白々し過ぎると思つたので始めて思ひ出したやうに、

『あゝ、なるほどそんな事がありましたな……いやあの時は失禮しました。』

『それ御覽遊ばせ、姉さんの事を申上るとお思ひ出し遊ばすでせう。私、あの時のやうに残念だつたことはございませんでした。……ほんとに姉さんでなくつてお氣の毒でございましたこと——』とちつと正木の顔を見て微笑む。

正木は心の底を讀うとするやうに田鶴子を見返した。田鶴子も何かの僻見を持つて居るのではあるまいか。併し言葉咎めをする事も出来ぬ、そのまゝ苦笑して前の茶椀を取上げ、いたむばかりになつて居た茶を啜つた。

『貴君、お注ぎ申しませう。』と田鶴子は土瓶を取上げて膝を摺寄せる。

正木は慌てたやうに茶碗を茶卓へ乗せて前へ押やつた。田鶴子はそれへ八分ほどに注いで、『貴君、お口に合ますまいが、どうぞお一つ召上つて——。私もお招伴いたしますから。』と自分も小皿を取上げて『どうぞ貴君』

『はア、難有う——』

『貴君が召上つて下さらないと、私、何だか極りが悪うございますわ、』

餘り進められるので、仕方がなく海苔巻一ツを摘む。馬鹿々々しいと思ふので砂を噛むやうに味が無い。

『何か別にお話が無ければ、私はこれでお暇を致しませう。お兄さんにはまた出直してお目にかかりますから。』

『あら、ようございませう……。それに一寸お話申して置たい事もあるんですから……』

『は、何ですか。』

『あの、正木さん。兄は貴君に妙な邪推をして居るんでございますよ。』

正木は胸を騒がせながら、

『え、私に妙な邪推をして——？』

『は、尤もそりやほんの邪推なんですから、申上るのも馬鹿々々しい事ですが、兄は貴君と姉

さんの間柄を、何とか思つて居るんでございますわ。』

正木は鐵槌を腦天に打込まれたやうに覺えた。彼は今迄倭文子と受けて居るといふ話を聞いても、疑心暗鬼ではないか位に疑つて居た。殊に自分が忌はしき邪推の目的物であらうとは、殆んど考へて居なかつた。而も田鶴子の口から斯う聞くからは、倭文子の疑惑は果して疑心暗鬼ではなかつたので、自分も共に疑はれて居たものである事も明かである。何にしても怪しがる事と云はねばならぬ。

貞雄は色を變へて、面を正しながら、

『どうも實に奇怪千萬な事を承まはりますね。私に取つて容易ならん問題です。全體お兄さんは何を根據にさういふ邪推をなさるのですか。』

貞雄の態度があまりに嚴肅であつたので、田鶴子はいくらか氣を呑まれた形で、

『それは私も……不思議でならないのですが……何でも兄に中傷した人があるらしいのでございますよ。』

『いよく怪しからん事です！それが事實とすれば、私は如何なる手段を取つても、お兄さんの嫌疑を解かねばなりません。』

『ですけれど正木さん、兄はたゞ心に邪推してるばかりで、表面に持出した譯ではございませ

んから、貴方の方から何か遊ばすやうな事があつては、却つて妙な結果にならうと存じます。』  
『いや、それは御尤で……。たゞ私のためお嬢様——奥様がさういふ疑を受けて居らつしやる  
と知つては、私として安んずる事が出来ませんから。』

『ですが何も今日明日にと迫つた問題ではございせんわ。それに別段お氣遣なさらずとも、  
兄の邪推を避ける簡便な方法が外にあらうと存じます。』

正木は黙つて何にも云はぬ。田鶴子は微笑を帯びて、

『正木さん、邪推を避ける一番いゝ方法を私、申上ませうか。』

『それはどんな方法ですか。』

『それは……』と一寸ためらつて『貴君が夫人をお持遊ばすのでございます。』と顔を染出して  
云つた。

『はゝ、そんな事は問題になりません。』

『おや、なぜでございますの。』

『私は今日妻を迎へる身の上ではありませんから。』

『お迎へ遊ばす事が出来なければ、お約束なすつた丈でもよろしいではございせんか。さう  
すれば兄の邪推も自然に消えて、姉さんは幸福な家庭の女王となるのでございますもの。それ

に私が一方から兄を——繰なす、と云つては語弊がありますけれども、私のいふ事はよく信用  
しますから……』

正木は田鶴子と話し合つたところで、名案の出るでもなく、又相手に信用が置けるでもない  
ので、不快な女と不快な話をつゞけるよりは、いゝ加減に切上るため、

『兎に角私はこの問題について、熟考致しませう。……こんな事を伺つた矢先、お兄さんにお  
目にかゝるも何だか面白くありません。殊に今日は大分遅くもなりましたし、これでお暇いた  
しませう。』

田鶴子もこの上深く切込む不利を悟つたのか、

『さうでございますか。……それなら強てお止め致しませんけれども、今の事はどうぞよくお  
考へ遊ばして……私も内々兄の様子を注意してお知らせ申します。また中傷者の手がよりでも  
見つけましたら、それもお知らせ申しませう。……たゞ兄の邪推の事はどうか姉さんには仰し  
やつて下さいませんやうに……御心配をおかけ申す許りですから。』

『は、承知しました。』

『それでは彼方へお伴いたしませう。』

田鶴子が先に立つて二階を下て来ると、わが居室に引取つて居た倭文子は、それと見て元の座敷に迎ふべく立上る。

田鶴子はそのまゝ倭文子の居室の方へ進んで、

「姉さん、そこに居らつしやいよ。そちらへあがりますから。」と倭文子が迷ひさうにするのを構はず居室へ入つて「正木さん、どうぞこちらへ。」と離れて立つて居る正木を呼びかける。

正木はたゞ挨拶をして歸るだけと思ふので、そのまゝ倭文子が居室の闕の傍まで進んで、

「お嬢様、もう五時を過ぎましたが、御主人はまだ御歸りがいやうですから、今日は兎に角お暇致します。」

倭文子も時間が遅くなるのは氣になつて居たので、

「まア、さう、それなら留はしないけども……ま、一寸お入りなすつたら、取散して居ますけれどども。」

「一寸お入り遊ばせよ。」と田鶴子も口添をする。

正木は益荒からの傳言があるので一寸席に着き、

「折角お待申してお目にかゝらずに歸るのは、甚だ残念ですが、どうぞ貴女からよろしく仰しやつて頂きます。それからあの閣下からの御傳言は——」と持参の古刀に關した老將軍の傳言をちよつと述べて、そのまゝ立上る。

倭文子は正木の口から、田鶴子が長い間正木を引とめて何を話したかを知らたかつたが、機會がないので、そのまゝ玄關に見送る。

正木を送り出して間もなく、倭文子と田鶴子がまだ玄關で立話をして居るところへガラ／＼と俥が引込まれた。それは母親が歸つて来たのである。

お石は俥を下て玄關を上ると、咎めるやうな眼光を二人に投げて、

「お前達は玄關で何をして居るのだね。」

「お母さん、今正木さんがお歸になつたところなんだわ。」

「今そこで遭りましたが、それでは家から歸なのだね。……あの倭文さん。喬はもう歸つたのでせうね。」と持前の鏡どい眼を倭文子に向ける。

「倭文子は何か咎められたやうに覺え乍ら、

「いえ、まだお歸りになりません。……どうしたのでございますか……」

「まだ喬が歸りませんか？ 書生さんはどうしたのです。」

え？」と倭文子は母の詞が分らないので、顔色を伺ひながら「今まで待して置きましたが、お歸りが分りませんから、歸したところなのでございます。」

「まア、喬が留守なのに、五時過迄も留て置たのかえ！ 私がこゝを出たのは四時前ですよ。」とばかりと稻妻が倭文子を射る。

「ハ……イ。」と倭文子は顔を染て俯むいた。

お石はそれを尻目に見て、そのまゝツツとわが居室へ行つて了ふ。田鶴子は倭文子の耳元に、「姉さん、自分から待して置くやうにと云つた癖に……あんまり酷いは。私、母によく云つてきますから。」と囁やき棄て、母の跡を追うて行く。

お石は離れの隠居へ入ると、そのまゝ着換にかゝりながら、

「お前、呆れるぢやアないかね。喬が歸らないのに今までも止て置たのかえ。」

「さうよ。」

「お前もお相手でもして居たのかえ。」

「いゝえ、私は二階に居たわ。」

「全體あの書生をどこへ待して置いたのだえ。」

「姉さんのお室よ。書生ツて、大學まで卒業なすつた學士だわ。」

「なに倭文の室です？」とまた眼を光らせて「主人の留守に書生でも學士でも、若いものを自分の室へ入るとは、まア何といふ心得なのだらうねえ。」

「でもお母さん、正木さんと姉さんは乳兄妹で、お小さい時から、一緒にお育ちなすつたのですもの。」

「一緒に育つたものならどんな眞似をしてもいゝといふ法がどこにありますか。また書生も書生で圖々しいぢやないかね。」

「ですけども正木さんは、大學を卒業なさる時、銀時計まで頂戴した立派な方なのよ。何も正木さんが悪いのぢやないわ。」

「何にしても倭文の心得が違つてます。喬は一にも二にも倭文のする事といふと、よく見えるんだらうけれども、まさかこんなことまでいゝとはいふまい。よく私が云つて聞してやるから……。」

「だつてお母さん、そりやアあんまり酷いわ。姉さんだつて、兄さんがすぐお歸りなさると思へばこそなんですもの。」

「こんな事を云つてやらないと、仕舞には喬の顔にかゝるやうなことが出来ないとも限りませぬ。」

『でもお母さんが、兄さんの歸るまで、待つてるがいゝつて、正木さんに仰しやつたからだわ。』

『待たせるなら待たせるで、待たせて置くところがあります。』

『應接室は西日が當るからよ。』

自分の告口した通り兄に云はれては聊か迷惑である。田鶴子はなるたけ母の心を緩和しようとした。併し母がどれほどまで緩和されたかは、事實の上に見る外はない。

六時間近になつて喬は漸く歸つて來た。倭文子は機嫌よく出迎へて居室に伴ひ乍ら、

『今日はどんなにお待申して居りましたらう。どうしてお遅かつたのをごさいます。』

『後藤のところへ寄つたので、遅くなつたのだ。かういひながら軍服の鈕を外す後へ廻つて、

倭文子は上衣を脱取らせる。と今日始めて結つた丸髻の芳ばしい油の香氣が喬の鼻を撲つ。

『美しく出來たな。』と喬は妻の頭に目をとめて微笑んだ。それは玄關に出迎へた姿を見た時から、眼に付て居たのである。

『何だか變な格好でございますから。』と倭文子は初々しく顔を染て『こはして了解はうかと思つたんですけれども——』

『いや、どうしていゝ格好だ。廂よりはよつほどいゝぞ。』

『さうでございますか。』と、莞爾良人の機嫌がいゝので嬉しく『あのお留守に元園町から、書生の正木がお刀を持つてまゐりました。』

『おゝ、さうか。お父さんに御依頼して置たのだが、お手に入つたと見える。』とかさねく満足の容子。

『正木は四時頃にまゐつたのですが、父からの傳言を聞いて來たと申しますし、お母様のお詞もあり旁々、暫らく待たして置きましたが、お遅いので歸しましたのでございます。』

『ウム、さうか。』と前の通りの機嫌で『正木といふのはお前の乳母の子で、今度たしか大學を出たといふ男だな。鍋島が頻に賞て居たが、遣はんで残念な事をした。』

かう云はれると倭文子は嬉しく、ほつとしながら、

『正木も是非お目にかゝりたいと申して居りました。』

『その中にこちらへ呼んで、ゆつくり遭つて見やう。』

『どうぞさう遊ばして下さいまし、正木も嘸喜びませうから。』

この話の中に喬はズボンもシャツも脱終る。と倭文子は浴衣を後から着せかけて、

『すぐお湯にお召遊ばしますか。』

『お母さんはお入りなすつたかえ。』

「ハイ、多分お上り遊ばしましたらう。……磯が今湯殿へまゐりましたから……」  
 すぐ磯が引返して来て、お石が最早入浴了つた事を告げると、そのまゝ喬は磯に導びかれ  
 て湯殿に趣むく。

鳥の行水ほどに湯につかつた喬はすぐ風呂から上ると、そのまゝ一寸母の隠居へ顔を出し  
 て、

「お母さん、たゞ今、後藤へ寄つたので遅くなつたのですが、老人からよろしくといふ言傳で  
 した。」

かう云つてすぐ引退らうとすると、

「さうかえ。あの喬、ちよつとお待……。嫁が私の留守に、正木とやらいふ書生を、大變に長  
 く留て置いたさうでね。お餅の御馳走をしたり、大變なお取持をしたのですとさ。」

喬の眉はびりりと動いて、眼が燃ゆるやうに輝いたが、母の前何氣なく、

「あゝ、さうですか。」

「お前、さぞ満足だらうね。」

喬は鋭い眼光で母を見て、

「お母さん、貴女は倭文の事を何か變に取つてお出のやうですが、私へ傳言があるから待して

置いたので格別不思議もありますまい。殊にたゞの書生とは違ひますし、鮮位出したところで  
 何ですか。」

「喬、お前は嫁の事といふと、私が僻みでもするやうにお取だが、倭文は正木とやらを、應接  
 室へでも待して置く事か、自分の室へ入て置いたのですよ。」

喬の顔色は蒼くなつた。

「自分の室です？ そんな事はありますまい。」

「それ、それだからお前は嫁には眼が無いといふのです。」

「全く自分の室へ入れて置いたのなら、そりア不謹慎ですから、よく注意させませう。」

「子供の時から一緒に育つたからと云つて、嫁に来てまで、そんな事をするやうでは、お前が  
 大變に御吹聴の川上の家庭も知れて居ます。大方川上では倭文に勝手な眞似をさせて居たのだ  
 らうよ。」

「……………」

「お前の顔にでもかゝるやうな事が出来たら、もう取返しは附はしないよ。」

喬はきつと母を見て、

「お母さん、倭文はまさかそんな女ぢや有ませんぞ。」



「まアその了簡でお出がよい。……私はどうせ田鶴の方へ行きますから。」  
 「お母さん、貴女は何を仰しやるのです。そりやア倭文に不注意のところがあれば、充分に私  
 が取締ります。何も倭文に不貞な事でもあるやうな事を仰しやらすといふでせう。」  
 「おや、私は決して倭文がそんな大それた事までしたとは言いません。そりやアお前の思つて  
 通り、倭文は貞女に違あるまいけれどもね、昔から瓜田に杵とやらいふ譬もあり、そんな自墮  
 落な真似をするやうでは、末が案じられるといふのです。」

「だから注意する事にしたらいいでせう。」

「それならそれでいゝよ。……私達はたゞ見て居るとするから。」

「喬は面白くない顔をして歸つて来た。」

「倭文、私は今お前の事で、お母さんと言合をして来たのだ。」

「ハッと倭文子は胸元を刺れるほどの痛を感じて、偷むやうに良人の顔を見ると、  
 「おや、……さうでございますか。」と幽かな聲が僅かにその咽喉を漏れる。」

「全體お前はどこに正木を待たして置いたのだ。」

「ハイ、あの……」と胸を躍らせて「應接室へと存じましたが、田鶴さんがお座敷の方へ御案  
 内遊ばして了つたものですから……」

「それちやア座敷に通つて居たのだね。」

「ハイ。」

「座敷だけに待つて居つたのか。」

「ハイ、あの……」と倭文子は田鶴子の事を云つてよいやら悪いやら、答が曖昧になると、喬  
 の眼は燃て鋭く、

「さうであるまい。」

「……………」

座敷の隅に積みものをして居た磯は、倭文子の大事と、喬の前へ来て、

「旦那様、磯が申上げます。」

「磯、お前などの口を出すところぢやないよ。」と倭文子がたしなめるを、委細構はず、

「あの正木さんは田鶴子様が何かお話を伺ひたい事があると仰しやつて、長い間お二階のお居  
 間へお連れ遊ばしたのでございませう。」

「なに田鶴が二階へ連れて行つた？」と驚ろきながら「倭文、きつとさうか。」

「ハイ。倭文子は事實を答へるより外には途が無かつた。」

「フム、田鶴が——」と暫らく無言で「併し田鶴も田鶴だが、二階へ上る正木も正木だ。不謹

憐な男と見えるな。」と喬は猶激して居る。

『田鶴子様が私にお頼遊ばすものですから、正木さんには無理にお願申したのでございます。』と磯は辯護を試みる。

『それでは兎に角お前の室へ正木を待たせて置たのではないな。』

『ハイ、……たゞ歸り際に、田鶴さんが正木を妾の室までお連なさいましたけれども、それは父からの傳言を聞きましたとだけ、坐る間もなく歸りましたのでございます。』

『ウム、さうか。』と喬は救はれたやうな太い息を吐いた。

## (七)

その同じ晩、喬とお石、續いてお石と田鶴子の間に、次のやうな對話があつた。

『お母さん、だんく／＼して見ましたが、倭文の室へ正木を待たせて置いたといふやうな事實はありません。お母さんはどうしてそれをお確になつたのです。』

母はむつとしながら、

『どうしてと云つて……お前、また倭文に巻れて來ましたね。家の中のもの、目の無いものはかりでは有りません。田鶴も居れば富も居ります。』

『いや、田鶴などのいふ事をお信じなさるからいかんのです。』とかう強くいふ中にも喬の眼には多少内心の疑懼を示す不安の色が漂うて居る。

『田鶴の云ふ事がなぜ信じられません?』

『なぜと云つて田鶴は三十分以上も、正木を二階の室へ呼で話して居たのです。……また倭文が正木を待たして置いたのは、決して自分の室ではなく、座敷なのです。』

『何ですと、田鶴が正木を二階へ呼んだのです?』と妙な顔をして『お前、倭文がさう云ひましたか。』

喬はそれには答へず、詰るやうにきつと母を見て、

『お母さんは、あまり田鶴を放縱になさるから、このごろ生意氣にばかりなつていけません。勝手に書生を居間へ呼上るなど、怪しからん事で、貴女から厳しく仰しやつて下さい。』

お石は顔を膨らして、何とも云へぬ苦い様子をしたまゝ黙つて了つた。晝の中まだ云ひ足りない事があるので、今喬が來たを幸ひ、なほ嫁の不足を云つて退やうと思ふところへ、却つて反對な目に遭はされたのだから、悔しくてならぬ。それもこれも喬が倭文子にくるめられて來た爲だと思ふ。これまでわが子が向になつて自分に楯づくやうな事は無かつた。このごろになつては、毎日面白くない顔の合しづめである。みんな嫁の來たゝめだと思ふと、いよく倭文

子が悪らしい、喬が田鶴子に對して、兄らしい情の無いやうな事をいふのも、同じく嫁の爲めだと思ふ。重ね々腹立しくてたまらぬのだ。喬が歸ると早速田鶴子呼びつけた。

『お母さん、何なの。』

『何なのぢやアないよ。お前、今喬が私に逆振を食せに來たのですよ。お母さんはこんな悔しい目に遭つた事はありやアしない。』

『え？』と田鶴子は胸に當つて安からぬ心を感じる。

『いづれ倭文の告口だらうけども、喬はお前が今日長い事正木を二階へ呼あけて居たといふのですよ。』

田鶴子はハツと顔を染出したが、すぐ悔しさうな顔をして、腹立しけに、

『お母さん、兄さんは酷いわ。……正木さんを長い事二階へ呼上て居たなんて……私が呼上たんぢやアない事よ。』

『でもお前、その正木が二階へあがつたのはほんとうなのかへ。』と母はやゝ呆れ顔。

『そりやア、一寸あの……挨拶に、——お歸り際にお磯がついて、あがつてらつしたよけなんだわ。』

『おう、さうだらうね。』と母は得心したやうに首肯して『針を棒に告口したに相違ないのだ

よ。まアそれだけだつたのかへ。……、それからまた倭文の室に通つたのではなく、座敷へ待して置たのだつて——』

『まアさうですか。……まア巧い事を仰しやるわね。』と驚ろいたやうな顔をして『そりやアちよいと座敷へもお通りなすつたけども、姉さんのお室の方が涼しいからつて……すぐお室へお通しなすつたんだわ。私は嫌ですから、二階へ上つて勉強して居たのよ。』

『まアさうかへ。それならちやんと筋途が立つてます。何もお前が馴染もない書生を居室へ通すなんて、道理がないんだもの……。まア喬も喬だが、有りもせぬ告口をするとは何といふ嫁だらうねえ。』

『でもお母さん、こんな事で家庭の平和を害するのは厭ですから、どうぞ姉さんにも兄さんにも何にも仰しやらないで下さいまし。』

田鶴子は自らも心が咎めるが、倭文子が云はずともその事を云つたと思ふと、腹立しくつてならぬのである。その翌る日穩密に使つた下女のお富が、田鶴子に一條の告口をした。それは斯うである。

今朝例刻に喬を送り出した後、倭文子と磯が話をして居た。

『お嬢様、旦那様の御機嫌がお直り遊ばしたやうでございますね。』

『あゝ、まだ何だか打解なさらぬやうだけれども……』  
 『御隠居様は何でも御自身のお留守を幸ひに、貴女が正木さんを、お室へお入申したやうにお取なすつて、旦那様に仰しやつたのでございますよ。』

『……それはきつとそれに違ないの。』

『なぜそんなにお僻みなさるのでございませう。……併し磯の思ひますには、きつと田鶴子様が、御自分の事を棚にあけて、御隠居様に何か仰しやつたのに違ないと存じます。』

『まさかそんな事もあるまいと思ふけれども……』

『貴女はそんなお心で居らつしやるからいけません。田鶴子様は貴女には都合のよいやうな事ばかり仰しやいますけれども、決してお嬢様のお味方ではございせんよ。』

『……』

『昨日なども厚かましく正木さんを二階へお呼なすつて、何をあんなに長くお話して居らつしやつたのでございませう。きつともう正木さんに……ほゝ、……でございませう。ですから正木さんがどんなに御迷惑なすつたかと思ふと、私、正木さんにもお嬢様にもお氣の毒でなりません。』

『だつてお前、そんなに田鶴子様のことをお云ではありませんよ。……昨日でも私は、田鶴子

の事は何にも云ふまいとするのを、お前がたうとう旦那様に申上て了つたのだもの。』

『でも私、黙つて居られます事か、居られませんか、考へて御覽遊ばせ。磯が黙つて居れば、お嬢様のお辯解が暗くなつて、飛んだ御嫌疑までお受遊ばすところではございせんか。ですから磯は田鶴子様が正木様をお二階へお連なさいました事を申上たのでございます。』

『……でも田鶴子様の名を出さずに済む事だつたら……』

『お嬢様は何といふお優しいお心でございませう。せめて田鶴子様が、貴女の十分の一もお優しかつたら……それが鬼千匹どころか萬匹位なのでございますもの。全體昨日でも正木さんは田鶴子様にお目にかゝらずに歸ると仰しやるのを、後でお嬢様の御迷惑になつてはと、無理に願つて二階へ御案内したのでございませう。』

『もうそんな事いゝぢやないかね。』

『でもそれほどまでにしてあげてますのに、御隠居様に勝手な告口を遊ばすのでございませぬの……』

以上の話を下女のお富が襖の蔭で聞取つたのである。お富はお磯が奥様附の小間使として、いつも自分を目下に見て居るのが面白くなく、何でもお磯の缺點を探つては田鶴子やお石に告口しようと今までもかゝつて居たので。田鶴子に間諜の役目を云ひつゝかると、得たりや應とそ

の内職に取かゝつたのである。併し二人の話は充分には聞取れなんだ。十分に聞取れぬでもお磯を陥れる口實を得ればよいのである。

お富は偷聞を済すと、功名顔に急いで田鶴子の居室へ飛んで来た。

『お嬢様、たゞ今奥様とお磯が、ひそひそ話をして居りますのを、偷聞いたしてまゐりました。』

『おや、さう？』と田鶴子は讀まして居た小説が何かを伏せると、膝をお富の方に押向けた。

『昨日元園町からお出になつた、正木さんでございましたかね。あの方の事でお話をなすつて居らつしやつたのでございます。』

『フム、フム。』と田鶴子は眼を光らせる。

『あの、御隠居様が何か、正木さんの事について、旦那様に仰しやつたのはきつとお嬢様が自分の事は棚にあけて、御隠居様に告口をなすつたからに違ないつてお磯が申して居りましたね……お、それからあの何でござりますよ。正木さんが二階へお出になつた事を、旦那様に申したのも、お磯なのでございますよ。』

『え、それぢやア姉さんぢやなかつたの？』

『お話の様子では何でも奥様は、貴嬢のお名を出さずに済さうと遊ばしたのを、横合からお磯

がべら／＼申上げて仕無つたのでございますよ。』

『まア、さうかへ。』と田鶴子は許すまじき眼光に唇を噛しめる。

『そればかりではございませぬよ。奥様にお嬢様の事をいろ／＼と炊つけて……決してお嬢様にお油断をなすつてはいけない、味方と思つたら大間違だの、奥様の十分一のお情があつたら少しは女らしくなるだらうの、鬼千匹どころか萬匹だの、お轉婆の跳つ返りだの、ちつとも同情が無つて御隠居様そつくりだのと、それは／＼聞て居られないやうなお嬢様の悪口を申して居るのでございますよ。』

『お磯が、まアそんな事までいふのかへ。』と眼尻をキリ／＼と釣上て『私はよつほど磯をかばつて、お母さんにまで取なしてやつてるのに、恩を仇で返すなら覺えて居るがい。……まア何といふ失敬な奴だらう。きつと思ひ知らしてやるから。』

『あの御隠居様の事も、なぜあんなに僻が強いのだらうの、根性が悪いのだらうのと……それから仕舞にはあの……鬼婆のやうだのと……』

お富は何の分別もなくお磯の中傷を試みる中にも、人の言葉に託して聊か自身の溜飲を下やうとするところもあるのだ。實際代々の下女はみなお石を鬼婆のやうに思つて出て行くのである。

『お母さんの事までそんなに云つてるのかへ。』  
 『ほんとに私はお嬢様の事をいはれると、腹が立つて、腹が立つて、お磯どんに喰ついでやり  
 たいやうでございましたよ。』

『それから正木さんが二階へ入つた事で何か云つては居なくつて？』

『はい、それも申して居りました。何をあんなに長話をして居たのだらう、正木さんはどんな  
 にか迷惑をなすつたに違ない、ほんとに厚かましいにも程がある……。正木さんにも奥様にも  
 お氣の毒ですつて——』

『なに、厚かましいッて……。それから正木さんにも奥さんにもお氣の毒だ——』と田鶴子の  
 眼は異様に輝いて『そしてそれきりかへ。』

『はい、……外はよく聞えませんか……。』

『姉さんは何も仰しやらないのかへ。』

『奥様は何も仰しやしません。却つてお磯どんをたしなめてお出でございました。』  
 追にお富も倭文子には同情を寄せて居るのだ。

『お富や、たんとお禮をするからね、これからも氣をつけて居ておくれよ。』  
 お富を立去らせて、田鶴子はすぐ母の隠居へ出かけて行くと、いきなり、

『お母さん、あの、お磯を出しちまつて下さい！』

母は驚ろき顔に、

『お前、そりやア藪から棒に何をお云ひだねえ。』

『私、悔しくつて、あのお磯が姉さんに私の事を——お轉婆の跳ッ返りだの、姉さんの十  
 分の一も女らしいところがないの、鬼千匹どころか萬匹だの、ちつとも同情が無くつて、お母  
 さんそつくりだのと、そんな悪口をさんぐ云つてるところを、お富が偷聞して來たのですも  
 の。』

『え、まア、あれがそんな陰口を利てるのかへ、そして何ですつて、同情が無つてお母さんそ  
 つくりだつて——』とお石の顔にはむらくと青筋が立つ。

『そればかりぢやない事よ。お母さんの事を、あの——鬼婆ですつて——』

『まア何といふ不届ものだらうね。』と火のやうになつて『そんな大それた主人の陰口を利くも  
 のは、お母さんも一刻も家へ置く事は出来ません。早速倭文を呼つけて出す事にします。』

お石は倭文子が磯を連れて來たのが始めから面白くないので、來るさうくその手足をもぎ取  
 らうと企んで居たが、一度は田鶴子にとめられ、また機會もなく、そのまゝにして居たのであ  
 るから、今日こそいよいよもぎ離さずには置かぬと思ふのである。

母子の間にかういふ話があらうとも知らず、倭文子は磯を相手に針仕事にかゝつて居たが、暫らくするとお富が来て、

『奥様、御隠居様のお召でございます。』

倭文子は面白くない事のあつた昨日の今日なので、何事かと不安を覚えながら、早速姑の居間へ伺候すると、

『お母様、お召遊ばしましてございますか。』

『あい、呼びましたよ。』とまづ冷やかな姑の態度が倭文子の胸を打つ。

『……………』

『外でもないがね、お磯に暇を出して貰ひたいのです。』

倭文子の顔色は見る／＼青ざめ、わなわなと震へて暫らく言葉も出なかつたが、僅かに、

『あの磯が何か不調法を致しましてございますか。』

『私や田鶴の蔭口ばかり利て居るものは置く事が出来ません。』

倭文子は思ひ設けぬ事なので驚きながら、

『磯がお母様の蔭口などを申上るなど……私には合點がまゐりません。大方何かの間違でございませう。』

『お前、よくまア、しら／＼しくそんな事が云へますね。それやアお前のお氣に入だから、お前さんがさう仰やるのは尤もだけでも……併し倭文さん、私はこれでも蔭口を利てる事をちやんと突止めて居るのですよ。』

『……………でも磯がお母様や田鶴さんの蔭口を申上けるなど、決してそんな事はございせんから……………』

『これ／＼倭文さん、それではお前は、私が云ひがりをするとお云ひのかへ。』

『あれ、お母様、決してそんな事は——』

『此方はちやんと聞て居たものがあるのです。田鶴の事を鬼千匹どころか萬匹だの、跳ツ返だのと、さん／＼棚卸しをした上、私の事を言様もあらうに鬼婆だと云つたさうです。どうせ私は鬼婆です。田鶴が鬼萬匹なら私はその母だもの、お前さん達の眼には定めて鬼共が取巻いて居るやうに見えるのだらう。』

倭文子は餘りと云へば淺ましい難題と、當惑しながら、

『お母様、飛んでもない事を仰しやいます。勿體ないお母様に對し、何でそのやうな事を申上げませう。いかに磯が無教育のものでも、決して左様な事は……また私とても其様な恐ろしい事を申しますやうな女なれば、一刻も手元へ置きはいたしません。それは何かの間違でござい

ますから……これまでの不行届のところは、どうぞ御勘辨遊ばして——」

「お前がいくら云はぬと云つたところで、聞てたものがあれば仕方ありません。」

「それでも全く冤罪でございますから——」と倭文子は泣ぬ許に争ふのである。

「お前は私を言負す氣ですね。お前には喬といふ後楯がついてるから、どうせ私は勝つ事は出来ません。……併し倭文さん、この間私に何と云ひました、どこまでも家風を守ると云つた事を、よもお忘では有りますまいね。」

「は……はい。」

「それならあゝいふ餘計なものを召使つて居るやうでは、第一家風に合ひませんから出してお了ひなさい。」

久松家の家風といふものはどんなものか分らぬが、兎に角家風には従がはねばならぬ運命を持つて來て居るのだと思ふと、倭文子は近す言葉もなく、胸には刺されるやうな苦痛を覺ゆるのである。

「どうです。暇をお出しですかへ。」

「は……い、あの……磯を連れてまゐりましたのも、實は私が一向行届きませんものですから、せめて彼女でも居ましたなら、少しは私の足らぬところをと存じまして……」

「これ〜お前さんも子供では有りますまい。お嫁に來るのに一人で來られないやうなものなら、どうせ久松の家には向かないのです。華族様のお前のお里とは違ひますからね。」

「……」

「家風に合はぬ小間使を出して了ふ事が出来ませんかへ。」

「磯の不調法は重々私がお詫を——と皆まで云はせず、」

「磯の詫をせよといふのでは有ません。」

「は……はい、それでは喬も歸りました上……」

「お前の小間使を喬に相談する事がありますか。」

「はい……」

「家風に合ぬものは出してお了ひなさい。」

「はい、それでは暇をやる事に致しませう。」と聲を呑んで云つた。

## (八)

これは喬が今日參謀本部から歸つた後の事である。彼は妻から今日の有りし次第を聞いて、母の居間へ出かけて行つた。



離の間では今お石と田鶴子が何かひそひそ話をして居たが、機先を喬の姿が見えると、びたりと話を止めて、田鶴子は慌てたやうに立上り、目を欬てながら妙な顔をして黙つて室を立去らうとする。

「田鶴、何だ、その顔は——？」

「何でもよくつてよ。」

「人を見るとこそく逃出す奴があるか。全體お前は怪しからん女だ。」

「どうせ、さうよ。」と言捨て登音荒く機を踏ながら行く。

「お母さん、何ですあの歩きやうは？」

「どうせ倭文の様な譯には行きませんよ。」

喬は苦々しげに黙つて座に就き、

「お母さん、今日も貴女にいやな事を云はねばなりません。私が役所から歸つて来ると、磯が泣ながら荷ごしらへをして居るので、何をするのかと聞いて見ると、お母さんが暇をお出しなすつたといふ事なので——」

「これく、私が暇は出しません。大方倭文が出したのでせう。」

「倭文に暇を出させたのは貴女ですから同じ事せう。……何かお母さん始め田鶴の陰口を利

たさうで——」

「私の事を言様もあらうに、東婆などと云つたさうです。第一そんなものを置いては、お前がお母さんに済ますまい。」

「なるほどそんな無禮な事をいふものならば、一刻も置く事は出来ません。併し倭文も磯もそんな事は断じてないといひます。また私もそんな事をいふ女でない事は充分に信じて居ます。」

「喬、お前はいつも倭文に巻れてお出だから、倭文のいふ事を、何でも眞實におしだけれども、こちらはちゃんと偷聞して居たのですよ。」

「はゝア、さうですか。それちやアお母さんが偷聞をなすつたのですか。」

「いゝや、私ではありません。」

「田鶴ですか。」

「お前、誰が聞いても聞いた事が眞實なら、それでいゝぢやないか。」

「ウム、田鶴が偷聞したんですな。」

「田鶴子ではありません。」

「田鶴でもない？ それちやアお富が聞いたのでせう。お母さん、貴女はお富のやうなものゝいふ事を信用なさるのですか。」

お石は行詰つたが、

『第一あゝいふ餘計なものを置く事は家風に合しません。』とまた例の武器を唯一の楯として『この久松の家は嫁の里とは違ひます。主人の収入で生活を立なければならぬのだから、餘計なものを置く事は出来ません。』

『家風に合はぬと仰しやつたところで、何も突然に磯を連れて来た譯ではないでせう。始めからこちら承知の上では有りませんか。家風に合はぬと仰しやるなれば、なぜ始めにお断りになるのです。今更家風に合はぬと磯を返して川上や鍋島へどう言譯なさいます。』

お石はまたぐつと行詰ると、

『お前、私を遣込にお出なのですね。どうせ理窟ではお前には叶ひません。』

『お母さん、貴女は何です。やり込めに来たなど誰がお母さんを遣込に来るものが有りますか。……筋通の立ん事は世間へ通らんで有りませんか。』

お石は次第に自分の理窟が立なくなつて来るので、

『それでは私はもう何も口を利しません。』

『そんなに仰しやらずによく私のいふ事をお聞下さい。倭文も育つた家庭が家庭ですから、今すぐ小間使に暇を出されては途方に暮れるでせう。暫く久松家の生活に馴るまで、この上せめ

て二三ヶ月磯を置かして下さい。さすれば私が暇を出させますから。』

お石は一條の活路を見出した思ひで、

『ウム、それではきつと二三ヶ月たつたら返しますか。』

『返させます。』

『それならお前の勝手にしなさい。』

お磯問題のあつてから二三日後の土曜日である。夕暮間近田鶴子は何心なく二階から庭の面を見渡すと、兄の喬と倭文子の姿が眼に入つた。庭には四五本の餘り手入れぬ松やら櫻のやうなものがあるだけ、他は一面に芝を生したその前面に築山があつて、裾の方に紅白の萩が今を盛と咲て居る、その萩の中に夫婦は立つて居たのである。

田鶴子は二人が手を引合つて居るのだと思つてくわつと赤くなつたが、それは二人の動く時にさうでない事が確められた。併しそれにも拘はらず、二人が萩の中に睦言を交して居たものの如く思ふと、その刹那に猛烈な嫉妬の念が、制し得ぬまで田鶴子の胸に湧返つたのである。

田鶴子の嫉妬心は今新しく起つた譯では無論ない。只此時ほど烈しく起つた事はこれまでに無かつたので、何もかも前後の分別を忘れ夫婦の戀中を妨げねば甘心が出来ぬと思ふと、矢も

楯もたまたまぬやうに、母の居室へと降つて行つた。田鶴子の嫉妬は多分母からの遺傳であらう。女子大學でもその嫉妬心は事毎に鋒鋷を表はして居たので、そのため遂に退學の止むなきにさへ至つたのである。

血色を變たまゝ母の居室へ來ると、

『お母さん、ちよいと御覽なさいよ。兄さんと姉さんがお庭の中で、何か一時間も話をして居るのよ。』

かう聞くと娘の端たない舉動を訝がるよりも、まづ母の眼に燃るがとき火が點せられて、『なに、庭の中で一時間も話をして居る？』と庭の方へその同じ眼光を向たが、四ツ目垣と築山に隔てられて夫婦の姿は見えぬのだ。

『お母さん、立つたら見えてよ。手を引合つて何か話して居るんだわ。』

『え、まア！』とその瞬間にお石もまた田鶴子に劣らぬ烈しい嫉妬を感じるので、許すまじき色を浮かべながら『喬がどうしてあんなものになつたらうねえ。』と一語々に力をこめ、庭の方を睨んで云つた。

『そりやアみんな姉さんのせむだわ。兄さんはみんな欺されて居らつしやるんだわ。』

『さうとも、それに違ひないのだよ。みんな化されて居るんだから……。あれが來てから喬は丸

で生れ變つたやうな白痴ものになつて了つたのだもの……。この間だつてすつかりあれに丸められて、親の悪口を云ふ小間使を出す事も出来ないのぢやアないか。ほんとに何といふ意氣地なしになつたのだらうねえ。今にお母さんを追出せと、倭文が云つたら、きつとそれに加擔するだらう。……えゝ腹の立つ……。』と聲を震はせて『いつそもうこちらから倭文を追ひ出して――』

母の言葉が小耳に入ると、田鶴子はハツと我に返つた。彼女は矢も楯もたまたまぬ殆んど狂的の嫉妬心に驅れ、兄夫婦の間を離間して、一時の快を取らうといふやうな漠然たる感情の下に、二階を下て來たのであつたが、萬一倭文が久松家を出される結果になると、それはまた田鶴子のために大なる打撃であると、今始めて氣がついたので。今日まで田鶴子が倭文の味方にならぬまでも、これを陥れられないで居たのは、倭文によつて或助力を得ようといふ野心のためで、兄と倭文子の圓滿な戀中を見るのは、殆んど堪へぬところなのにも拘はらず、敢て大なる破壊を試みないで居たのである。兎も角も自分が或目的を達するまでは、倭文子を久松家から出す事は出来ぬのだ。とかう考へついたので、

『お母さん、姉さんをお出しなさるつてそんな事は出来ないわ。法律が許さない事ですもの……またお出しなさらなくつたつていゝわ。』

母も娘の手前、いくらかはしたなかつたと氣がついて、

『そりやア喬が丸められて居る中は、私の力で出す事も出来まいよ。併し此間のやうな不始末をする倭文の事だもの、この先喬の顔に泥を塗るやうな眞似をせぬとも限らない。そんな事があつては先祖の御位牌にも濟ぬから……』

『だつてお母さん、まさか姉さんにそんな事は無くつてよ。』

母子の間にどういふ感覺を起させて居ようとも知らず、倭文子は楽しく萩の中に語つて居る。それは倭文子が獨り庭に下て萩の間を分て居るところへ、喬がまた慕つて來たので、田鶴子に見下された時は、丁度二人が言葉を交し始めた時であつた。

倭文子は磯の問題のあつた後、一層姑や田鶴子に氣が置れて、心の安まる暇の無い中にも、たゞ良人が自分を保護してくれると思ふ一念が少なからず力草ともなり、慰安をも與へるので、また喬も母が倭文子を冷遇するのにくらか反抗の氣味もあつて、出来るだけは倭文子をかばつてやらうといふやうな氣になつて居るのである。

『貴郎、あの勿來で遭つた立花錦子さんが、いよ／＼來月の七日に御結婚なさるさうです。今日お手紙でございました。』

『お、松平が結婚するか。』と喬は云つたが別段の興味も惹ぬ様子で話頭を轉じ『今朝はお前、元園町へ行つて來たか。』

『ハイ、一寸行つてまゐりました。父も二三日の中に伺ふやうに申して居りました。』

『あゝさうだつたか。正木君も居つたかね。』

『ハイ……。この間お目にかゝらないのは残念だと申して居りました。』

『明日の日曜に、鍋島が出て来るやうな手紙をよこして居るから、もし來たら正木君も呼んで一杯やる事にしようか。丁度萩もよし月もよし。お前達も幼馴染が寄合へば興が深いだらう。』

『ハイ。』と莞爾『あの鍋島さんが入らつしやるのでございますか。』

この話をして居る時に、磯が庭へ來て、

『旦那様、鍋島様がお越遊ばしました。』

『なに、鍋島が來た。さうか、兎も角座敷へ通すがよい。』と磯を立去らせて『どうして今日出て來たのか知らん。』

『さうでございますね。』

『今夜、正木君は差支はないだらう。』

『ハイ、居りさへすれば必らずまゐります。』

二人が踵を返して座敷の椽先へ廻つた時に、鍋島は軍服のまゝで磯に案内されて來た。

『お、君が今日來るとは思はなかつた。』

『今朝横須賀から出て来たのだが、實は今夜有る筈の用事が無なつたので、君のところだから構はずやつて来たのだ。……やア倭文字さん、日光では失禮しました。歸つてからお訪ねしようと思ひながら、何のかのと忙しくつて、つい御無沙汰を……』

『いえ、私共こそいつも御無沙汰ばかりで、……日光ではいろいろ御厄介になりました……また先日は檜町へ出まして、お邪魔を致してまゐりました。』

『あゝ、母から聞きました。母も大變満足して居りました。』

『ところで鍋島君、君が今夜ゆつくりして居られるのなら、正木君を呼うと思ふが差支はあるまいね。』

『なに、正木君？ あの川上さんのところのか。』

『この間やつて来たのだが、生憎留守中で、まだ一度も遣はんで居るから。』

『いや、そりやア妙だね、是非呼んで貰はう。倭文字さん、是非お呼下さい。』

『それでは倭文、お前から使をやつて貰はうか。』

『ハイ、さういたしませう。』と倭文字は席を辭して居室へ行くと、机に向つて手紙を認ため始めた。

今お石のところから出て来て、ふとそこを通りかゝつたやうに、倭文字の室の前で立どまつ

た田鶴子、

『姉さん、今いらつしつたのは鍋島さんぢやない事？』

『あゝ、鍋島さんなのよ。』

『さう……。姉さん、どこへお手紙を——？』

『あの正木を呼べと申しますから——』

『あの正木さんをお呼びなさいませう？』と田鶴子の顔は冴渡る。

『丁度鍋島さんが入つしつたものですから……。あの田鶴さん、恐入りますが、お母様にちよいと鍋島さんのお出の事を、お知せ置下さいませんか。』

『はア、よござんす。』と首肯して『姉さん、正木さんには是非とも入つしやるやうに、貴女も書添へてお上なさいませう。』

『そりやア居ればすぐにまゐるに極つてますから……。』と書き終つた手紙の封をして磯に手渡す。

田鶴子はいそくと彼方へ立去りゆく。倭文字はその跡を見送つて、ほつとまた面白くない思に沈むのだ。

今朝元園町を尋ねた時、倭文字は正木にも遭つたので、此前田鶴子がどういふ話をしたかと

それとなく聞いて見たが、正木は田鶴子から聞いた喬の邪推云々の事に付ては何も云はなかつた。夫は倭文子と喬との間に現在の障も無い事を聞いて心を安め別に餘分の心配をさせるでもないと思つたからであらう。又倭文子も此間正木を長く待たせて置いたために母の機嫌を損じた事は語らず、唯お磯問題の起つた事だけを打明けて来たのである。倭文子の心には、嘗て何よりも心がよりであつた喬の邪推といふ事は、殆んど過去のものとして忘れられて居るので、現在たゞ恐るゝところは、田鶴子がまさしく正木に及ばぬ戀をして居ることが略推察されるので、正木のを拒絶した場合に、どんな結果を生ずるかといふ一事である。と思ふと成るだけ田鶴子を正木に近づける機会を作りたくない。従がつて今宵正木の来る事が少なからず氣がかりの種になる。今にも正木が来れば、田鶴子は人の客だとして遠慮する風でないから、わがもの顔に席へ連なるであらう。倭文子の心配はそれで、正木の来るために自分が直接累を受けるやうな事があらうとは思つて居らぬのだ。否却つて良人がよく正木の人物を知る事は、自分等の將來に都合のよい結果を來すに相違ないと信じて居るのである。

倭文子はすぐ磯と下婢を相手に酒の準備に取かゝつたが、その間にまづ取敢ず茶を入れて持つて出る。その時はお石も田鶴子も挨拶に出て居たので、倭文子はめいゝに茶を汲んだだけで、また勝手へ引退る。

戸外は最早薄暗く、十二日の宵月が淡く庭の片隅に光を投始めた。やがて酒の道具が運ばれて老母は引退り、田鶴子は残つて取持顔に杯盤の周旋に取かゝる。果して倭文子が案じた通り、こゝは自分が引受たから、姉さんは勝手元の方へおかゝりなさいと云はぬばかりの顔付である。

『田鶴、そんなにお前一人でお取持をせんでもよいぞ。倭文も磯も居るから……』

喬はいくらか嗜めるつもりで別段悪意があつて云つたのではなかつたが、田鶴子はぐツと胸にさへて、忽ち顔を赤くした。いつもならば鍋島の手前も構はず、席を蹴つて立去る位の事は仕兼ねが、今日はどうしてもこゝを離れる事は出来ぬと思ふのだらう。ちつと耐へて何氣なく笑に紛らし、

『でも鍋島さんは英吉利へ行つしやるのですもの……、暫らくお眼にかゝれませんから、今の中どつさりお取持をして置くのよ。』

『さうしてお土産をねだる氣か。』

『はい、それはもう……おほゝ。』

『いや、田鶴子さんのお取持では、どつさりお土産を持つて來なけりやアなりませんね。』と鍋島は快よけに打笑ふ。

『それでは私も田鶴さんに劣らず、お取持を致しませう。』と倭文子も愛想に言葉を押む。

『いやそれがいゝ、どつさり二人で御馳走するが善からう。』  
 四人は楽しい笑を合はして、拭つたやうに田鶴子の機嫌も直る。

## (九)

酒の一めぐり繞つた頃、元園町へ行つた使は歸つて來たが、丁度正木が散髪に出かけた後であつたといふ事で、歸り次第出向せると云ふ民子の傳言を聞いて來た。  
 暫らく正木が來ぬと思つたためでもあるまいが、田鶴子は「一寸」と座を外して座敷を去つて了ふ。

『正木君は今何して居るんです。』と鍋島は倭文子に話を向ける。

『あの毎日大學院の方に通つて居るさうです。』

『相變らず勉強して居ると見えますね。實に正木君の努力はえらい。他日必らず日本の學界に何かの貢獻をする人ですね。』

『さア、どうぞございますか。そんなになつて呉ますとようございますが……』

『いやあんな健實の人なら、確に成功しますよ。』

『早くやつて來ればいゝが——』と喬はいふ。

こんな話の中に随分杯を重ねたので主客は、や色に表はれて陶然となつた。

庭には月の光が隈なく冴渡つて、築山の邊では松蟲の啣く音も聞える。

二十分許の後に田鶴子は再びその席へ連なつた。

『姉さん、ほんとお遅いのね、正木さんは——』

『もう大抵まゐりませうよ。』

かう云合つてる時に正木は既に玄關に來て居た。取次に出た磯はすぐ座敷へ來て、

『奥様、正木さんがお出になりました。』

『おや、さうかへ……貴郎（と良人に向ひ）正木がまるつたさうでございます。』

『おゝそれではすぐこゝへ……お前、案内をするがよい。』

倭文子が立つて行く後から、田鶴子も立上つてついて行く。來すともこの事をと倭文子は不快を感じながら、

『田鶴さんもうようございませうよ。』

『いゝえ、お出迎してよ。』

倭文子は玄關に正木を迎へたが、田鶴子が居るので、たゞ形式的の言葉を交した後、田鶴子とも挨拶するのを待つて、

『それでは先刻から鍋島さんもお待氣ですから、すぐこちらへいらつしつて下さい。』  
先に立つて倭文子は例の通り、紺飛白の單衣に小倉袴をつけたまゝの正木を、奥へ導びき入  
れると、

『貴郎、正木でございませう。』と良人に紹介せる。

正木は叮嚀に會釋して初對面の口上と、遅刻の詫を簡單に述る。

『いやこれからはお互に……、お先へ始めて、この通りの爲體で甚だ失禮です。また先日は折  
角お出だつたのに、不在中で實に残念しました。』と喬は早や酔の廻つた爛々たる眼光で、ちつ  
と正木の顔を見入る。

正木は鍋島の方へ向直つて、

『鍋島さん、久振てお目にかゝります。』

鍋島は満面に笑を湛へて、

『全く久し振だね、明日は元園町へお尋ねするつもりで、その際は是非君にもお目にかゝらうと  
考へて居たのだが、今日久松君と一緒に君に遭ふのは實に愉快だ。今度は大學を出られたさう  
で……一つ君の卒業を祝ひませう。』と盃を差出す。

『さうですか。それでは頂戴いたします。』と盃を受るのを、待構へたやうに田鶴子が酌をす

る。

倭文子は正木のために席を設けて、

『正木さん、こちらへ。』と初めて正木の姓に敬語を加へて呼んだ。

正木は盃を返して引退る。その間なほ正木に眼をつけて居た喬は、妙な顔をして、

『正木君、僕はどこかで君にお目にかゝつたやうに思ふが——』

『は——さうですか。私は一尙お見覚えがありませんが……』

『はてな——。兎に角まづ一杯差上やう。』と盃をさして『どうです、この方は？』

『平生少しもやりません。』

『やれば行く方かね。酒の點については僕も全く知らぬが——』と鍋島は口を挿む。

『やれば行きますが、少しも甘い事がないので、やる氣が有りません。』

『はゝア、そりやア頼母しい方だ。酒をやらん男は相手にしくゝて困るが。』

田鶴子はまた妙に兄の顔を守つて居たが、

『兄さん、貴君、ほんとに正木さんのお顔にお見覚えがありますの。』

『ウム、どうも有るに違ないが——』とまた首を傾げる。

『まア、さうでございませうか……。では前元園町に入つしつた折にでも……』と倭文子も不審



を打つ中に何か安からぬ心が湧始めた。

『どうも不思議ですな。』と正木は別に心にとめる風も無く、鍋島に向ひ『鍋島さんは英吉利へお出になるさうで……いつごろお立ですか。』

『來月の中旬ごろ立つ筈で、君も彼地へ行くといふことだが、どこへ行くのかももう極つたのかね。』

『はア、まづ獨逸へ行く考です。』

『ウム、獨逸か。それぢやア久松君と同じだから都合が善らう。』

『あゝ、さうかね、僕はやはり英吉利だらうと思つて居たが、それなら實に好都合で、あちらには知つてるものもあり、旁々いろ／＼御周旋する事が出来ませう。』

『はア、出發の際はいづれ御紹介も願ひたいと存じて居ります。なほその中彼地のお話も承はりたいものです。』

『いつでも喜んでお話しませう……。併しなせすぐに行かんのですか。』

『今研究しかけた事が有りますから、それを仕上てから出かける考なので……』

『行ばどの位居るつもりかね。』と鍋島は問ふ。

『三年かゝるか、五年かゝるか分りません。』

『まア、そんなに長く居らつしやるんですの。』と田鶴子は眉を擧める。

『はア。』と正木の答は簡單である。

これから暫らく洋行談が始まつて、鍋島は頻りに人を笑はせて居たが、この間に喬は可なり酔の廻つて來た様子、併し大分機嫌がよさうなので、倭文子はいつか先刻の掛念を忘れて居た。

『貴君、お一ツ。』と鍋島に酌をしようと、彼は波々と注せて、

『倭文子さん、私は正木君や貴女と斯して一堂に會して居ると、子供の時の事が歴々と浮んで來ますよ。幼馴染が寄合ふといふ程愉快な事は有りませんね。』

『ほんとに左様でございますね……。貴君にいろ／＼お甘へ申した事を私はまだよく存じて居ります。』

『それでは奥さん、幼馴染の思出に一杯差上ませう。』と盃を飲干て倭文子に差す。

倭文子はつゝまじやかにそれを受けて、

『先程も頂戴いたしましたから、もう頂けません——』

『それでも今日は珍らしい會合ですから、少しは酔つてもいゝでせう。田鶴さん、波々と願ひますよ。』

『あれ、ほんとにいきけませんから……。田鶴さん、真似をして下さいませよ……。あら厭よ。』

『でもその位あがれるわ。』

倭文子は半分ほど飲んで、後は杯洗へあけ、懐紙で縁を拭取つて返さうとすると、

『いや、倭文子さん、正木君に差して下さい。幼馴染の記念です。僕は正木君から貰ひますから……。かう三人が寄るといふ機会は又と有はしませんよ。』

『さうでございますね……。それでは正木、私から——』

『頂戴いたします。』と正木は感謝の意を表して、倭文子の盃を受取る。同時に田鶴子の顔には、電光が閃いて、眼尻がきりりと釣上つたが、そのまま、済して素知らぬ風に横を向て了ふ。

『田鶴さん、お酌を……。』と鍋島は促がす。

『え、私——？』と恍けた顔で鍋島を見る。

丁度この時喬の頭に、忘れた記憶が突如として蘇へつたのである。と大喝一聲、

『馬鹿にするなッ！』

正しく晴天の霹靂なので、満座何事ともわかず、たゞ呆氣に取れる中に、喬は大きな洋盃を手に取上げて、

『田鶴、これへ注げ。』

田鶴子は自分が吐つけられたのか何かと一寸途迷ひながら、

『でも兄さん、そんな大きなもので——』

『注げと云つたら注がらんか。』

『はい。』と妹は中腹になつたので、波々とその洋盃に日本酒を注ぐ。

喬は一息にそれを飲干して、

『正木君、これで一杯行う。』と洋盃を正木に差つけた。

正木は黙つて洋盃を受取る。田鶴子はまた心配になつて、

『兄さんは亂暴だわ。正木さんはそんな大きなものでは——』と銚子を後へ引くと、

『お前には頼まん、倭文、お酌をせい！』と睨むやうに云つた。

倭文子はおどろししながら、躊躇つて居ると、

『なぜお酌をせんか。』

『構はんです。お注下さい。』と正木は冷静に云つた。

倭文子は震へる手に、こわく注終るとその途端、

『正木君、僕は今思ひ出したが、君には平湯で遭つたのだ！』

この瞬間に銚子は倭文子の手から落ちてころ／＼と田鶴子の膝の邊へ轉けた。併し酒は殆ん

ど無かつたのである。

「あら姉さん！」と田鶴子はそれを起して、鋭どく嫂の顔を見る。

倭文子は全く顔色を失なつて居た。

この間正木は自若として、

「私是一向覺が有りませんが——」かう云ひつゝ洋盃を一氣に傾け盡して、

「御返杯致します。」

「ウム、美事だ！ 君は知らんでも僕は知つとるぞ。……倭文、注け。」

代の銚子を持って来て居た磯は、わが計つた事の破綻を來したものと、獨りハラ／＼しながら生た空もないのである。

「は、はい。」と倭文子は僅かに顔色を恢復して、磯の手から銚子を取つたが「貴郎、そんなに召上つては——」といふ顔を喬は睨むやうに見て、

「お前の構つた事ぢやアない！」

「はい。」と倭文子は仕方がないので酌をする。良人の顔を見るにも堪へず、また見られるのも苦しいので、注ぐ時手が震へて溢した酒を拭ふに事よせて、眼に一杯の涙の顔を睨して了ふ。

田鶴子はじろ／＼と三人の顔を見比べて居る。鍋島は解釋に苦しむ様子で見居るに、

「おい、久松君、全體どうしたのだ。ひどく君は酔つたね。」

「何、酔つた？」と件の洋盃をまた半程傾けて「酔つてるかも知らん、恐らく泥酔してるだらう。……あゝ不味い酒だ！」といきなり洋盃を庭へ投げつけると、酒は縁に散つて洋盃は踏石に當つて月下に碎ける。

倭文子は自分の心が、その通りに碎けたかと思つた。喬は快よけに呵々と笑つて、

「久松喬は大馬鹿ものだッ！……どれ、席を變て獨酌しよう。ウキスキーを持つて來い！」と立上るかと思ふと、蹣跚として縁へ出た。

妻の役目として打捨て置く事は出来ぬ。わけてまた人の手前、倭文子は立上つて良人の介錯をしようとする、これより先に立上つた鍋島が、喬の手を捕へ、

「おい、何をいふのだ。僕も一緒に庭へ出よう。」とかう言ながら傍へ來た倭文子を顧みて「貴女は打捨てお置きなさい。久松君は暫らく僕が預ります。」

鍋島は久松の腕を捕へたまゝ、庭下駄を穿かせる、久松はなほ下まいとして、争ふはづみに中心を取そこねて跣足のまゝ庭へ下つて了つた。鍋島はそのまゝ久松を拉し、築山の裾の堀のところでまで連れて行つて、

「さア、こゝへ掛よう。實にいゝ月ぢやないか。」

「なぜ君はこゝへ引張つて来た？」

「なぜ引張つて来たかやアない。全體君はどうしたのだ？」

「君に説明をする必要は無いさ。僕は酒に酔つたのだ。」

「君は何かまた邪推を始めたのだらう。」

「あゝ酔つた。……久松喬は大馬鹿ものだ！」

「なぜ馬鹿なのか？」

「……君には何も云はん。また云ふ必要もない。」

「さうか。それなら強て何も聞くまい。……併し暫らくこゝで酔を醒し玉入。」

鍋島は喬の傍を離れて、冴渡る空を仰いで居たが、やがて朗々として吟詩を始めた。それを終ると、

「あゝいゝ月だ。……おい、久松、男兒まさに磊々落落々として、光風霽月の如くなるべしだぞ。」

「何だツ、……己だつて男だぞ。」

「それなら馬鹿な真似はせんか。」

「斷じてせん。」

「ウム。」と鍋島は喬の顔を打守る。

(十)

倭文子は正木の手前も面目なく、萎れて席に復すると、田鶴子はその場を繕つて、

「まア姉さん、どうしたんでせうね。あんなに酔ふ事などは、滅多にありませんのに……」

「ほんとにどうしたのですか。」と所在なげに和したが、併し胸にはひしと思ひ當るので、殊に喬が平濁で正木に遭つたといふ事は、倭文子に取つては由々しき大事である。どうこれを辯解して喬の疑惑を解く事が出来よう。正木と相談をしようにも、田鶴子が傍を離れやうとしないので、その意を通ずる事が出来ぬ。倭文子はたゞ途方に暮るばかりである。

田鶴子は略それを推しながら、何も分らない様子をして、今度は手持不沙汰に端座して居る正木に向ひ、

「正木さん、ほんとに貴君にはお氣の毒でございます。……ですけれども兄は全く酔つてるんですから……」

「折角来て頂いたのに……ほんとに……」と倭文子も涙ぐんだ眼に、言外の意を籠て正木を見る。